

沖山遺跡 (第1地点)

沖山西遺跡 (第1・2・3地点)

大町遺跡 (第2地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXII

2015

白岡市教育委員会



第1～3号炭焼窯跡完掘状況



第1号炭焼窯跡縦断面
(第1号炭焼窯跡の炭化室が第2号炭焼窯跡の前庭部に切られる)



第2号炭焼窯跡縦断面

序

このたび白岡市教育委員会では、『沖山遺跡（第1地点）・沖山西遺跡（第1・2・3地点）・大町遺跡（第2地点）』の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあって、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。平成24年10月には、目ざましい人口増加を背景に市制が施行されました。一方で郊外ではまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

今回報告する3遺跡5地点においても、今から4千年前の縄文時代中期を中心に重要な成果を得ることができました。また、沖山西遺跡第3地点で発見された炭焼窯跡は、自然科学分析の結果、奈良・平安時代のものであることが判明しました。白岡市域における古代の鉄作りの可能性を考えるうえで、貴重な一例を得ることができたものと思われまます。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成にあたり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

白岡市教育委員会
教育長 福原良男

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する沖山遺跡（第1地点）・沖山西遺跡（第1・2・3地点）・大町遺跡（第2地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。

沖山遺跡（第1地点）：白岡町（当時）大字小久喜258-2、-3、-4の一部
沖山西遺跡（第1地点）：白岡町（当時）大字小久喜字沖山183-1
沖山西遺跡（第2地点）：白岡町（当時）大字小久喜字沖山185-17、-18の一部、186-1、-4、-6、187-1の一部、-2の一部
沖山西遺跡（第3地点）：白岡町（当時）大字小久喜字沖山187-1の一部
大町遺跡（第2地点）：白岡町（当時）大字高岩字大町2120-3、-5
- 3 発掘調査は、白岡町教育委員会（当時）と白岡町遺跡調査会（当時）が主体となって実施した。沖山遺跡第2・3地点の調査費用は小野 博之氏が負担した。それ以外の調査費用及び整理作業費用は白岡町教育委員会が負担し、一部は国庫及び県費補助金を受けて実施した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。

沖山遺跡（第1地点）：平成20年8月12日
沖山西遺跡（第1地点）：平成22年4月13日から平成22年5月15日（国庫補助事業）
沖山西遺跡（第2地点）：平成22年3月30日から平成22年5月19日
沖山西遺跡（第3地点）：平成22年10月18日から平成22年11月14日
大町遺跡（第2地点）：平成21年4月13日から平成21年4月15日（国庫補助事業）
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。

沖山遺跡（第1地点）：平成20年8月29日付け教生文第5-477号（指示）
平成20年8月26日付け教生第110号（通知）
沖山西遺跡（第1地点）：平成22年3月4日付け教生文第5-1166号（指示）
平成22年4月19日付け生学第29号（通知）
沖山西遺跡（第2地点）：平成22年5月11日付け教生文第5-119号（指示）
平成22年5月12日付け教生文第2-12号（通知）
沖山西遺跡（第3地点）：平成22年10月18日付け教生文第5-759号（指示）
平成22年10月22日付け教生文2-39号（通知）
大町遺跡（第2地点）：平成21年4月30日付け教生文第5-37号（指示）
平成21年4月13日付け教生第34号（通知）
- 6 発掘調査は、松崎 慶喜と岡田 勇介が担当した。
整理作業及び報告書作成作業は、杉山 和徳と奥野 麦生が担当した。
- 7 遺物の実測は、奥野と杉山が担当し、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅲ～Ⅴの遺物：奥野

VI：パリノ・サーヴェイ株式会社

それ以外：杉山

- 9 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。

沖山遺跡：X = 279.526 m、Y = -14,442.670 m (6B114)

X = 290.000 m、Y = -14,490.000 m (遺跡原点)

沖山西遺跡：X = 776.792 m、Y = -14,823.311 m (6A782)

X = 710.000 m、Y = -14,770.000 m (遺跡原点)

大町遺跡：X = 2945.031 m、Y = -13,453.993 m (7B169)

X = 2950.000 m、Y = -13,490.000 m (遺跡原点)

巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。

- 10 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構：1/60 遺物：土器拓影図・石器実測図1/3、土器実測図1/4、1/5、1/6、鉄器実測図1/2

- 11 挿図と表中の略号は以下のとおりである。

H：住居跡 SK：土坑 SD：溝跡 SE：井戸跡 FP：屋外炉跡 P：ピット

- 12 住居跡内の数値は、検出面から底面までのピットの深度を表し、単位はcmである。

- 13 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である小野 博之様、土橋 明弘様、蛭間 健様、株式会社 菱沼建設様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。

石川 正美、鬼塚 知典、河井 伸一、小宮 雪晴、田中 和之、松崎 慶喜、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会生涯学習文化財課、白岡市文化財保護委員会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

- 14 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。

青木 美代子、大塚 泰穂、大野 美沙子、桂 都、黒田 雅之、坂田 玲子、佐藤 利勝、下田 富士子、下津 守徳、菅原 春男、高橋 安代、田中 玉緒、鳥海 恵子、中尾 亜子、中田 正男、中山 敏夫、日直 千代子、豊島 せつ子、藤巻 良雄、馬上 文彦、榎島 武二、増田 香織、水沢 和子、宮内 しろ子、宮内 光世、森本 美代子、山田 登、渡邊 宏士郎、渡辺 英子（50音順、敬称略）。

- 15 調査組織は以下のとおりである。

調査組織（平成26年度）

調査主体者 白岡市教育委員会

事務局 教 育 長 福原良男

教 育 部 長 高澤利光

生涯学習課長 河野 彰

生涯学習課長補佐 黒須靖之

学習支援担当／
文化振興担当主査 奥野麦生（調査担当） 同主事 杉山和徳（調査担当）

目 次

卷頭図版	(4) 屋外炉跡……………67
序	(5) グリッド出土遺物……………68
例言	4 第3地点の遺構と遺物……………71
目次	(1) 住居跡……………71
	(2) 土坑……………72
I 調査の概要……………1	(3) 溝跡……………79
1 調査に至る経緯……………1	(4) 井戸跡……………79
2 調査の経過……………1	(5) 炭焼窯跡……………81
	(6) グリッド出土遺物……………87
II 位置と環境……………3	V 大町遺跡(第2地点)の調査……………88
1 遺跡の立地と地理的環境……………3	1 遺跡の概要……………88
2 歴史的環境……………3	2 遺構と遺物……………88
	(1) 溝跡……………88
III 沖山遺跡(第1地点)の調査……………9	(2) 井戸跡……………90
1 遺跡の概要……………9	(3) 屋外炉跡……………90
2 遺構と遺物……………9	
(1) 住居跡……………9	VI 自然科学分析……………91
	1 沖山西遺跡(第3地点)出土炭化材の
IV 沖山西遺跡(第1・2・3地点)の調査……………14	放射性炭素年代測定……………91
1 遺跡の概要……………14	
2 第1地点の遺構と遺物……………14	VII 考 察……………94
(1) 住居跡……………14	1 炭焼窯跡の構造と年代……………94
(2) 土坑……………21	2 白岡市域の炭焼窯跡と古代製鉄……………95
(3) グリッド出土遺物……………25	
3 第2地点の遺構と遺物……………27	写真図版
(1) 住居跡……………27	報告書抄録
(2) 土坑……………59	
(3) 溝跡……………64	

挿 図 目 次

第1図 沖山遺跡・沖山西遺跡と周辺の遺跡分布図……………5	第4図 沖山西遺跡の位置と発掘調査区……………7
第2図 大町遺跡と周辺の遺跡分布図……………5	第5図 大町遺跡の位置と発掘調査区……………8
第3図 沖山遺跡の位置と発掘調査区……………6	第6図 沖山遺跡(第1地点)全測図……………10
	第7図 沖山遺跡(第1地点)遺構実測図……………11

第 8 図	第 1 号住居跡出土遺物 (1) ……………	12	第 45 図	第 9 号住居跡出土遺物 (2) ……………	50
第 9 図	第 1 号住居跡出土遺物 (2) ……………	13	第 46 図	第 10 号住居跡 ……………	51
第 10 図	冲山西遺跡 (第 1 地点) 全測図 ……………	15	第 47 図	第 10 号住居跡出土遺物 ……………	52
第 11 図	第 1 号住居跡 ……………	16	第 48 図	第 11 号住居跡 ……………	53
第 12 図	第 1 号住居跡遺物分布図 ……………	17	第 49 図	第 11 号住居跡出土遺物 ……………	54
第 13 図	第 1 号住居跡出土遺物 (1) ……………	18	第 50 図	第 12 号住居跡 ……………	55
第 14 図	第 1 号住居跡出土遺物 (2) ……………	19	第 51 図	第 12 号住居跡出土遺物 (1) ……………	57
第 15 図	第 1 号住居跡出土遺物 (3) ……………	20	第 52 図	第 12 号住居跡出土遺物 (2) ……………	58
第 16 図	第 2 号住居跡 ……………	22	第 53 図	第 8～19 号土坑 ……………	60
第 17 図	第 2 号住居跡出土遺物 ……………	22	第 54 図	第 20～28 号土坑 ……………	62
第 18 図	第 1～7 号土坑 ……………	23	第 55 図	第 1 号溝跡 ……………	64
第 19 図	土坑・グリッド出土遺物 ……………	24	第 56 図	冲山西遺跡 (第 2 地点) 溝跡・ピット 配置図 ……………	65
第 20 図	第 6 号土坑出土遺物 ……………	25	第 57 図	土坑・溝跡出土遺物 ……………	66
第 21 図	冲山西遺跡 (第 2 地点) 全測図 ……………	28	第 58 図	第 1～3 号屋外炉跡 ……………	67
第 22 図	第 3 号住居跡 ……………	29	第 59 図	グリッド出土遺物 (1) ……………	69
第 23 図	第 3 号住居跡遺物分布図 ……………	30	第 60 図	グリッド出土遺物 (2) ……………	70
第 24 図	第 3 号住居跡出土遺物 (1) ……………	31	第 61 図	冲山西遺跡 (第 3 地点) 全測図 ……………	72
第 25 図	第 3 号住居跡出土遺物 (2) ……………	32	第 62 図	第 13 号住居跡 ……………	73
第 26 図	第 3 号住居跡出土遺物 (3) ……………	33	第 63 図	第 13 号住居跡・土坑・溝跡・グリッド 出土遺物 ……………	74
第 27 図	第 3 号住居跡出土遺物 (4) ……………	34	第 64 図	第 29～36 号土坑 ……………	75
第 28 図	第 4 号住居跡 ……………	35	第 65 図	土坑出土遺物 (1) ……………	76
第 29 図	第 4 号住居跡遺物分布図 ……………	36	第 66 図	土坑出土遺物 (2) ……………	77
第 30 図	第 4 号住居跡出土遺物 (1) ……………	37	第 67 図	土坑・井戸跡・グリッド出土遺物 ……	78
第 31 図	第 4 号住居跡出土遺物 (2) ……………	38	第 68 図	第 2 号溝跡 ……………	80
第 32 図	第 5 号住居跡 ……………	39	第 69 図	第 1 号井戸跡 ……………	80
第 33 図	第 5 号住居跡出土遺物 ……………	40	第 70 図	炭焼窯跡全体図 ……………	82
第 34 図	第 6 号住居跡 ……………	41	第 71 図	第 1 号炭焼窯跡 (1) ……………	83
第 35 図	第 6 号住居跡遺物分布図 ……………	42	第 72 図	第 1 号炭焼窯跡 (2) ……………	84
第 36 図	第 6 号住居跡出土遺物 ……………	43	第 73 図	第 2・3 号炭焼窯跡 (1) ……………	85
第 37 図	第 7 号住居跡 ……………	44	第 74 図	第 2・3 号炭焼窯跡 (2) ……………	86
第 38 図	第 7 号住居跡出土遺物 ……………	45	第 75 図	大町遺跡 (第 2 地点) 全測図及び 遺構図 ……………	89
第 39 図	第 8 号住居跡 ……………	46	第 76 図	溝跡・グリッド出土遺物 ……………	90
第 40 図	第 8 号住居跡遺物分布図 ……………	47	第 77 図	白岡市域の炭焼窯跡と製鉄関連遺跡の 分布 ……………	96
第 41 図	第 8 号住居跡出土遺物 ……………	47			
第 42 図	第 9 号住居跡 ……………	48			
第 43 図	第 9 号住居跡遺物分布図 ……………	49			
第 44 図	第 9 号住居跡出土遺物 (1) ……………	49			

表 目 次

第 1 表 周辺遺跡地名表……………	6	第 5 表 沖山西遺跡（第 3 地点）出土石器 計測表……………	87
第 2 表 沖山遺跡（第 1 地点）出土石器 計測表……………	13	第 6 表 放射性炭素年代測定及び暦年較正 結果……………	93
第 3 表 沖山西遺跡（第 1 地点）出土石器 計測表……………	25		
第 4 表 沖山西遺跡（第 2 地点）出土石器 計測表……………	71		

写真図版目次

巻頭図版 1 第 1～3 号炭焼窯跡完掘状況	第 6 号土坑断面
巻頭図版 2 第 1 号炭焼窯跡縦断面 第 2 号炭焼窯跡縦断面	第 6・7 号土坑
図版 1 掘削作業状況 実測作業状況 現地説明会の様子（1） 現地説明会の様子（2）	図版 7 第 1 号住居跡出土遺物 第 2 号住居跡出土遺物 第 5・6 号土坑・グリッド出土遺物 第 6 号住居跡出土遺物
図版 2 遺構確認状況 炉跡検出状況	図版 8 調査区全景（北から） 調査区全景（南から）
図版 3 第 1 号住居跡出土遺物（1） 第 1 号住居跡出土遺物（2） 第 1 号住居跡出土遺物（3）	図版 9 第 3 号住居跡 第 4 号住居跡 第 5 号住居跡
図版 4 調査区全景 第 1 号住居跡	図版 10 第 6・7 号住居跡 第 8 号住居跡 第 9 号住居跡
図版 5 第 2 号住居跡 第 1 号住居跡遺物出土状況 第 1 号住居跡炉跡	図版 11 第 10 号住居跡 第 11 号住居跡 第 12 号住居跡
図版 6 第 1 号土坑 第 2 号土坑 第 3 号土坑 第 4 号土坑 第 5 号土坑 第 6 号土坑遺物出土状況	図版 12 第 3 号住居跡炉跡 第 12 号住居跡炉跡 第 9 号土坑 第 11 号土坑 第 12 号土坑 第 16 号土坑 第 17 号土坑

- 第20号土坑
- 図版13 第21号土坑
第22号土坑
第23号土坑
第24号土坑
第25号土坑
第26号土坑
第27号土坑
第28号土坑
- 図版14 第1号溝跡
第1～3号屋外炉跡
- 図版15 第3号住居跡出土遺物 (1)
第3号住居跡出土遺物 (2)
第3号住居跡出土遺物 (3)
第3号住居跡出土遺物 (4)
第4号住居跡出土遺物 (1)
- 図版16 第4号住居跡出土遺物 (2)
第5号住居跡出土遺物
第6号住居跡出土遺物
第7号住居跡出土遺物
第8号住居跡出土遺物 (1)
第8号住居跡出土遺物 (2)
第9号住居跡出土遺物 (1)
第9号住居跡出土遺物 (2)
- 図版17 第9号住居跡出土遺物 (3)
第10号住居跡出土遺物
第11号住居跡出土遺物
第12号住居跡出土遺物 (1)
第12号住居跡出土遺物 (2)
第12号住居跡出土遺物 (3)
第27号土坑出土遺物
- 図版18 第12号住居跡出土遺物 (4)
第10・12・13・21・23・24・26～28号土坑
出土遺物
第1号溝跡出土遺物
- グリッド出土遺物
- 図版19 調査区全景
第13号住居跡
- 図版20 第29号土坑・第1号井戸跡
第30号土坑
第31号土坑
第32・33号土坑
第34・35号土坑
第36号土坑
- 図版21 第2号溝跡
第1～3号炭焼窯跡
第1号炭焼窯跡断面
第1・2号炭焼窯跡底面
第2・3号炭焼窯跡底面
- 図版22 第13号住居跡・第29・31号土坑・グ
リッド出土遺物
第29号土坑出土遺物 (1)
第29号土坑出土遺物 (2)
第29号土坑・グリッド出土遺物
第30号土坑・第1号井戸跡・グリッド出
土遺物
- 図版23 第29号土坑出土遺物 (3)
第29号土坑出土遺物 (4)
第29号土坑出土遺物 (5)
第29号土坑出土遺物 (6)
第29号土坑出土遺物 (7)
第1号井戸跡出土遺物 (1)
第1号井戸跡出土遺物 (2)
第1号井戸跡出土遺物 (3)
第1号井戸跡出土遺物 (4)
- 図版24 調査区全景
第1～3号溝跡
- 図版25 第1号井戸跡
第1号屋外炉跡
第1・2号溝跡・グリッド出土遺物

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km²の町で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市域の中央部を南北にJR東北本線（宇都宮線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま・栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と大山村及び日勝村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま・栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅が目立って増え、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する沖山遺跡（第1地点）、沖山西遺跡（第1・2・3地点）、大町遺跡（第2地点）の発掘調査は、以下の経緯で実施された。

2 調査の経過

沖山遺跡（第1地点）は、平成20年8月12日に実施した試掘調査の結果を受け、同日中に発掘調査を行った。調査地点は遺跡の南西端に位置し、標高は約10mである。

沖山西遺跡（第1地点）の発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成22年1月29日	試掘調査実施
4月13日	表土除去、周辺環境整備、基準杭設定
4月20日～5月12日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
5月15日	調査終了

沖山西遺跡（第2地点）の発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成22年2月8日～10日	試掘調査実施
3月30日	調査区西半部表土除去
4月6日	周辺環境整備、基準杭設定
4月7日～27日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
4月30日～5月6日	排土反転、調査区東半部側表土除去
5月7日	基準杭設定

5月10日～17日 遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
5月19日 調査終了

沖山西遺跡（第3地点）の発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成22年9月6・7日 試掘調査実施
10月18日 表土除去
10月19日 周辺環境整備、基準杭設定
10月20日～11月8日 遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
11月17日 調査終了

大町遺跡（第2地点）は、平成21年3月15日に実施した試掘調査の結果を受け、同年4月13～15日に発掘調査を行った。調査地点は遺跡の北西端に位置し、標高は約9mである。

II 位置と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

沖山遺跡と沖山西遺跡の位置する地域は、近世村名をとって小久喜地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台の台央部から東縁部にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。また支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、東縁は沖積低地との差が不明瞭なのに対し、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するという特徴がある。

大町遺跡の位置する地域は、近世村名をとって高岩地区といわれ、地形的には大宮台地慈恩寺支台の西縁部近くにあたる。慈恩寺支台は南西の元荒川、東の古利根川によって画された独立した台地である。北西から南東に9km程延びており、元荒川及びその支流の開析を受けている。北は久喜市太田袋付近から、南は春日部市花積付近まで展開する。支台東側から南端部までは中川低地に面し、西側は近世初頭まで利根川の旧流路であった日川低地に面している。また、慈恩寺支台の北部は、中川低地からの小支谷が複雑に入り込んでいる。

慈恩寺支台は周囲の沖積低地との比高差や支谷の開析状態に特徴がある。北部は関東造盆地運動の影響により沖積低地への埋没化が顕著である。台地南縁部の春日部市花積付近の標高は18m程だが、北上するにつれ標高を減じ、大町遺跡付近では標高9m程度となって、周囲の沖積地とほとんど比高差がなくなり、埋没台地となって久喜市方面へ延びると考えられている。また東縁部と西縁部とは対照的で、東縁部は比高差が少なく複雑に支谷が発達するのに対し、西縁部は明瞭な崖線をもちながら支谷は比較的未発達である。往古の人々はこのような台地の縁辺部や谷頭部を好んで選地したと見え、遺跡が多数分布する。中世期にはこの台地上を鎌倉街道中道なかつみちが縦貫しており、このルートを追跡するように、近世初頭には日光御成道が整備された。

2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、沖山遺跡と沖山西遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、南鬼窪氏館跡をはじめ、白岡支台西縁部の山遺跡や入耕地遺跡、タタラ山遺跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山遺跡で住居跡40軒以上や炉穴群が検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形性豊かな石製装飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推

進するものとなろう。前期後半以降は、諸磯Ⅱ式期に茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利Ⅴ式期からで、山遺跡をはじめ、新屋敷遺跡やタタラ山遺跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。本報告の沖山西遺跡でも、当該期の住居跡が検出され、小久喜地区に展開した集落の一端が明らかになりつつある。

縄文時代後期から晩期になると、入耕地遺跡にみられるような環状盛土遺構の存在が明らかになる。また、一遺跡において膨大な量の遺構と遺物を伴うようになる。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。奈良・平安時代も、新屋敷遺跡やタタラ山遺跡で住居跡が1～2軒検出される程度である。本報告の沖山西遺跡においても、7～10世紀代の炭焼窯跡が検出されている。同様の炭焼窯跡は近隣の南鬼窪氏館跡や山遺跡においても検出されている。こうした炭焼窯跡は古代の鍛冶遺構の存在を窺わせるものであり、実際に白岡支台上には中妻遺跡で製鉄関連遺構が検出されている。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。白岡支台は中世の埼玉郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡近辺に存在する白岡八幡宮や正福院などでは、草創や社殿造立に同氏との関わりが伝承されている。

大宮台地慈恩寺支台上に展開する遺跡の内、大町遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、上小笠原遺跡のソフトローム層中からナイフ形石器2点が出土している。

縄文時代前半期の遺跡は、本田下遺跡、大山遺跡、海老島遺跡では、早期末の条痕文期から前期初頭の花積下層式期にかけての炉穴や住居跡が検出されている。中期以降に遺跡数は大きく増加し、ほとんどの遺跡で遺構や遺物が確認される。大町遺跡においても、加曾利Ⅴ式期の土器を伴う土坑が検出されている。

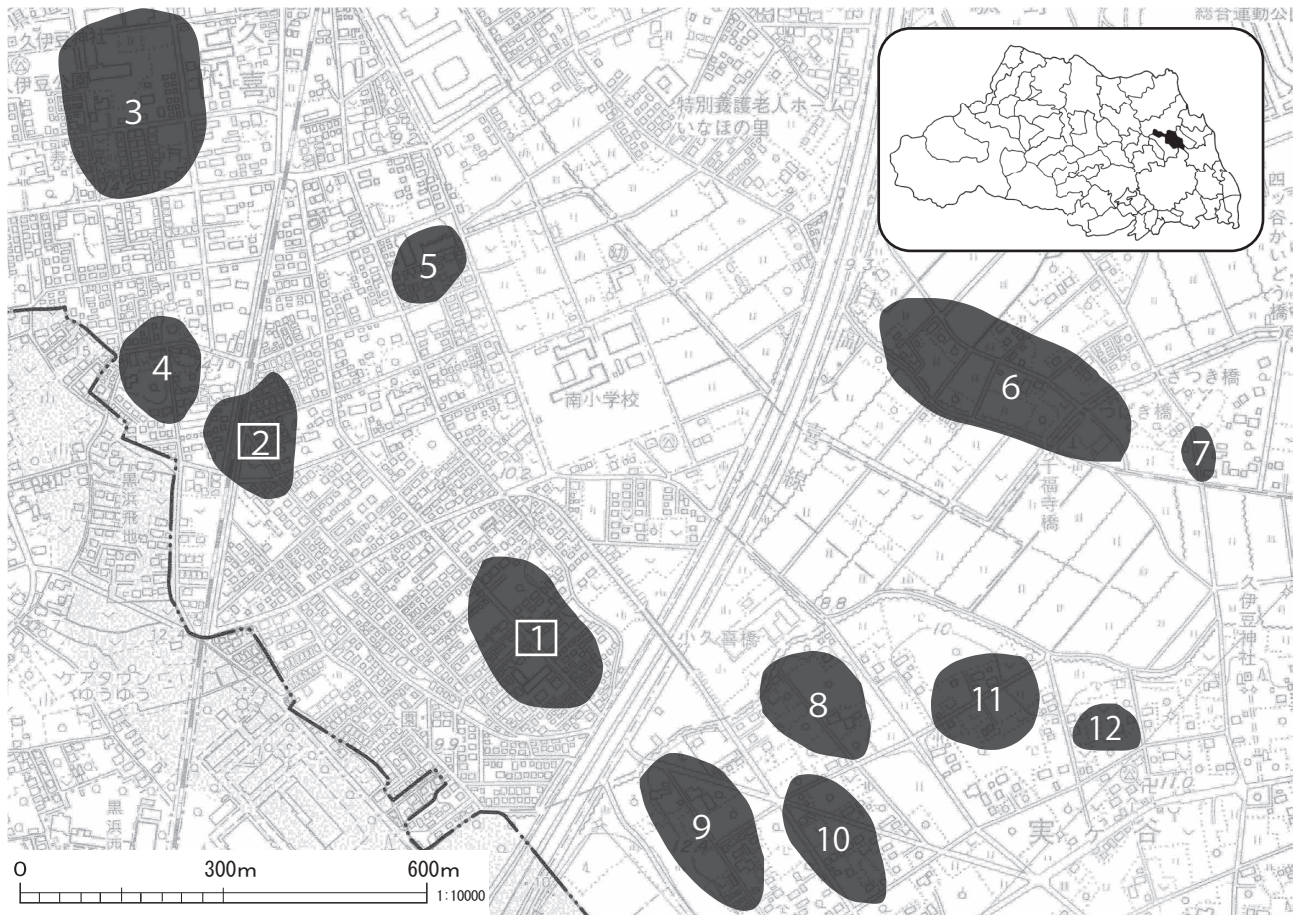
慈恩寺支台の代表的な集落としては、清左衛門遺跡や赤砂利遺跡、本田下遺跡があげられる。本田下遺跡では加曾利ⅤⅢ式期の住居跡からヤマトシジミ、マガキ主体のブロック貝層が検出され、年代測定から約4,300年前のものであることが明らかとなっている。清左衛門遺跡では、中期後半から晩期までの多数の住居跡が検出されたほか、石冠や人面土版など埼玉県内でも希少な遺物が出土したことで注目を集めた。埋没谷では堅果類の灰汁抜き等に用いたと考えられる木組み施設が発見されたほか、縄文時代後期の土器片を伴う土坑内貝塚が検出され、マシジミやハイガイ、オオタニシに混じってニホンジカの骨も出土した。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。

奈良・平安時代には、慈恩寺支台一帯は武蔵国埼玉郡に属し、平安時代末には太田荘が成立した。海老島遺跡では平安時代の住居跡が検出され、本村遺跡では平安時代の須恵器片が採集されている。大町遺跡に近接する忠恩寺遺跡や西田端遺跡においても、分布調査において、奈良・平安時代の遺物が採集されている。

中世以降、太田荘は鎌倉幕府や室町幕府の鎌倉府の直轄領を経て、戦国時代には、関東管領上杉氏と対峙する古河公方足利氏の前線域となった。また、丸山遺跡には中世城館である丸山城の存在が伝承されている。

大町遺跡西隣には、忠恩寺遺跡が展開する。遺跡名ともなった忠恩寺は、天喜2年(1054)、渋江兼重が開基したと伝わる。長禄3年(1459)、岩付城主である太田資正から門前の棟別免許状が与えられるなど、



第1図 沖山遺跡・沖山西遺跡と周辺の遺跡分布図



第2図 大町遺跡と周辺の遺跡分布図

第1表 周辺遺跡地名表

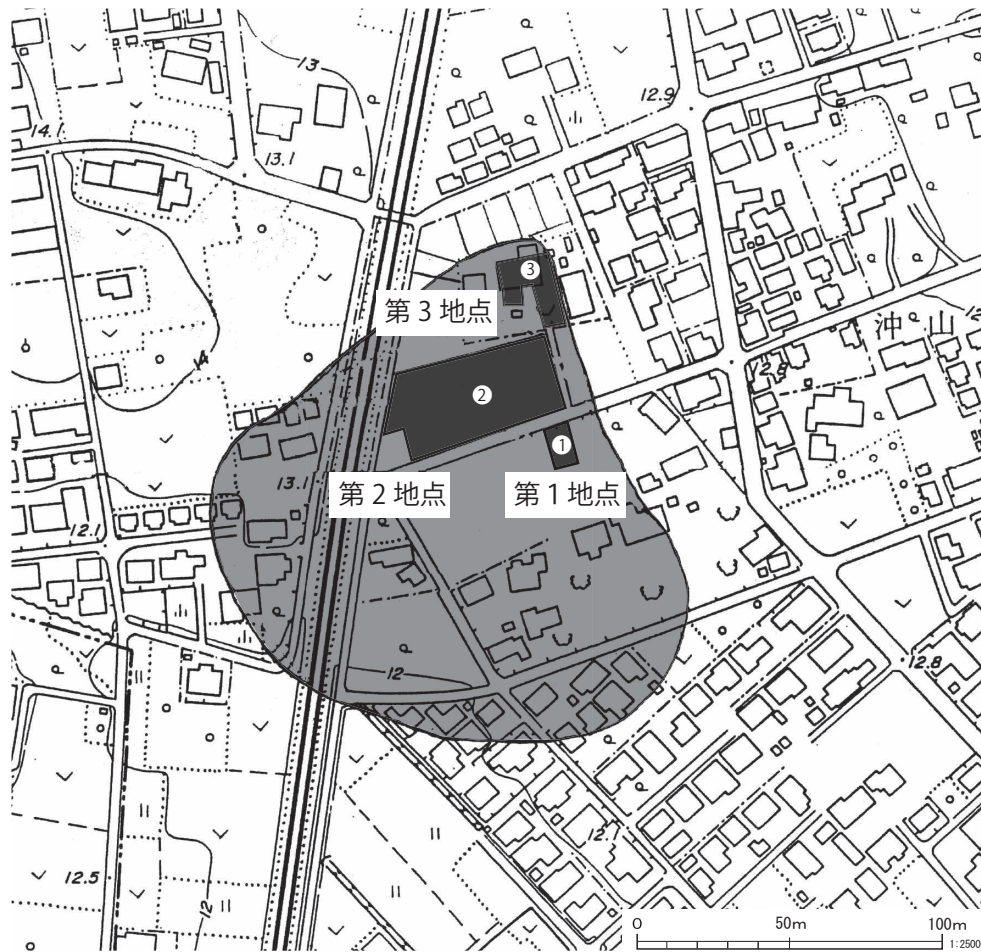
番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	沖山遺跡	小久喜字沖山	縄文中	平成20
2	沖山西遺跡	小久喜字沖山・馬場・丸山	縄文中、奈良、近世	平成22
3	南鬼窪氏館跡	小久喜字中村	旧石器、縄文中～晩、中世、近世	平成7・9・18・19
4	馬場遺跡	小久喜字馬場	縄文中、近世	
5	神辺遺跡	小久喜字神辺	縄文中、近世	
6	八幡遺跡	千駄野字八幡・迎	縄文中	
7	四ツ谷西遺跡	千駄野字四ツ谷	縄文中	
8	川端遺跡	実ケ谷字川端・西ノ谷	縄文中	
9	西ノ谷西遺跡	実ケ谷字西ノ谷	縄文前・中	
10	西ノ谷遺跡	実ケ谷字西ノ谷	縄文中、平安	
11	宮前西遺跡	実ケ谷字宮前・川端	縄文前・中・後	
12	宮前遺跡	実ケ谷字宮前	縄文中	
13	大町遺跡	高岩字大町	縄文中、近世	平成11・21
14	忠恩寺遺跡	高岩字寺下	縄文中、奈良、平安、近世	
15	西田端遺跡	高岩字西田端	縄文中、奈良、平安	
16	高岩本村遺跡	高岩字本村	縄文中	



第3図 沖山遺跡の位置と発掘調査区

太田氏一族と深い関わりがあったことが伝えられている。

赤砂利遺跡内に位置する大徳寺は、寺伝によれば開山は中世に遡る。寺の東側を通る道は日光御成道整備前の「本街道」と伝わり、これが鎌倉街道中道であると推定されている。発掘調査の成果としても、13世紀以降の土坑群や溝、柱穴群が検出され、舶載陶磁器や和鏡、木製櫛などが出土している。



第4図 沖山西遺跡の位置と発掘調査区



第5図 大町遺跡の位置と発掘調査区

Ⅲ 沖山遺跡（第1地点）の調査

1 遺跡の概要

沖山遺跡は大宮台地白岡支台の東縁に位置する。同支台の東側には旧利根川やその支流の氾濫によって形成された沖積低地である日川低地^{にっかわ}が広がり、遺跡はその日川低地から支台へ入り込む大規模な谷によって開析され、沖山地区は幅200～300m、長さ600m程の半島状台地となっている。当遺跡はこの半島状台地の先端から脊梁部にかけて展開している。

当遺跡では、これまでに数地点で試掘調査が行われているが、平成6年度に行った今回調査地点の東隣地点では、縄文時代中期の遺構・遺物が検出され、盛土保存の措置がとられている。本格的な発掘調査は今回が初めてとなる。調査地点は、遺跡の北寄りに位置し、標高は約12mである。

2 遺構と遺物

(1) 住居跡

●第1号住居跡（第6・7・8・9図）

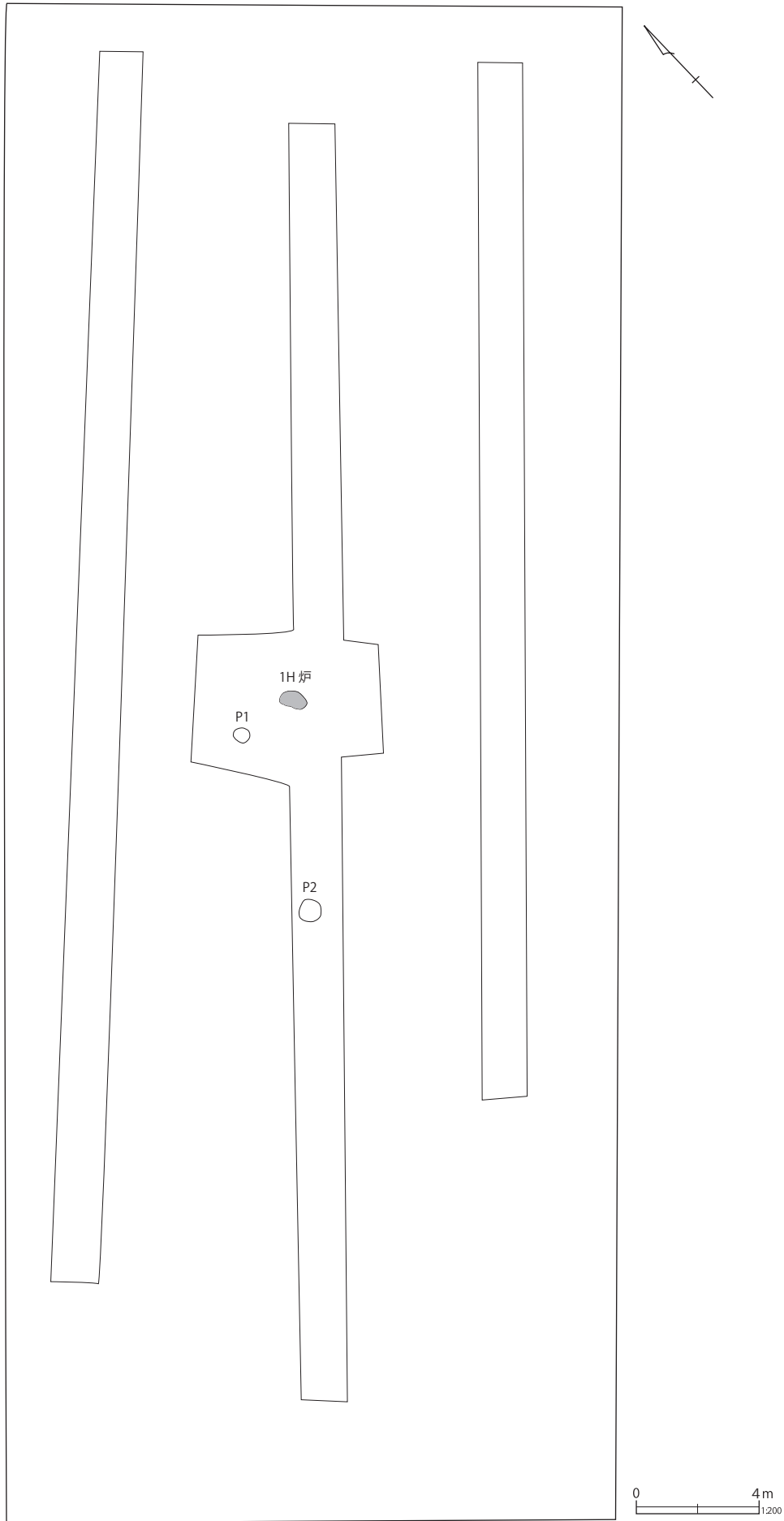
試掘調査のトレンチ内で焼土を確認したが、住居跡の大半が大きく削平を受けており、炉周辺の部分のみかろうじて残存するという状況であったため、原因者同意のもと、周辺を広げて即日調査したものである。炉の平面形は長径約1mで楕円形を呈し、比較的焼土が発達している。柱穴と考えられるピット（P1）が1基検出された。本来の住居跡は長径約5mの円形を呈すものと想定される。

住居外側で検出されたピット（P2）は柱穴ではないが、縄文土器の小破片が出土しており、住居跡と同時期のものと考えられる。

出土遺物（第8・9図）

土器 第8図1・2・32は、胎土に微量の繊維を含む条痕文系の土器群である。1は直立平縁の口縁部、2・32は胴部資料である。3～31及び33～36は、中期加曾利E式後半の資料であり、本址の時期を表すものと思われる。3～5は、隆帯を貼り渦巻きや窓枠状の区画を形成する一群の口縁部資料、4はP1出土で、上向きの突起上部に渦巻文が観察されるものである。6～8は、無文の口縁部資料である。6・8は、口唇部に沈線が引かれる。7は、口唇外縁に粘土帯を貼って肥厚させ外削ふうに整形している。9は、口縁部文様帯下端区画と思われる横走沈線の観察されるもの、10は、沈線と隆帯とで渦巻文を形成する口縁部文様帯の資料である。11～31は、胴部資料で、このうち11は、2条の沈線で画された横走る磨消文帯の下部に単節RL縄文の観察されるもの、12～32は、縄文地文上に垂下する沈線の施された資料である。このうち、12・14・19は明確な垂下磨消文帯の観察されるもの、13・17・18・22では、曲線も看取される。21は底部付近のもの、29は2本の隆帯が垂下する胴下半の資料である。24～27は地文のみの資料、このうち26・27はP1出土のものである。28～31は、縦位の集合沈線の観察される胴部資料である。33～36は底部資料である。33・34は無文で、後者は底径7.2cmを測る。35・36は垂下する沈線の見られるもので、後者は、底径6.2cmを測ると推定される。

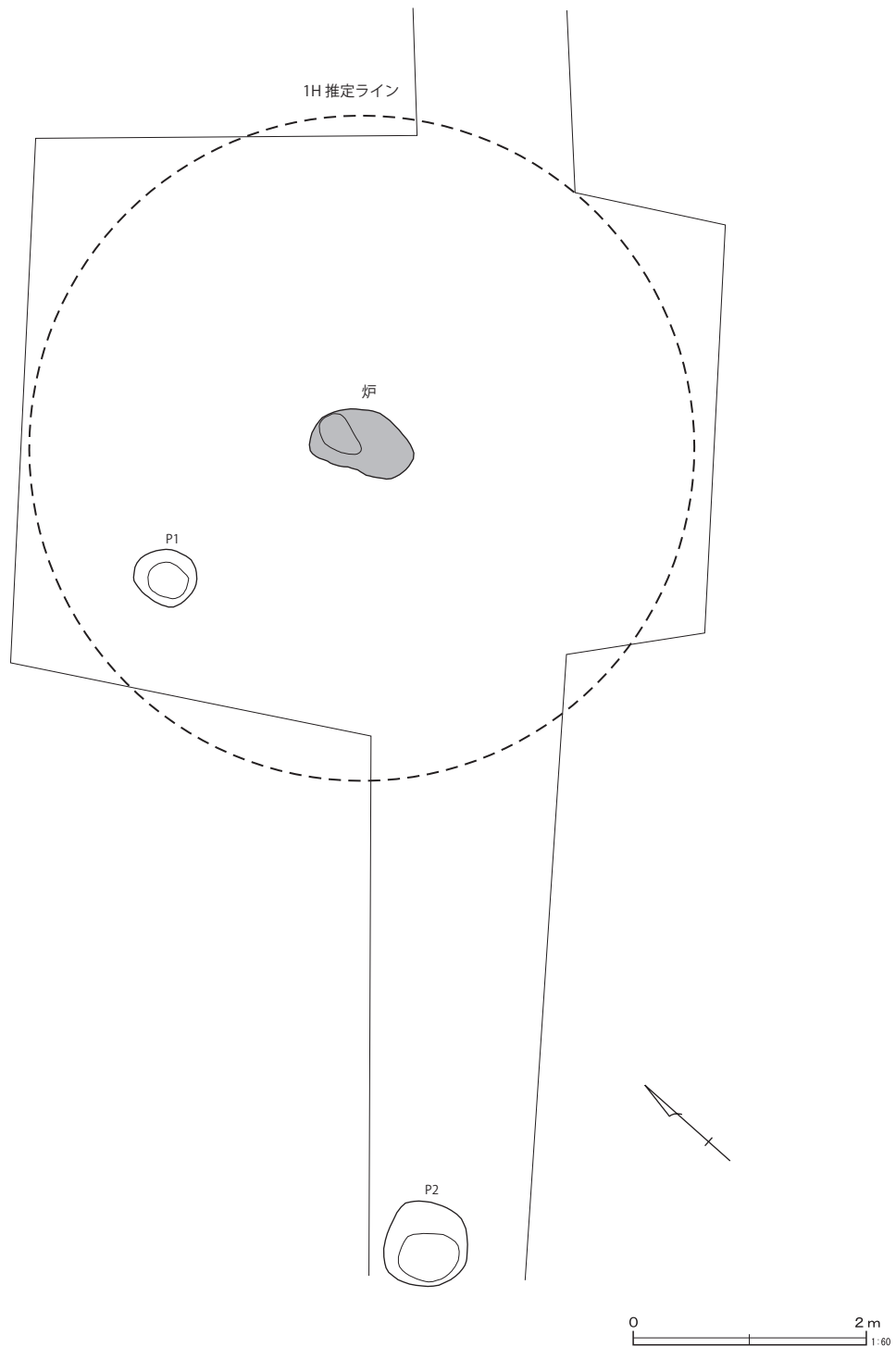
第9図1は、無文の土師器で、高坯の坏部破片と思われる。2は、「くの字」に屈曲する資料で屈曲の下



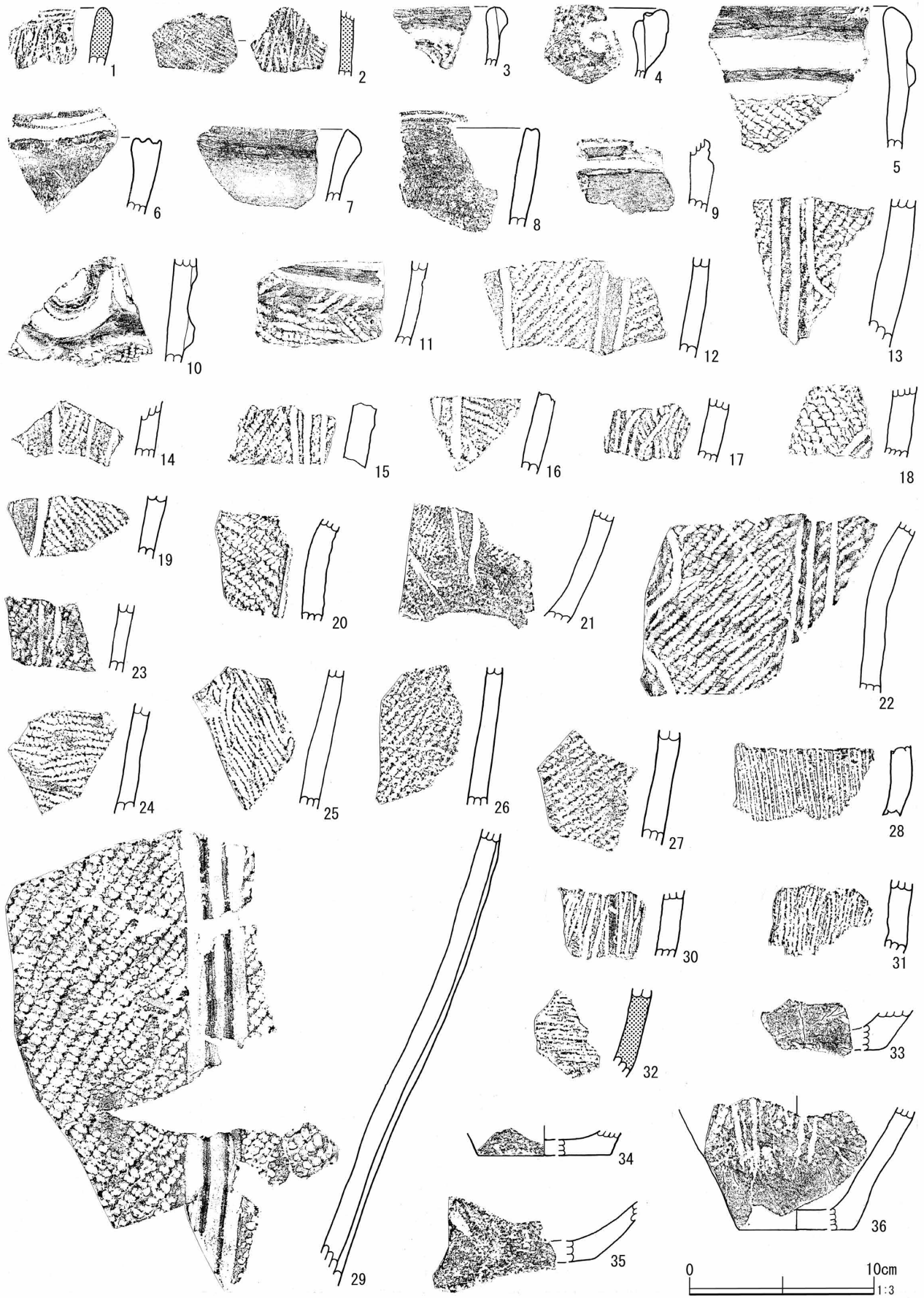
第6図 冲山遺跡（第1地点）全測図

部には刷毛目が観察される。壺型土器の頸部資料と思われる。両者は、古墳時代前期五領式に該当するものと思われ、沖山遺跡が古墳時代前期との複合遺跡である可能性を示す貴重な資料であると言えよう。

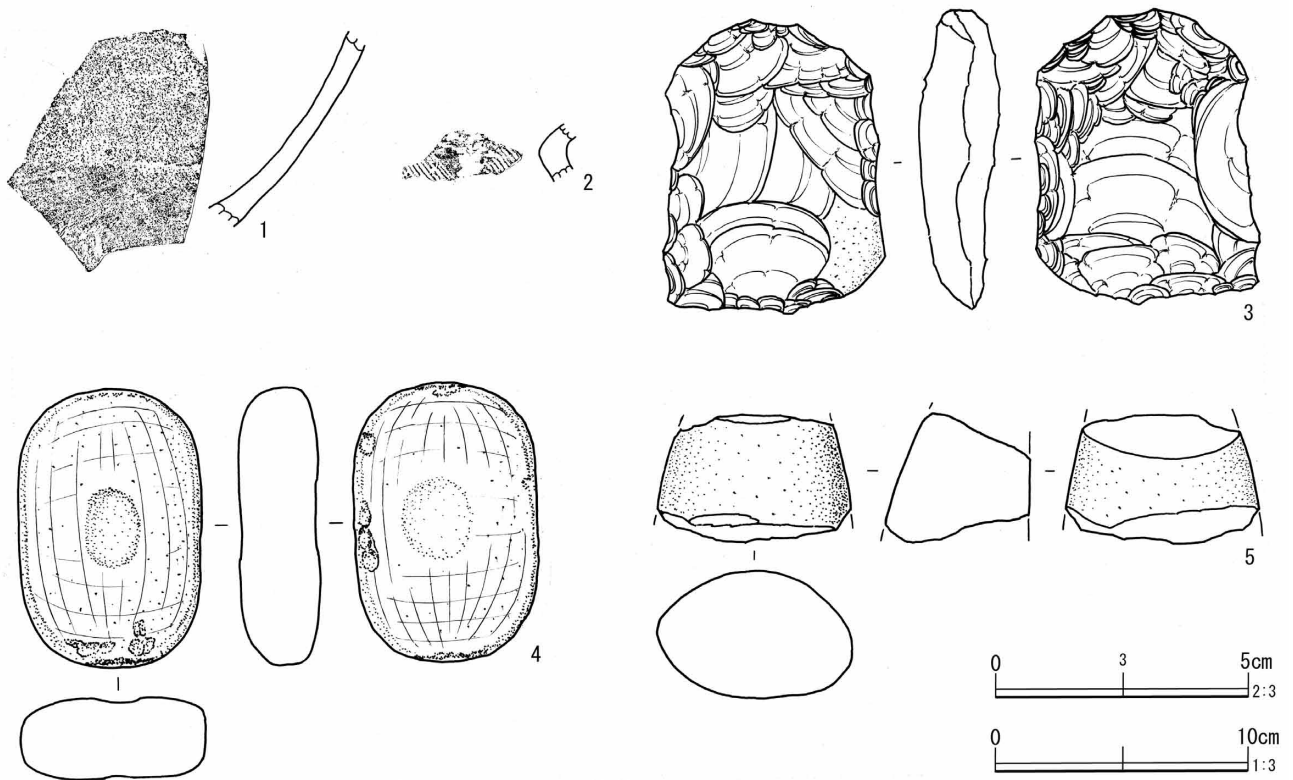
石器 第9図3は打製石斧である。比較的厚みのある円礫の剥片を素材とするもので、正面右側下部に素材礫の表皮を、裏面中央に素材剥片の主剥離面を残す。やや寸詰まりではあるが短冊形を呈する。頭部は両面からの階段状剥離で丸く仕上げられており、刃部は階段状の剥離で成形した後、細かく調整されている。4は、両側縁を面取りし石鱗状に整形された磨石兼敲石である。磨石としての使用は両面に及び、両



第7図 沖山遺跡（第1地点）遺構実測図



第8图 第1号住居跡出土遺物 (1)



第9図 第1号住居跡出土遺物（2）

第2表 沖山遺跡（第1地点）出土石器計測表

図No.	遺物No.	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
9	3	1号住	打斧	ホルンフェルス	5.9	4.4	1.6	47.8	
9	4	1号住(炉)	磨石兼敲石	安山岩	11.0	7.2	3.2	460.0	被熱痕あり
9	5	1号住	磨石	硬砂岩	(5.1)	(7.7)	5.0	(250.0)	

面の中央部は敲打により浅く凹んでいる。また、両端部にも敲打痕が認められる。5は、磨石の残欠である。長楕円形と思われる礫素材で、表裏両面に使用が認められる。使用頻度は高くない。

IV 沖山西遺跡（第1・2・3地点）の調査

1 遺跡の概要

沖山西遺跡は大宮台地白岡支台の東縁に位置する。同支台の東側には旧利根川やその支流の氾濫によって形成された沖積低地である日川低地^{にっかわ}が広がり、遺跡はその日川低地から支台へ入り込む大規模な谷によって開析され、沖山地区は幅200～300m、長さ600m程の半島状台地となっている。当遺跡は前述の沖山遺跡南東から入る大きな支谷の谷頭に位置している。

当遺跡では、今回の発掘調査が初めてとなる。これまでの分布調査では、縄文土器中期後半の加曾利E式土器や中世以降のかわらけが採集されている。調査地点は、遺跡の北寄りに位置し、標高は約12mである。

2 第1地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第1号住居跡（第11・12・13・14・15図）

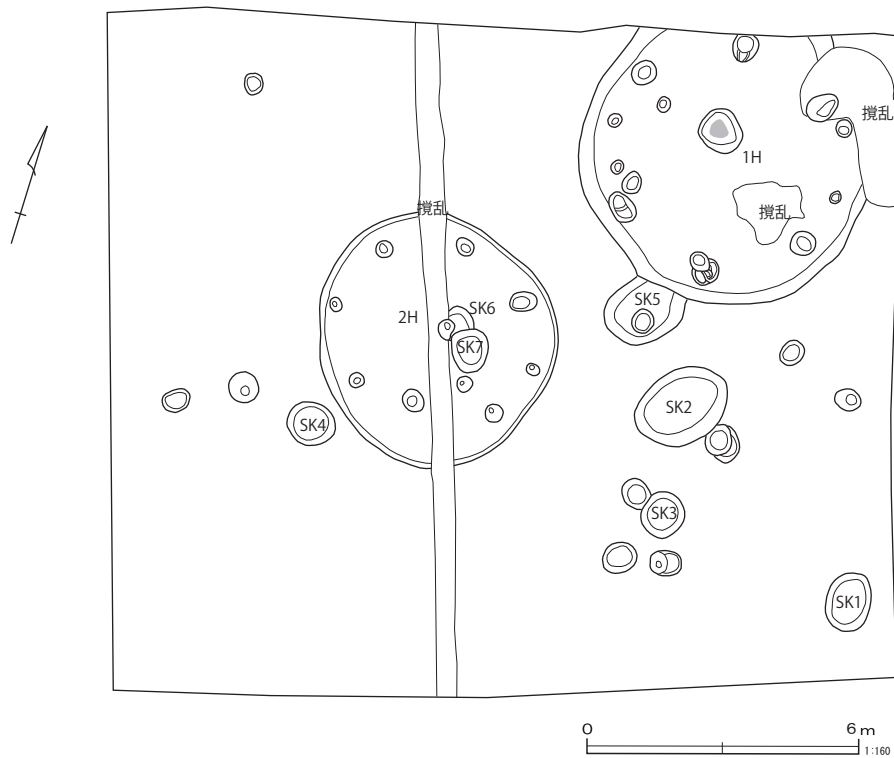
調査区の北東隅に位置し、北端は調査区外である。平面形は直径約6.1mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.5mを測る。P1、2、3、4、5、6を主柱穴とする6本柱の住居が想定される。P7はP2の、P9はP5の建て替え後の柱と考えられる。主柱穴と炉跡の配置から出入口は南東（P3、4の間）に推定することができる。断面形や平面形から柱穴は全て抜き取られたものと考えられ、特にP4は抜き取りの際に柱を倒すための浅い抜き取り穴が掘り方周辺に認められた。第12図のように住居跡の中央部で大破片を含む土器の出土が集中している。

炉跡は地床炉で長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈し、中央付近の長径約0.5m、短径約0.4mの範囲に発達した焼土の広がりが認められた。炉は良く焼きしめられ、中央付近がやや窪む。

出土遺物（第13・14・15図）

土器 第13図1は、推定口径は41cm、残存高23cmを測るキャリパー形深鉢である。口縁部に比較的丈の高い隆帯と、これに沿うように引かれる沈線とで長楕円形の枠状区画を配し、これらを横走隆帯でつなぐ文様帯を持つ。区画内には単節RL縄文を斜めに回転施文している。胴部は、同一原体を縦位から斜位施文し、この上から垂下する長楕円形文を連ねている。焼成は良好であるが、輪積から脱落する傾向が強く、破片の上下には輪積痕が顕著に残される。

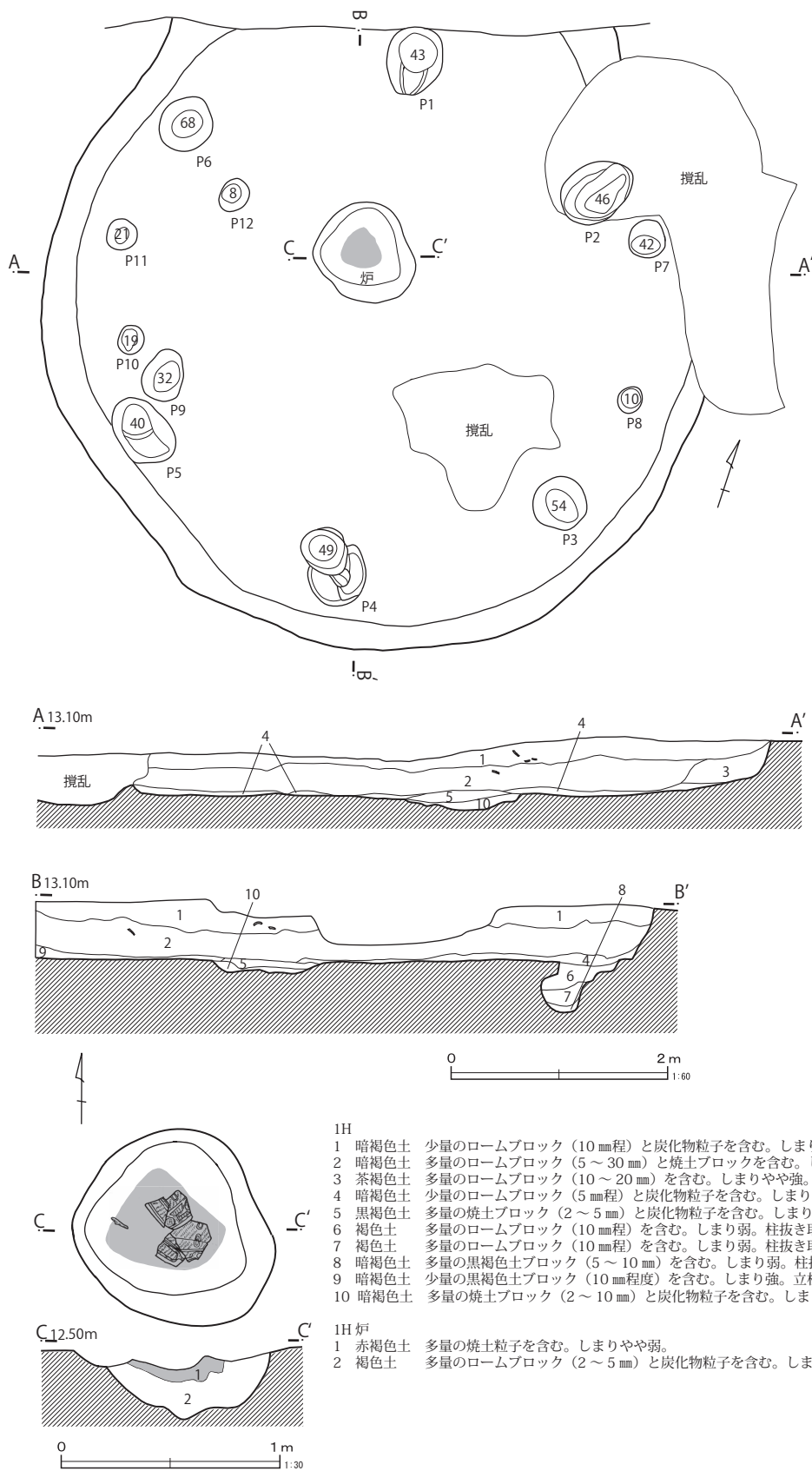
第14図1は、波状縁を呈するキャリパー形深鉢の口縁部資料で、幅狭の口縁部文様帯には、沈線による長楕円形区画が設けられ、内部には縦位の集合沈線が施される。波頂部には橋状把手が付され、把手稜部には、頂部に及ぶ「S」状沈線が観察される。また、波頂部内面にはヘラ状施文具による刺突が施される。2は、第13図1の土器に近似する口縁部文様帯を持つ資料である。この資料では、文様帯の上下を画する隆帯間に「H」状の隆帯を貼付け周囲を撫でているように見える。3～13も同時期のキャリパー形深鉢の口縁部資料である。3では、口縁部区画に左下がりの隆帯が施される。4では、斜め上を向く渦巻文が観察される。5・7の口縁部文様帯の地文は撚糸文である。6は、肉厚の器面に太めの沈線で渦巻文が描



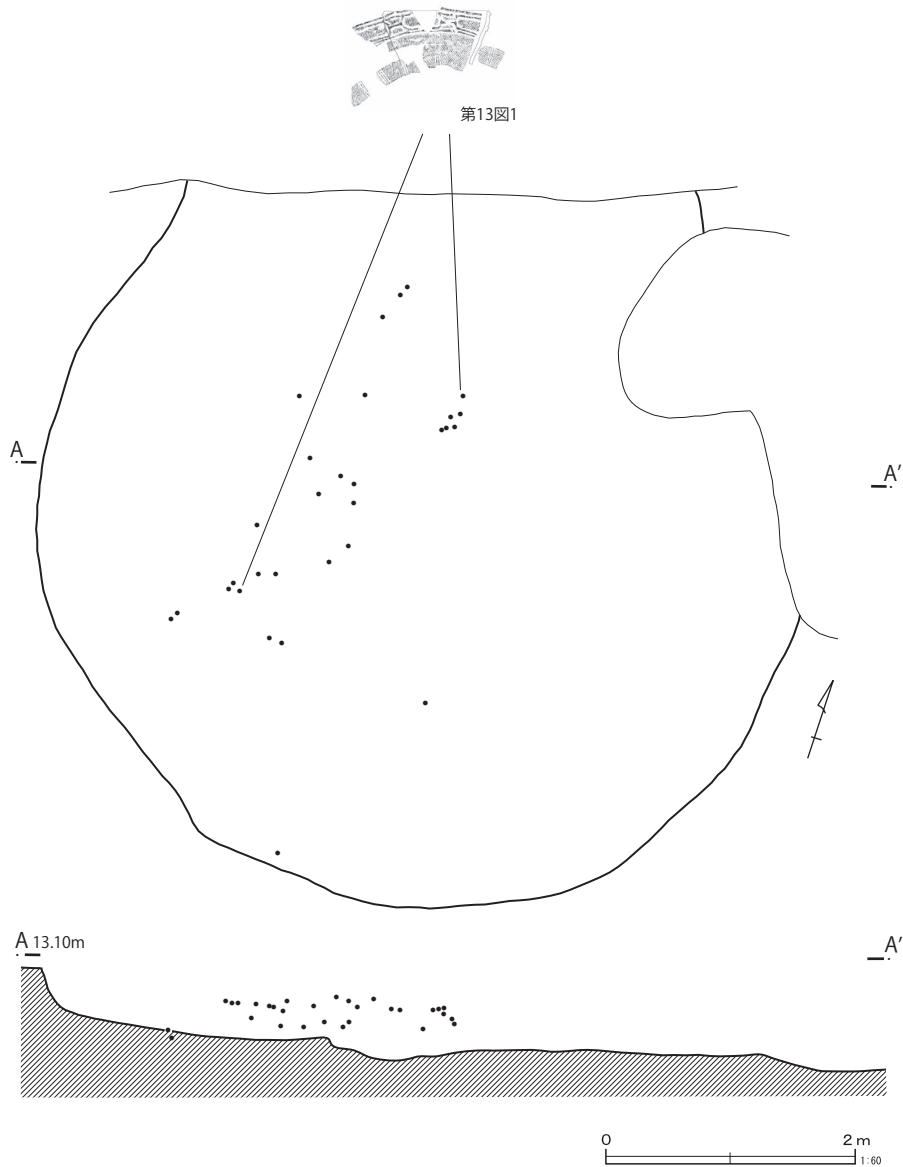
第10図 沖山西遺跡（第1地点）全測図

かれる資料、8~10・12・13は、口縁部に平行する2~4条の沈線を巡らせている資料で、9では垂下沈線も観察される。11は波状縁となるもので、波頂部には丈の低い隆帯が付され、ここから垂下する沈線文が派生するようである。14~16は無文の口縁部資料である。14は直立傾向の強い資料であるが、15・16は傾斜が強く、浅鉢ないし、頸部の屈曲する両耳壺等の口縁部であろう。17・18・22はキャリパー形深鉢の口縁部文様帯直下に当たる資料と思われ、口縁部文様帯下端を画した隆帯の名残の下に垂下する沈線文を見ることができる。19・20は同一個体と思われるもので、条が縦走するように単節RL縄文を斜位回転させ、その上から弧線を描く3条の沈線と器面を横位に分帯する沈線とが引かれる資料である。いわゆる連弧文土器に該当しよう。21は、断面がカマボコ形を呈する丈の低い隆帯の下部に縦位の集合沈線が観察される資料、23は、内湾する器面に横走する3条の沈線と、そこから派生する弧線の見られる資料である。24~32及び、第15図1~5は、縄文地文上に垂下する沈線や弧状の沈線が施される胴部資料である。このうち25は比較的大ぶりの深鉢形土器の胴部資料と思われ、第13図1の胴部に見られたような沈線を囲む長楕円形の沈線文とこれをつなぐような上向きの弧状のモチーフが施される。27の地文は撚糸文、29は、複節縄文、32では曲線化する沈線間が磨消となる資料である。

第15図1は、垂下する沈線間の磨消される胴部資料、2は、垂下沈線間に鋸歯状の沈線が施されるものである。3は、P8出土の胴部資料、5は、残存部最大径12cmを測る胴部資料である。6~13は縦位の条線文を地文とするもので、6は横走する3条の沈線が認められる口縁部資料、7・9~11は垂下する縦位の沈線の認められる胴部資料である。14~21は本址出土の底部資料である。推定底径は、14が6cm、15が8.8cm、16が8.8cm、17では12.8cmを測る。20は、単節RL縄文縦位施文の地文上に2条1組の沈線を垂下させる資料で、底面円盤は脱落しているが、推定底径6.8cmほどと思われる資料、21は、地文に撚糸文の見られ



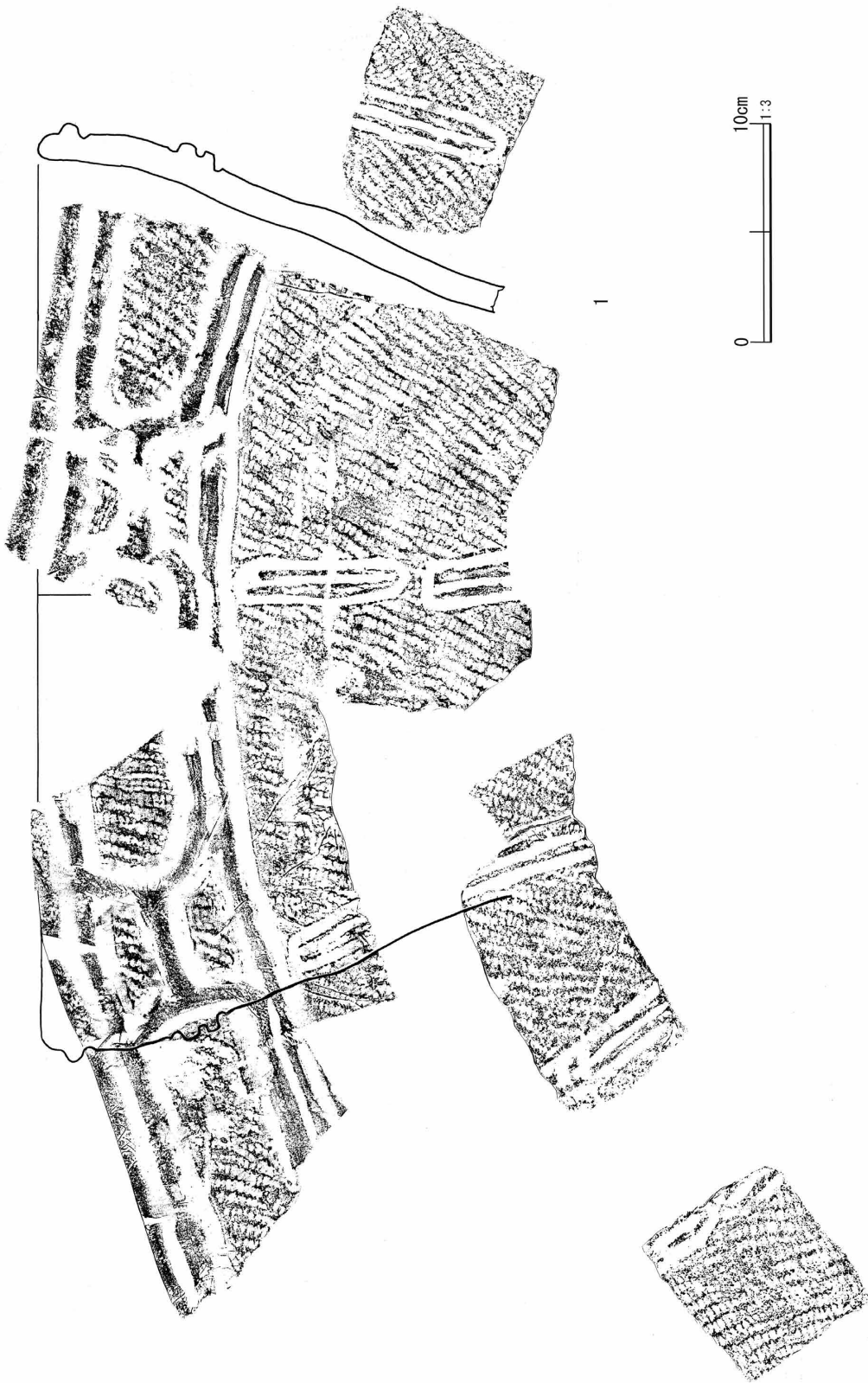
第11図 第1号住居跡



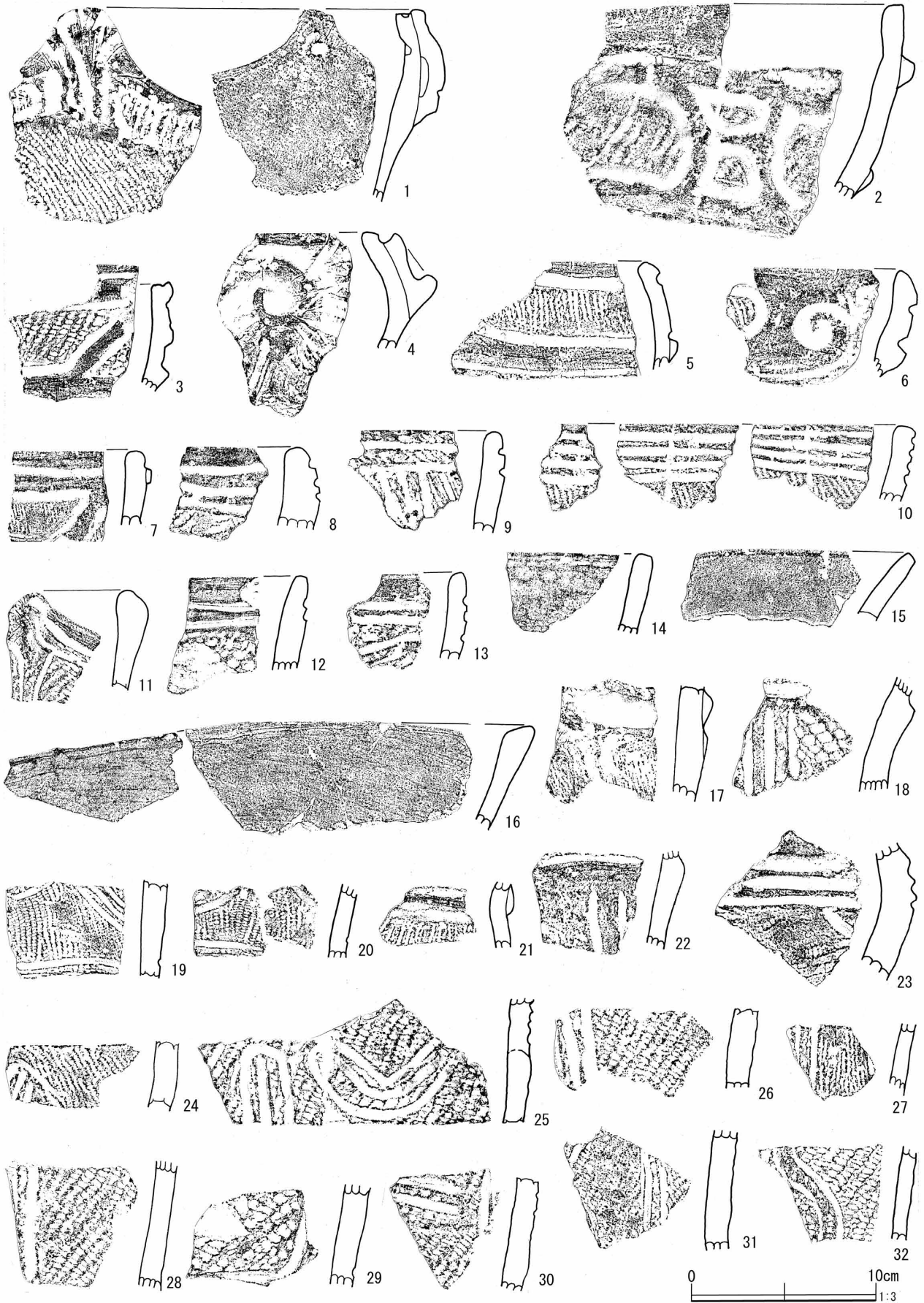
第12図 第1号住居跡遺物分布図

るもので、推定底径9cmほどと思われるものである。

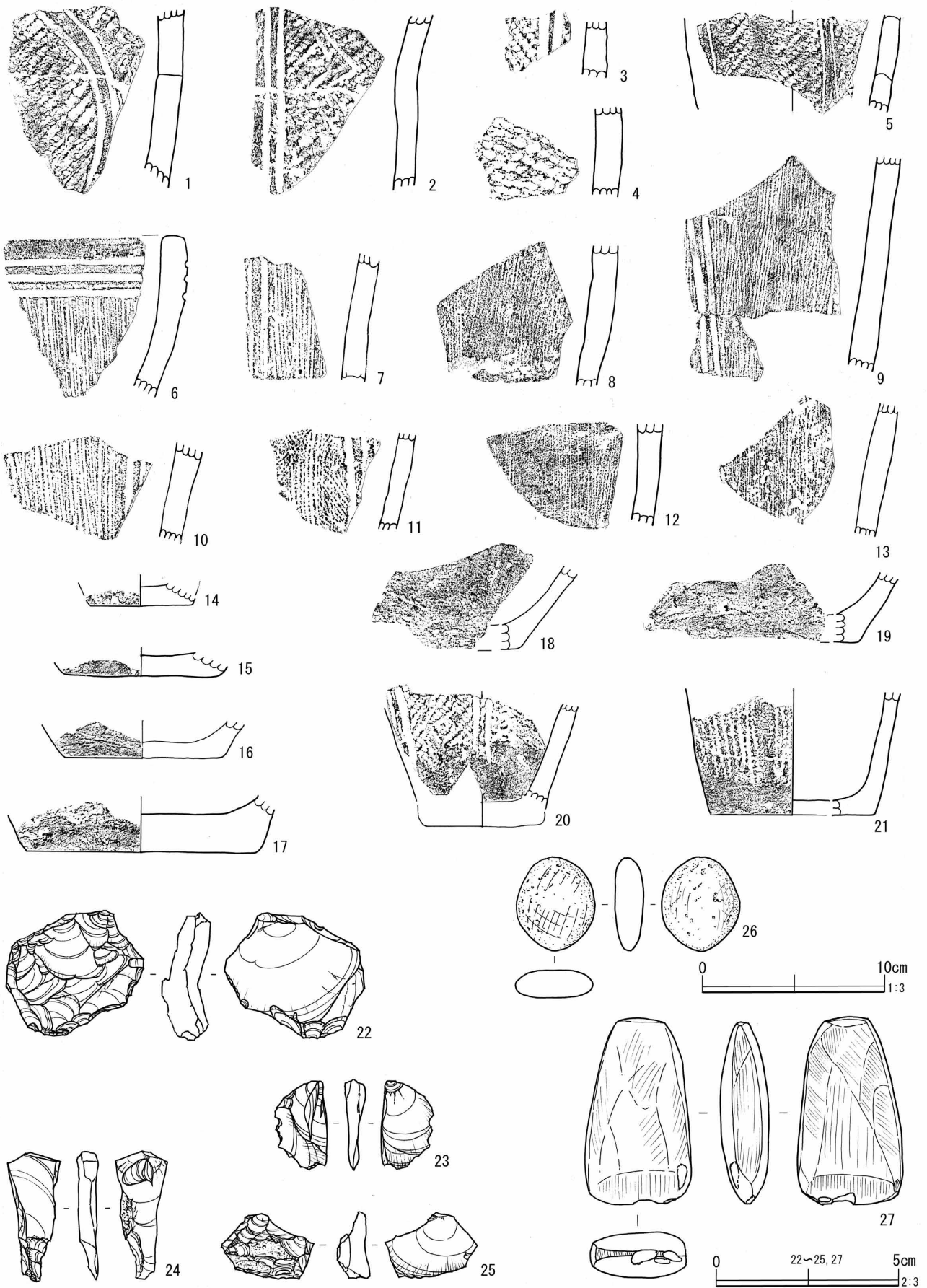
石器 第15図22～24は、2次加工のある剥片である。22は、チャート製の不整形剥片を素材とし、裏面に主剥離面を残す。右側縁中程から下端にかけて不規則な押圧剥離が加えられている。23は、やや縦長の不整形剥片を素材とし、裏面に主剥離面を残す。左側縁中程から下端にかけて不規則な剥離が認められる。24は、縦長の不整形剥片で、裏面頂部に打点と打瘤が残され、明瞭な打瘤裂痕も認められる。下端近くの右側縁に裏面からの押圧剥離による加工が認められる。25は、不整形剥片である。裏面に主剥離面を認める。23～25は、赤褐色斑のある黒曜石製で、同一母岩からの剥離である可能性が高い。26は、楕円形に整形された石製円盤である。扁平な円礫を整形したものと思われ、表裏に研磨痕が残される。27は、定角式の磨製石斧である。長軸5.1cmと小ぶりであることから、手斧や鑿などの加工具的機能が想定されよう。表裏とも敲打調整痕を残さないよう丁寧に研磨整形が施されている。刃部に一部欠損が見られるほか、刃部を擦って面を作っていることから、刃部の再生を試みていた可能性がある。



第13図 第1号住居跡出土遺物（1）



第14图 第1号住居跡出土遺物 (2)



第15图 第1号住居跡出土遺物（3）

●第2号住居跡（第16・17図）

調査区中央に位置し、第6・7号土坑に中央部を切られる。加えて中央部を南北方向に排水管敷設によって攪乱を受けているためか、炉跡を検出することはできなかった。平面形は長径約5.5m、短径約5mの楕円形を呈す。上面が削平を受けており、確認面から床面までの深さは浅く、約0.2mであった。P2、6が対となる支柱穴である可能性が高い。P2、6を軸として考えた場合、出入口は南東（P3、4の間）に推定される。この出入口の方向は第1号住居跡の出入口の方向とも一致する。

出土遺物（第17図）

土器 1は、口縁部に幅広の沈線の引かれる口縁部資料である。口唇部は玉縁状となり内湾傾向を示す。あるいは緩波状縁を呈する可能性もある。2は、横走る3条の沈線が観察される。沈線間は磨消される。3は、垂下する「∩」状の条線文帯が磨消される胴部資料、4・5は、沈線間を磨消す垂下文の施される胴部資料、6は縦位の沈線の観察される胴部資料である。

石器 7は、チャート製の不整形剥片で、表裏に風化した古い剥離面が残る。周辺から不規則な剥離が施される。あるいは、石鏃等の小型石器製作にかかるいわゆるブランクである可能性もあろうか。

(2) 土坑

●第1号土坑（第18図）

調査区南東端に位置し、平面形は長径約1.2m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第2号土坑（第18図）

調査区東側、第1号住居跡の南側に位置し、平面形は長径約2m、短径約1.5mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面中央付近が窪む。

●第3号土坑（第18図）

調査区南東に位置し、平面形は直径約1mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第4号土坑（第18図）

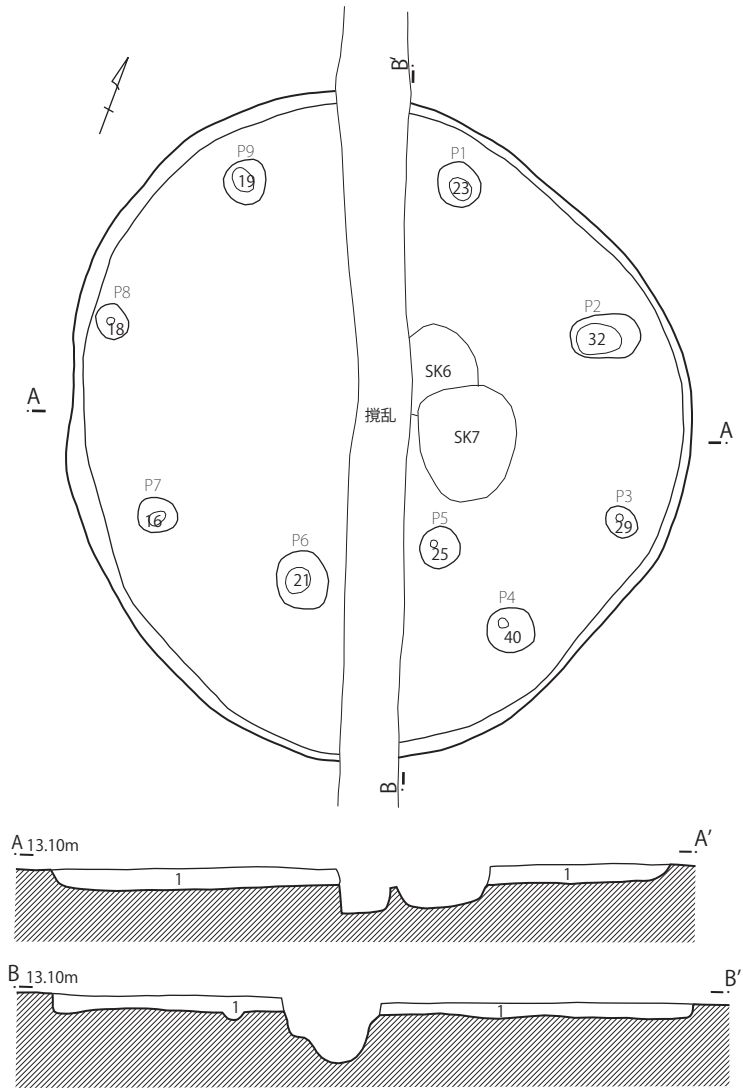
調査区東側、第2号住居跡の南西に位置し、平面形は直径約1mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面のやや西寄りが浅く窪む。

●第5号土坑（第18・19図）

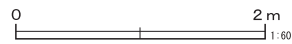
調査区東側、第1号住居跡の南側に隣接し、北側の一部を第1号住居跡に切られる。北端が切れているため、長径は不明であるが、短径は約1.4mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第19図）

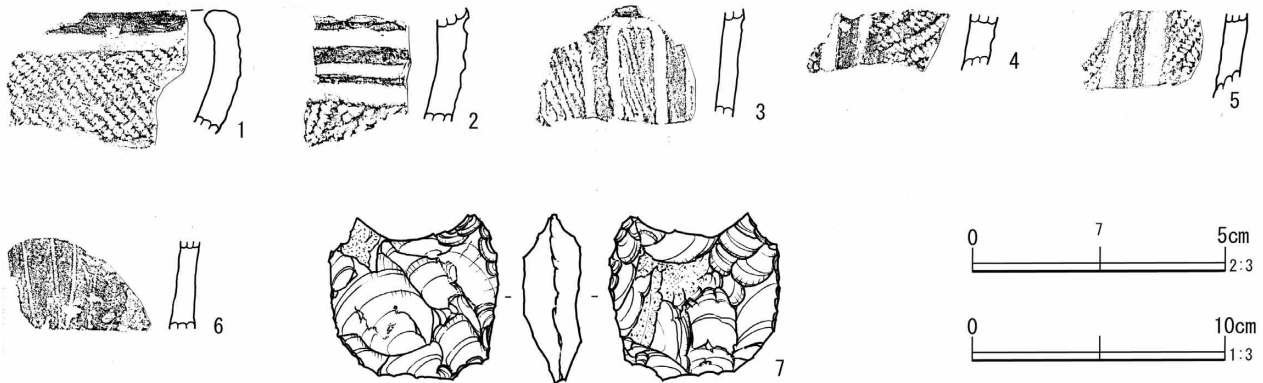
土器 1は、刺突の施された横走隆帯で、沈線の充填される文様帯下端を画す資料、2は、単節縄文上に



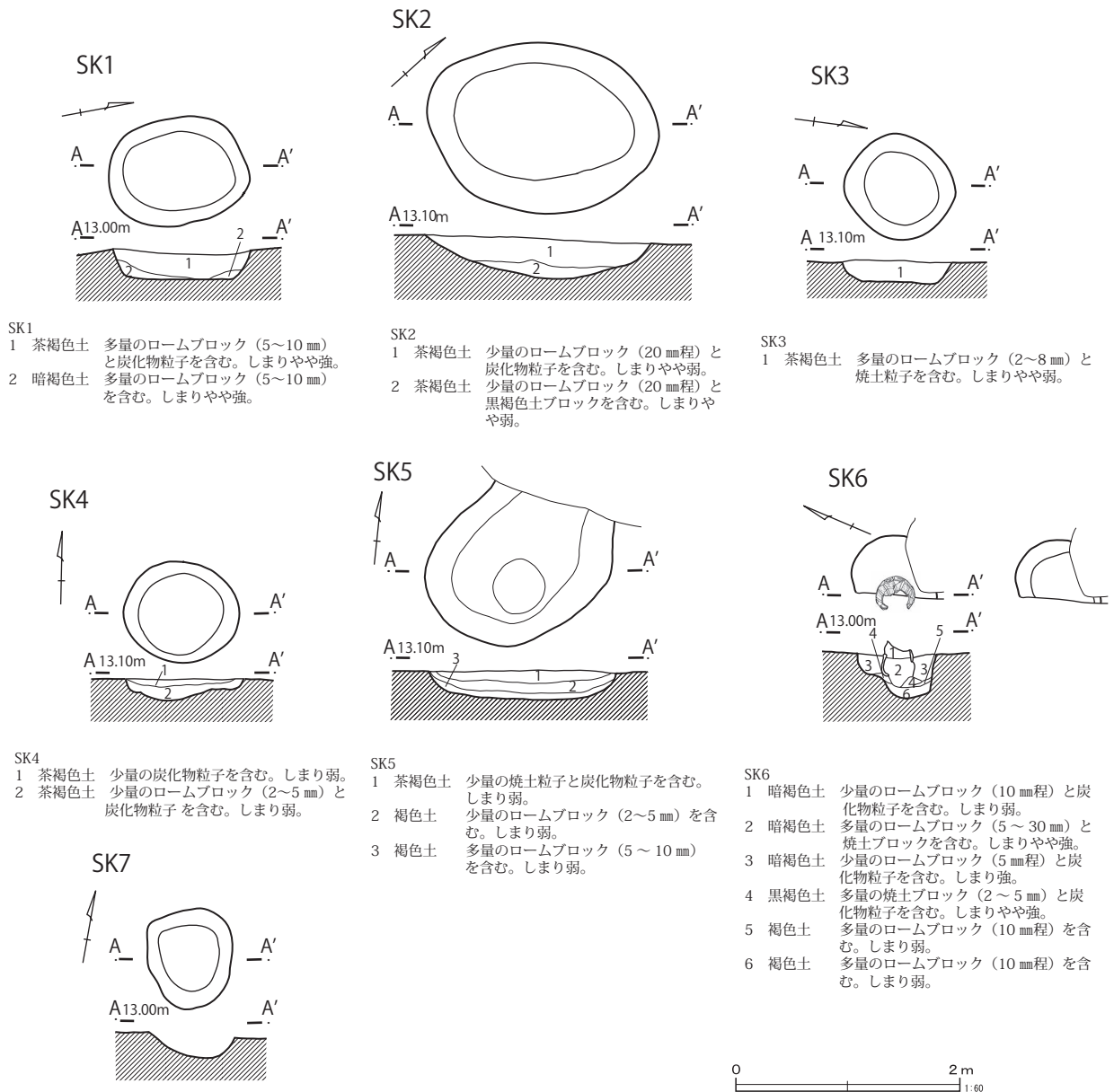
2H
1 茶褐色土 多量のロームブロック（5～10mm）と炭化物粒子を含む。しまり弱。



第16図 第2号住居跡



第17図 第2号住居跡出土遺物



第18図 第1～7号土坑

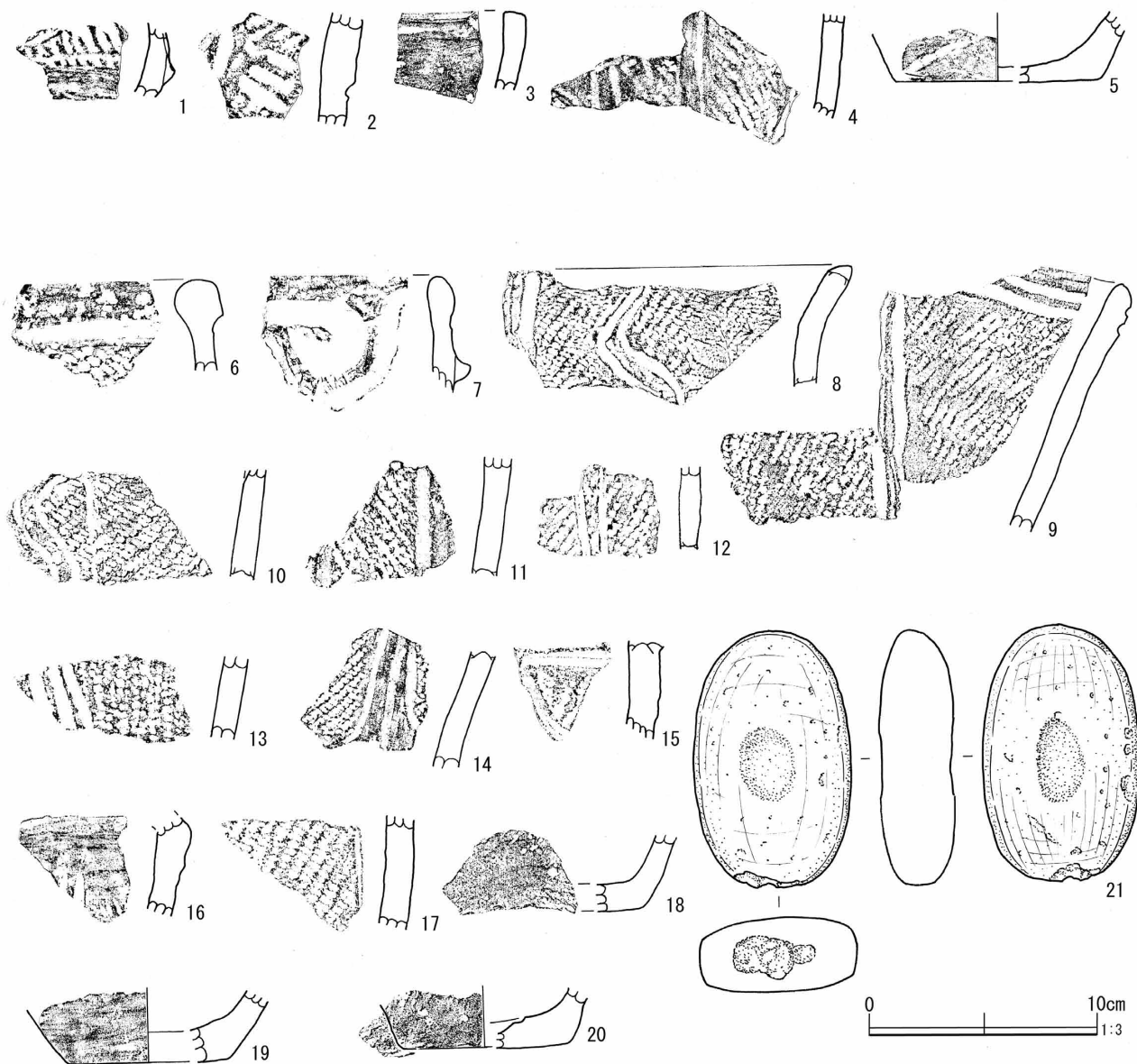
垂下する曲線と右下がりの3本の短い沈線が観察される資料である。

●第6号土坑（第18・19・20図）

第1号住居跡中央部に位置し、第7号土坑に切られる。平面形は直径約0.6mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面中央付近に掘り込みを有し、この上部に深鉢が逆位の状態で埋置されていた。

出土遺物（第19・20図）

土器 第19図3は、ほぼ直立する無文の口縁部資料である。口唇部は角頭状を呈し平縁となる。4は、単節縄文の地文上に垂下する磨消文帯が観察される胴部資料である。5は、無文の底部資料で、推定底径9cmを測る。

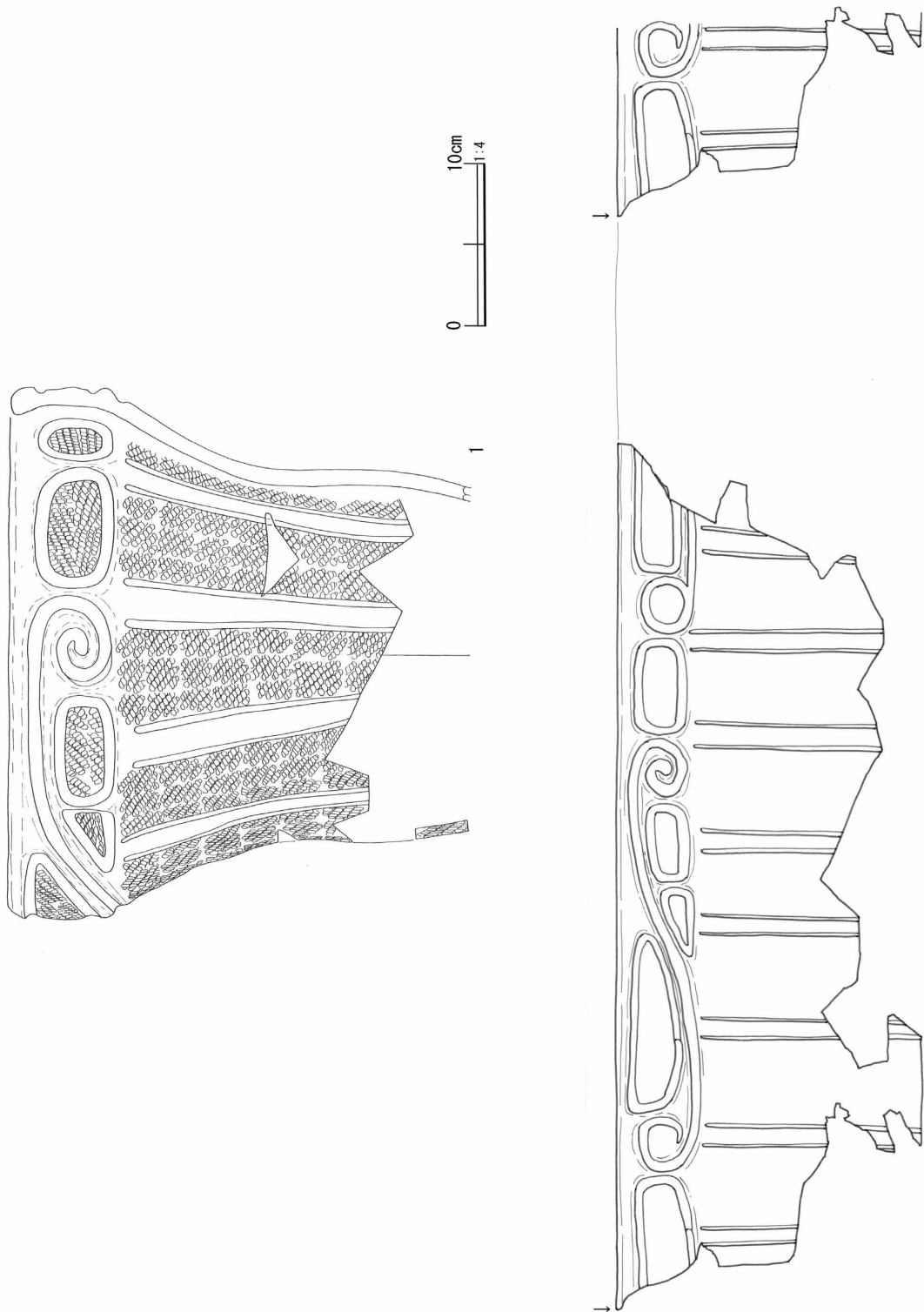


第19図 土坑・グリッド出土遺物

第20図1は、口径31.2cm、残存高28cmを測るキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯は、隆帯とこれに沿う太くしっかりとした沈線とで構成される。基本となる構成は、渦巻文をつなぐように横位展開する「S字」状のモチーフ2単位と、この間隙を埋めるように配された窓枠状の区画文という構成である。正面の渦巻文の左側の区画は隅丸方形と隅丸三角形という構成であるが、欠損部に同じ構成が来るかどうか不明である。むしろこの部分が、繰り返しを避けるように設けられた「崩し」部分である可能性が高いものと思われる。胴部に施される垂下磨消文帯は11帯となる可能性が高く、口縁部文様帯とは連動しないものと思われる。

●第7号土坑（第18図）

第1号住居跡中央部に位置し、第6号土坑を切る。平面形は長径約0.9m、短径約0.7mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面のやや東寄りが浅く窪む。



第20图 第6号土坑出土遗物（1）

(3) グリッド出土遺物（第19図）

土器 第20図6・7は、加曽利E式のキャリパー形土器の口縁部資料である。前者は、玉縁状となる口縁部直下に1条の沈線を引き、以下に単節RL縄文を施すもの、後者は、隆帯と沈線とで渦巻文を描出するものである。8は、単節RL縄文の地文上に垂下する2条の直線と蛇行沈線を描出するもので、輪積から欠損した後、欠損部を擦って口縁部として再加工しているようである。9は、単節RL縄文を地文とする口縁部の開く波状口縁深鉢の口縁部資料である。波頂部から2条の垂線が引かれる。10・13は単節縄文の地文上に蛇行沈線が観察される胴部資料、11・12・17は単節縄文の地文上に垂下沈線の観察される胴部資料である。14は、「U」字状の縄文帯の間隙に垂下する1条の沈線を看取することができる胴部資料、15は口縁部文様帯と思われる資料で、単節縄文の施される杵状区画を沈線で描くものである。16は、「く」の字に内屈すると思われる無文地の資料で、垂下する2条の沈線が観察される。18～20は、いずれも無文の底部資料で、19の推定底径は7cm、20の推定底径は、7.5cmほどと思われる。

石器 21は、磨石兼敲石である。磨石としての使用は両面に及び、表裏両面のほぼ中央に浅い敲打痕が残されるほか、下端部にも敲打の痕跡が認められる。

第3表 沖山西遺跡（第1地点）出土石器計測表

図No.	遺物No.	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
15	22	1号住	2次加工剥片	チャート	3.3	3.8	1.0	12.6	
15	23	1号住	2次加工剥片	赤黒耀石	2.5	1.4	0.6	1.2	
15	24	1号住	2次加工剥片	赤黒耀石	3.5	1.4	0.6	2.2	
15	25	1号住	フレイク	赤黒耀石	1.8	2.4	0.8	2.7	
15	26	1号住	石製円盤	緑色岩	5.1	4.2	1.5	58.6	
15	27	1号住	磨斧	緑色岩	5.1	3.0	1.2	31.0	
17	7	2号住	2次加工剥片	赤チャート	3.4	3.3	1.1	11.8	
19	21	試掘	磨石兼敲石	閃緑岩	11.3	6.8	3.3	401.0	

3 第2地点の遺構と遺物

(1) 住居跡

●第3号住居跡（第22・23・24・25・26・27図）

調査区の北西に位置し、第8号住居跡を切る。平面形は直径約5mの整った円形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。P2、3、4、5、7、9を支柱穴とする6本柱の住居が想定される。支柱穴と炉跡の配置から出入口は北東（P2、3の間）に推定することができる。

第23図のように住居跡内から、大破片を含む土器が多数出土しているが、北側はやや希薄である。

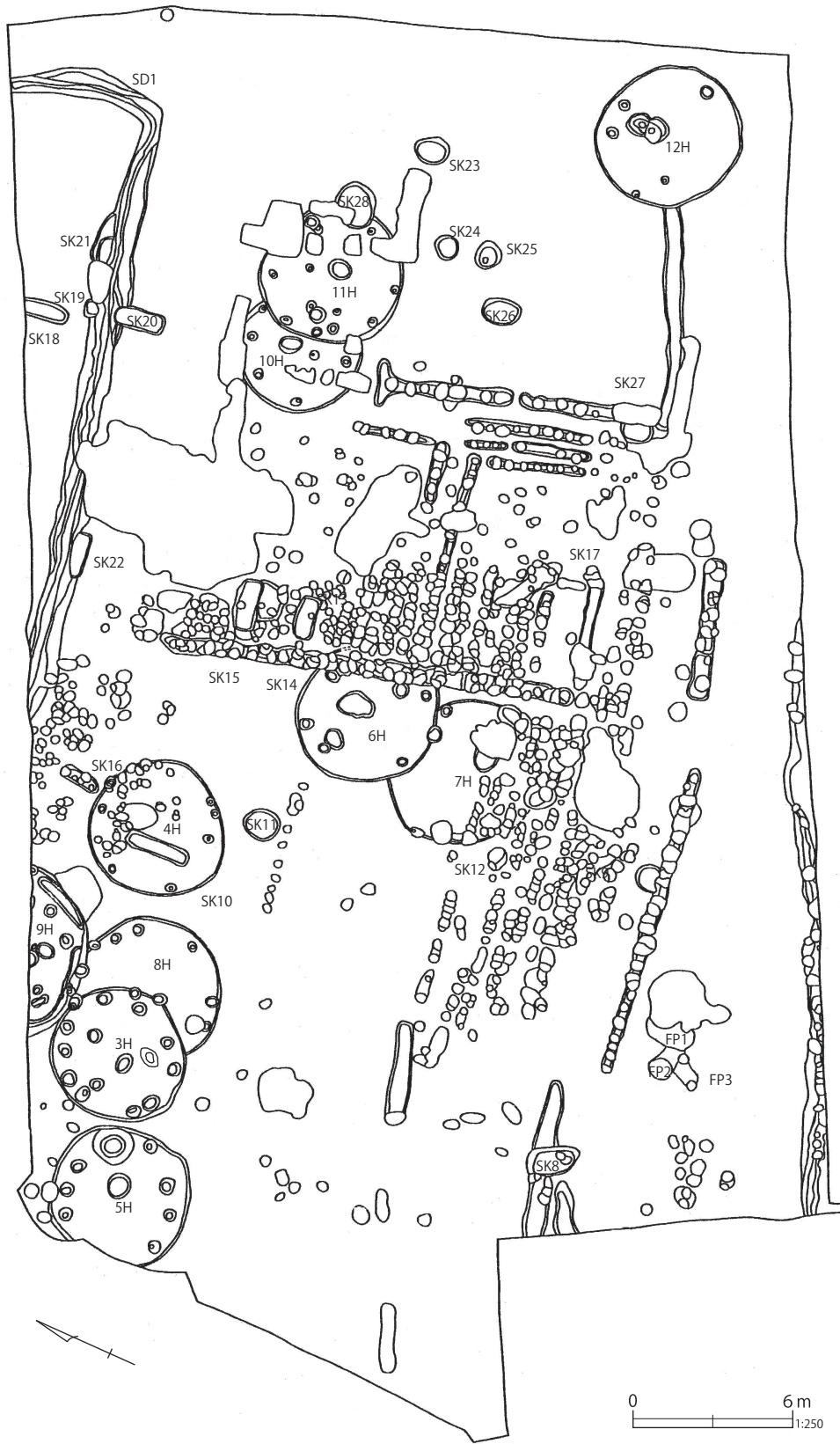
炉跡は長径約1m、短径約0.8mの楕円形を呈し、住居跡内中央部より南東寄りに位置している。深さ約0.3mの掘り込みを有し、第24図の深鉢が正位の状態で埋置されていた。炉跡の付近からは石皿を含む遺物が集中して出土しており、炉の形態も石皿片を用いた石囲炉であったものと推定される。

出土遺物（第24・25・26・27図）

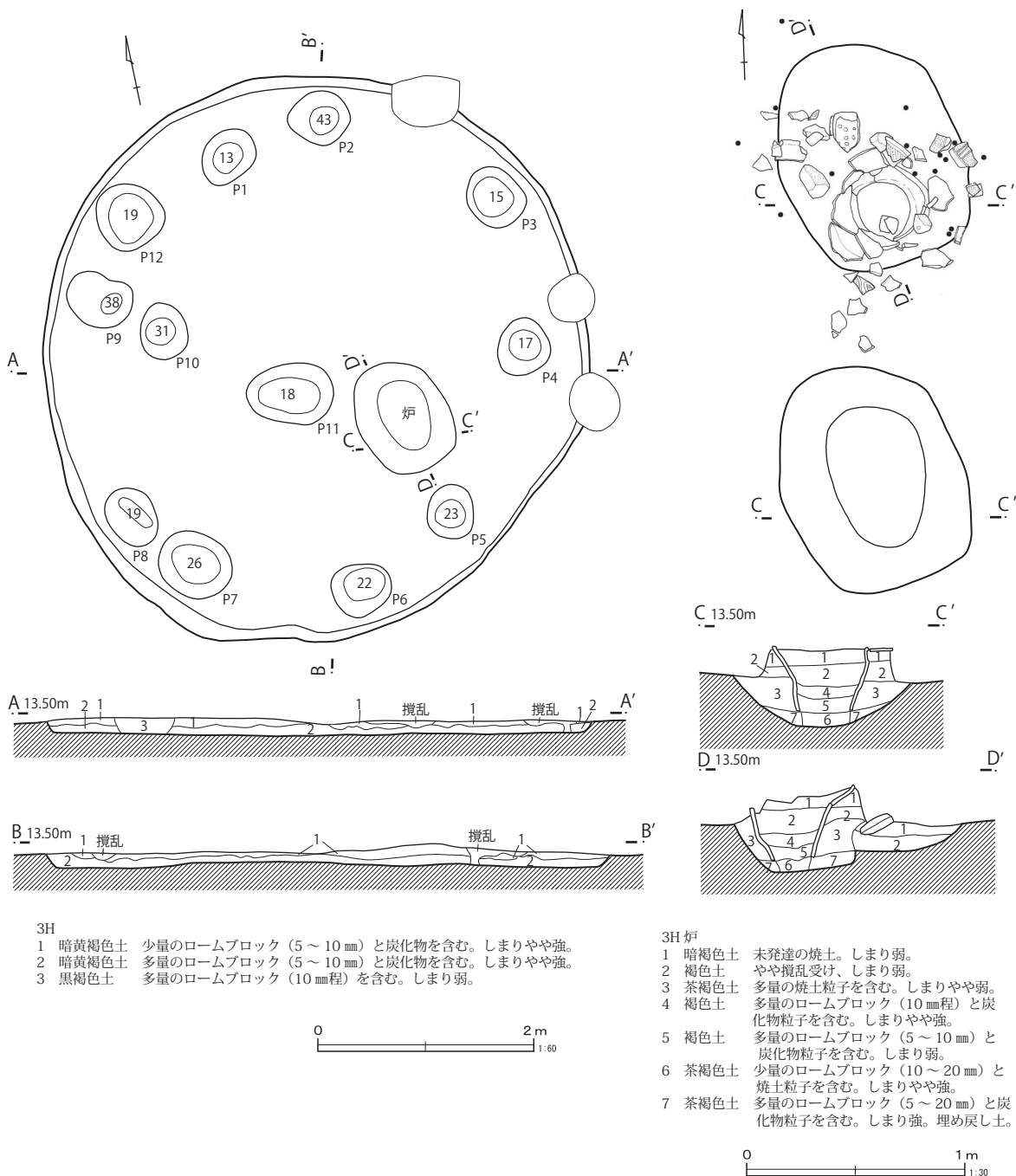
土器 第24図1は、口径49cm、残存高48cmを測る大型のキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯は、隆帯と太い沈線とで構成される渦巻文と、これに連続する長楕円形等の窓枠状の区画文からなる。ところどころ欠損部があるものの、文様帯の構造は概ね把握可能である。展開図を参照しながら文様構造を読み解いてみたい。本資料の口縁部文様帯は、A・D・F3つの渦巻文とB・C・E・G・H5つの枠状区画文からなる。玉縁状となる口縁部を文様帯の上端区画に見立て、この下に沿わせた幅広の沈線が、入り組みながら文様帯を大きく2分することがわかる。すなわち、枠状区画Gを囲むように1周し口縁部に沿って枠状区画Bを避けるように文様帯下端区画となり、枠状区画Hを1周する沈線と、枠状区画Bを1周し口縁部に沿って枠状区画Gを避けるように文様帯下端区画となり、枠状区画Cを1周する沈線の2者である。3つの渦巻文は、AとFは口縁部を巡る沈線から派生する。AはB-Cラインから、FはG-Hラインからいずれも上部から時計回りに派生する。これに対して、渦巻文DはB-Cラインの下から反時計回りに派生するものと思われる。本資料の基本構造は、A～DとF～AがEを挟んで対峙するものと考えられる。基本構造では、両端に渦巻文を配し、内側の枠状区画はB-C・G-H両ラインによって斜めに切られ対称となる。この時、渦巻文Aは両者に含まれる。基本構造同士をつなぐように設けられる視覚認識構造では、この渦巻文Aを中心とした枠状区画Hと枠状区画Bという構造が浮かび上がる。同様に、一見枠状区画を構成しないEを中心とした視覚認識構造では、内側に渦巻文D・F外側に枠状区画C・Dを配置するという構造と見ることができる。

第25図1は、推定口径44cm、残存高41cmを測る大型で平縁のキャリパー形深鉢である。いわゆる吉井城山類型と呼ばれる、「∩」状の沈線を連ねるタイプの資料である。本資料では、口縁部から胴部まで、大きな「∩」が観察され、口縁部の磨消文帯には「S字」状文が施されるようである。「∩」状の沈線区画内に充填されるのは、単節RL縄文で、概ね2指幅程度の縦位回転で2～3回施文している。2は、推定口径31cm、残存高18cmを測るキャリパー形深鉢で、口縁部に4単位の半円状突起を持つものと思われる。口縁部文様帯は、太めの沈線で描出される楕円区画と長楕円区画を連ねるものようである。頸部から胴部は、間を磨消す垂下沈線帯で、残存するうちの1箇所では、沈線頭部が蕨手状をなすことがわかる。器面調整は丁寧で、突起を含む口縁部では横位の垂下する磨消文帯では縦位の丁寧な撫でが施される。

第26図1は、キャリパー形深鉢の口縁部資料で、沈線によって巻切らない渦巻文が描かれる資料である。

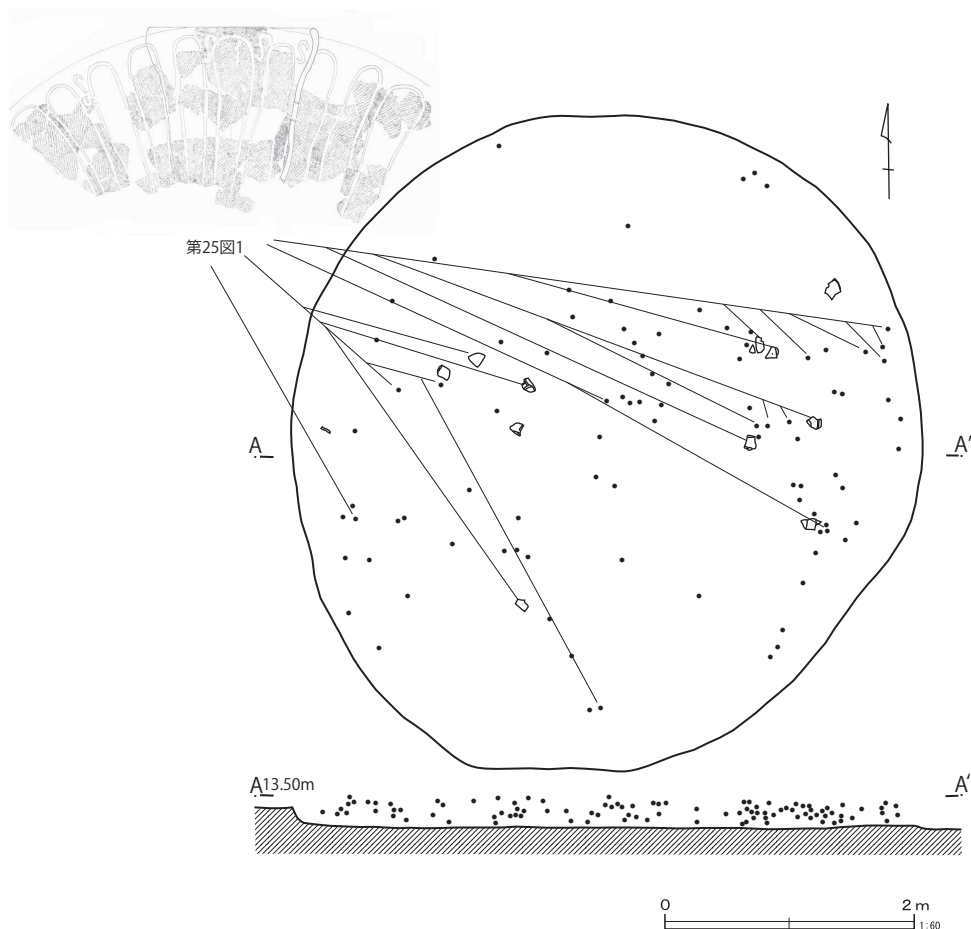


第21図 冲山西遺跡（第2地点）全測図



第22図 第3号住居跡

2・6～8・10は、口縁部に横走る沈線の観察される口縁部資料である。このうち2は、P9出土資料、6・7は同一個体と思われる波状縁の資料である。4は、丈の低い隆帯を横位に貼りその上下を撫でつけるようにするもの、5は、横走隆帯の下端をよく撫で沈線化させ複合口縁風に整形したものである。11・12は、丈の低い隆帯で横位展開する文様帯の下端を区画する資料である。13は、ラッパ状に開く口縁部を持つ後期堀ノ内式土器で本址への混入資料と思われる。14～29は本址出土の胴部資料である。14・15は横走沈線が器面を巡るもの、16・17は、円形刺突列が器面を巡るもの、18～25は、単節縄文を縦位施文するとともに、沈線で区画された磨消文帯が垂下するもの、28は、条線文を地文とするもの、26は、単節縄文の



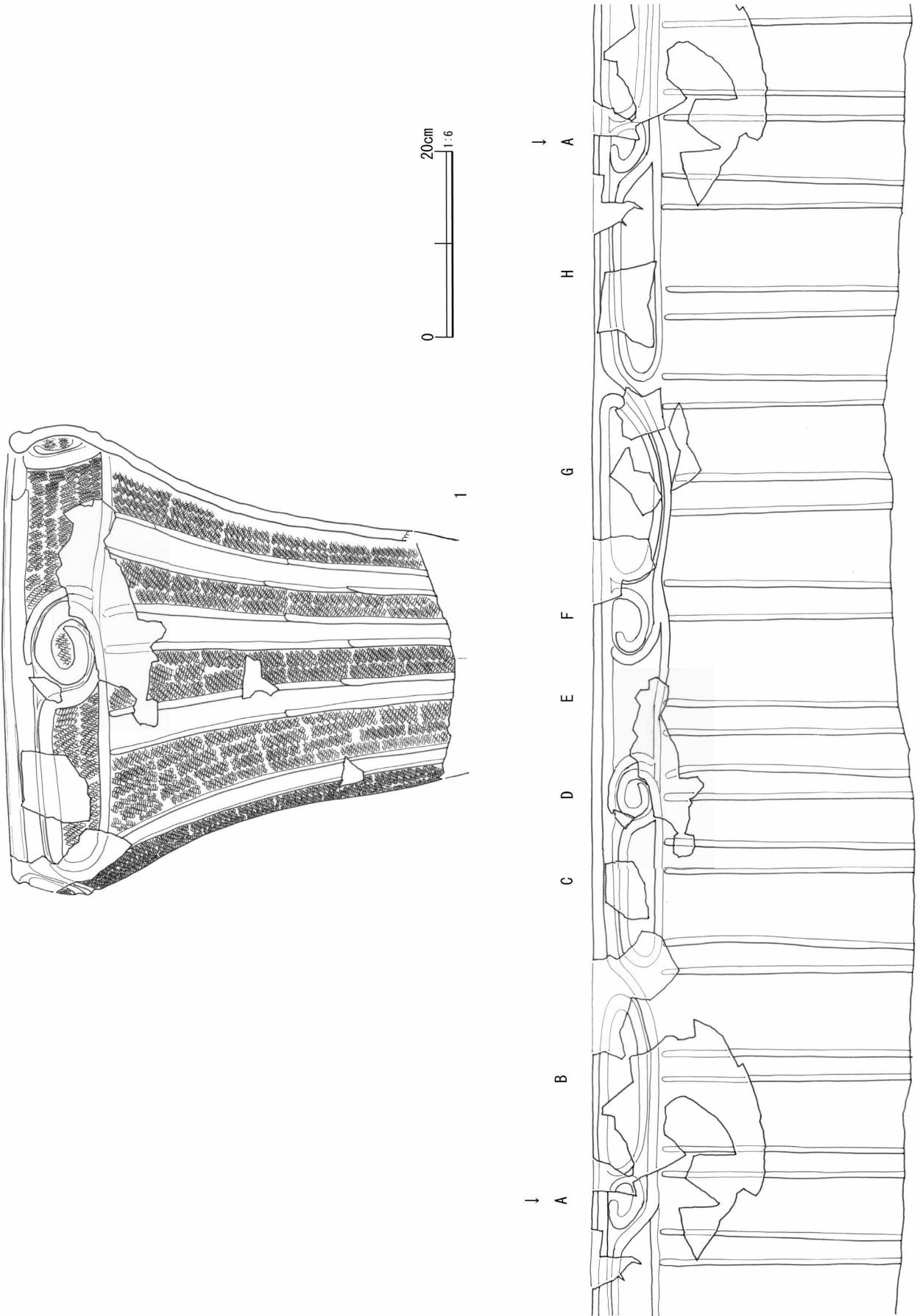
第23図 第3号住居跡遺物分布図

施された資料、29は、撚糸文を地文とするものである。31は、曲線を描く条線文の施されたものである。32は、推定胴径12cm、残存高9cmを測る無文の胴部資料である。上部では、横位の下部では縦位の撫でが施される。30・33は、底部資料である。前者は、無文で推定底径8.5cm、後者は、外傾傾向の強いもので、縄文地文上に磨消が看取される資料で、底径9.5cmを測る。

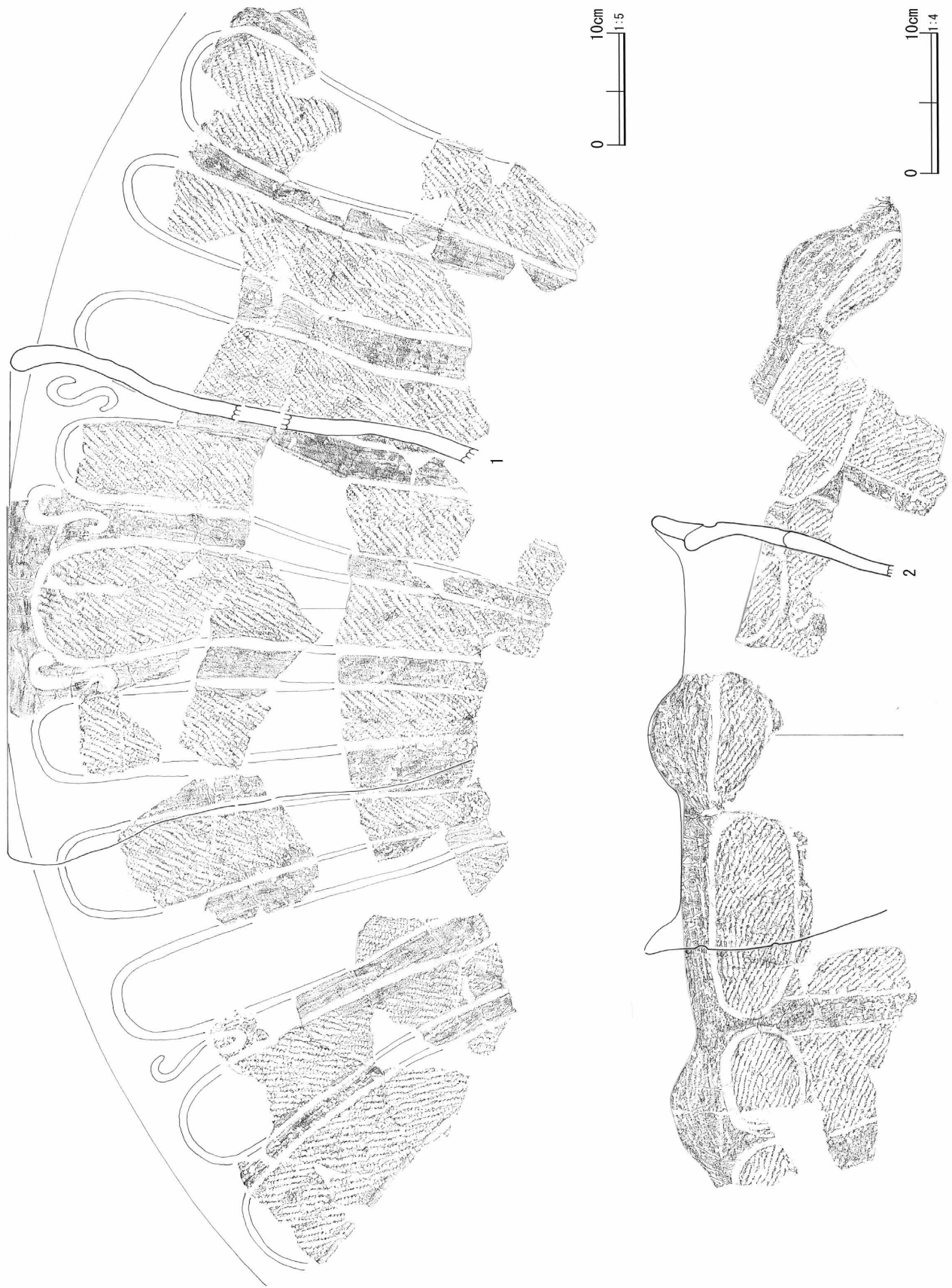
石器 第27図1・2は石鏃である。前者はチャート製の平基無茎石鏃で右側縁を欠く。左側縁の調整加工は規則的で丁寧な押圧剥離によるものである。後者は、チャート製の凹基無茎石鏃である。裏面基部側に成形段階の大型の剥離面を残すが、正面両側縁と裏面の先端寄りには丁寧な押圧剥離を加えている。基部の抉りは深いものではない。3は、定角式の磨製石斧の基部周辺の資料である。器面は丁寧に研磨整形されているが、ところどころ成形時のものと思われる剥離痕が窺われる。4は、ホルンフェルス製の厚みのある大型剥片を素材とする打製石斧の刃部付近の資料である。撥形をとったものと思われ、刃部は直刃となる。裏面には、素材剥片の主剥離面を残す。6は、磨石である。扁平な楕円礫を素材とし、表裏両面を研磨調整し平滑にしている。5・7～9はいずれも石皿兼凹石の残欠である。元の大きさを窺うことはできない。また、7・8は石囲炉の炉枠材とされていたものと思われる。7・9は裏面に多数の凹みがあけられている。

●第4号住居跡（第28・29・30・31図）

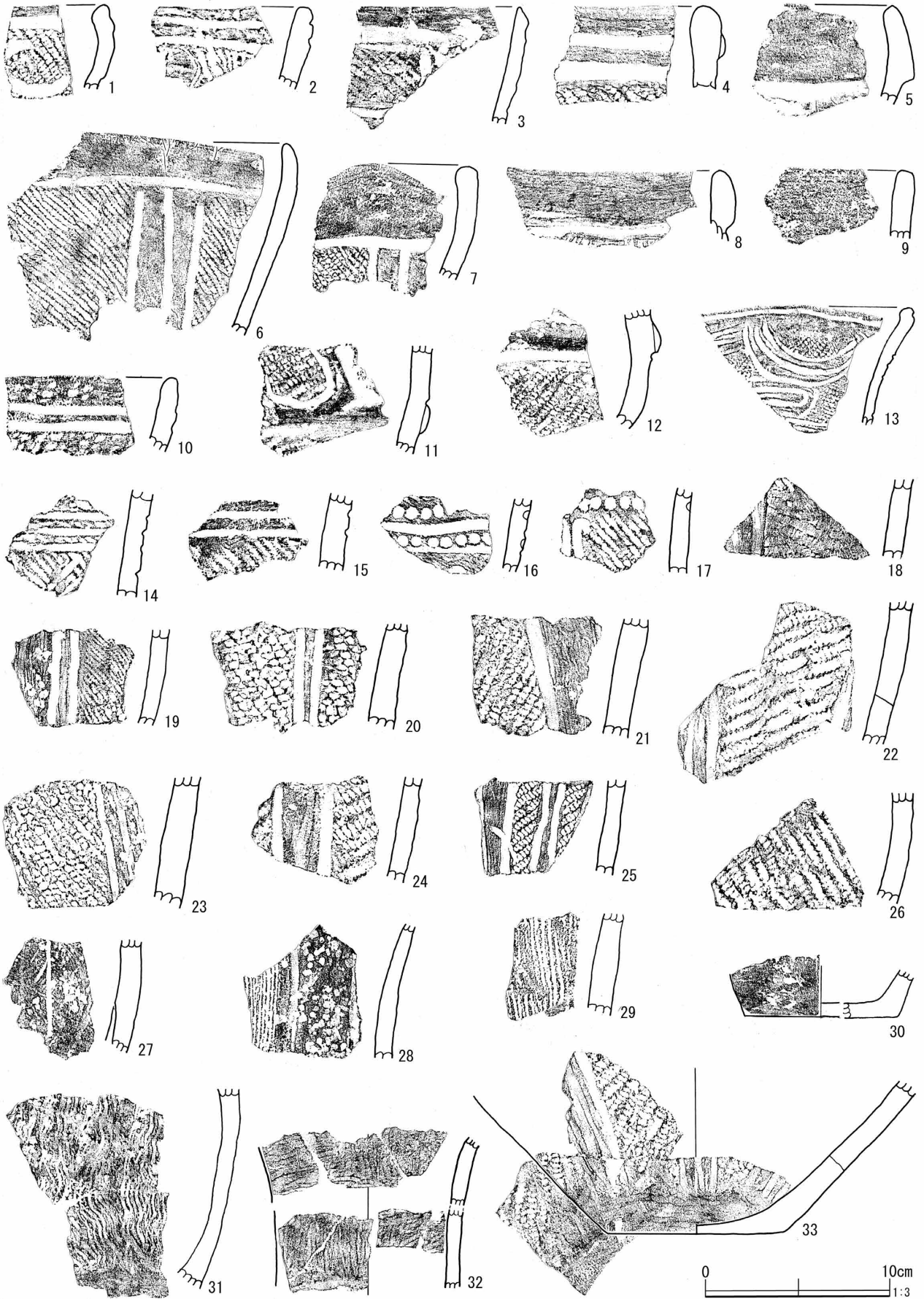
調査区の北西に位置し、第10号土坑に切られる。平面形は長径約5.2m、短径約5mの不整円形を呈す。



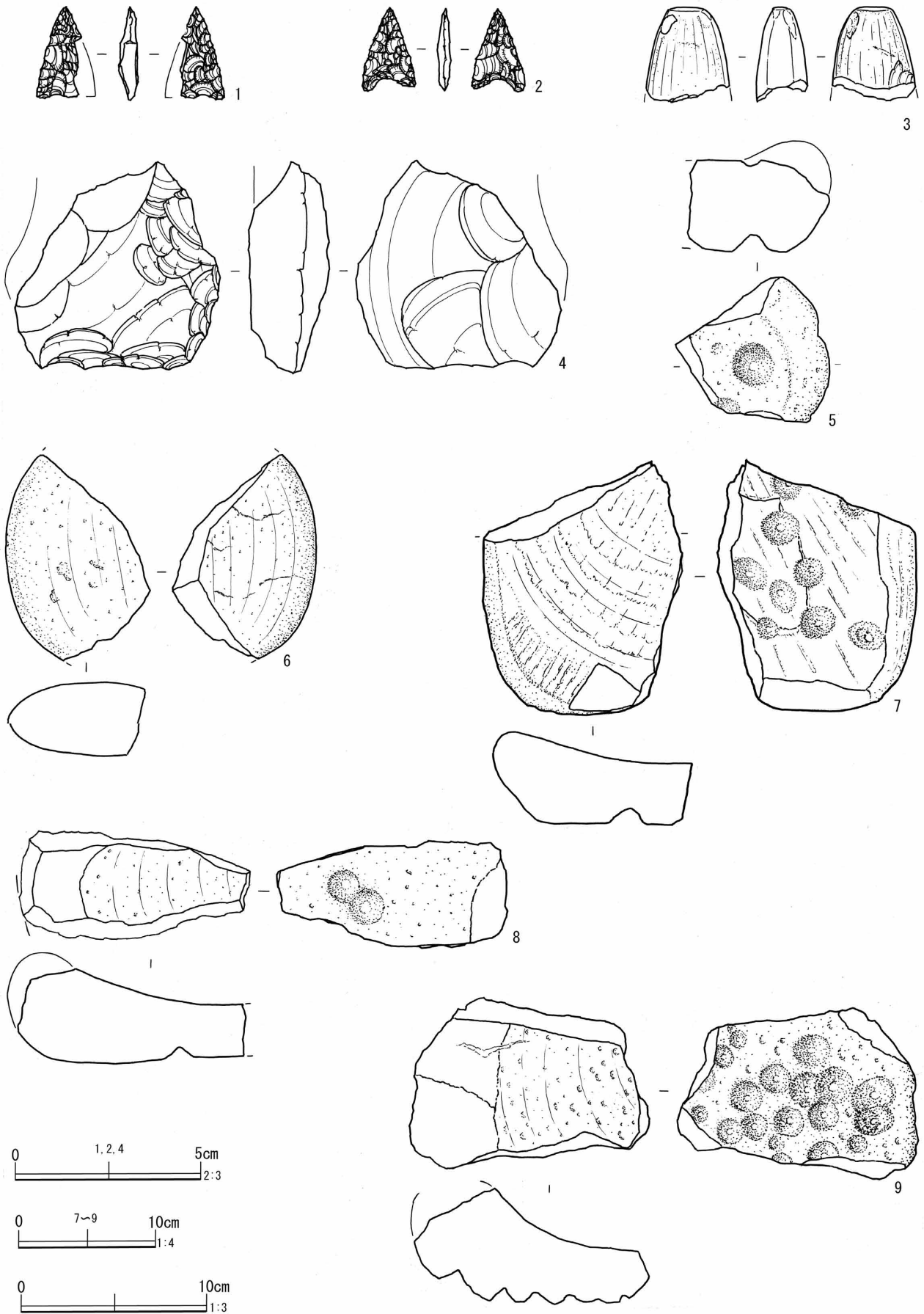
第24図 第3号住居跡出土遺物 (1)



第25図 第3号住居跡出土遺物（2）



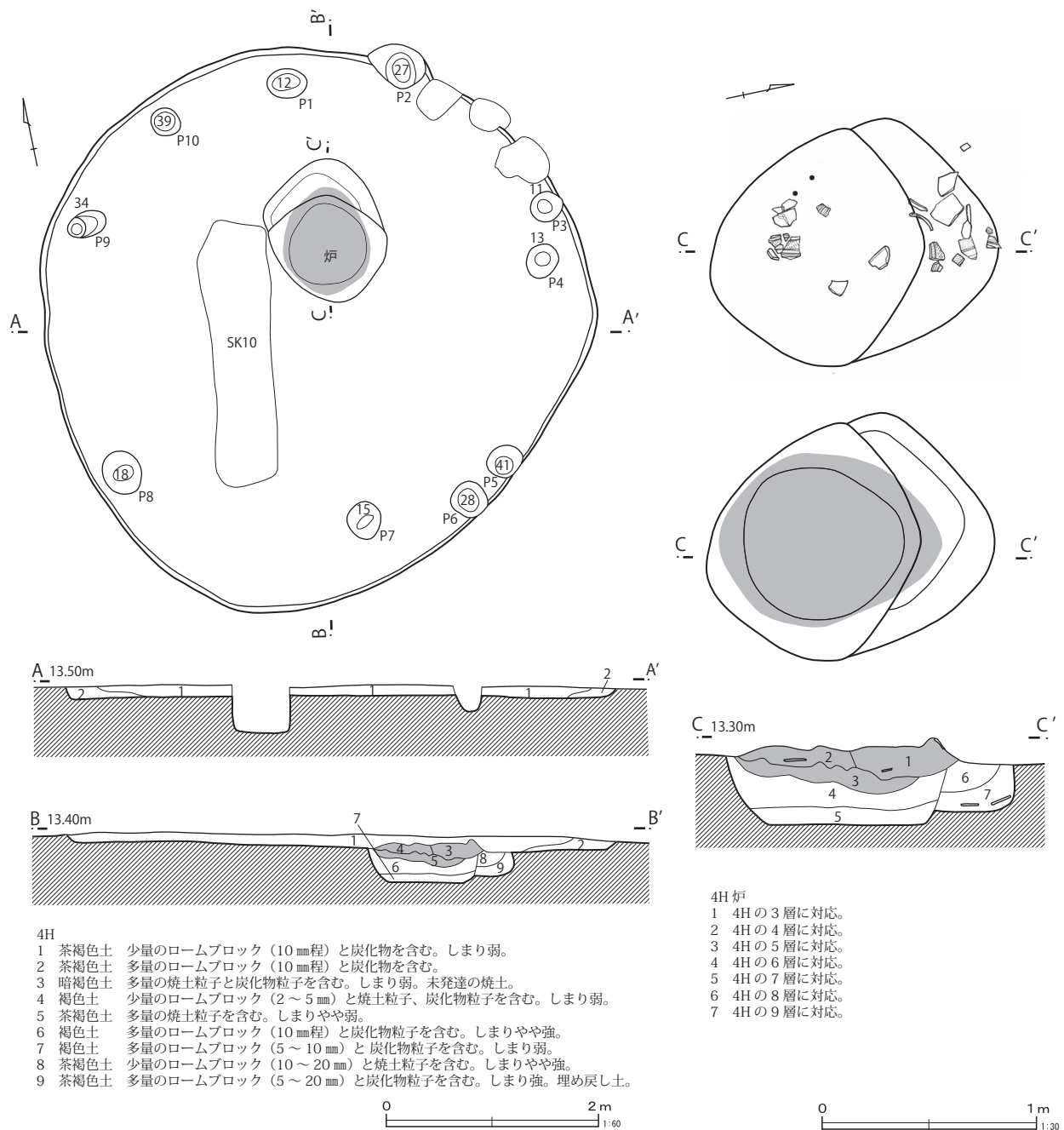
第26图 第3号住居跡出土遺物 (3)



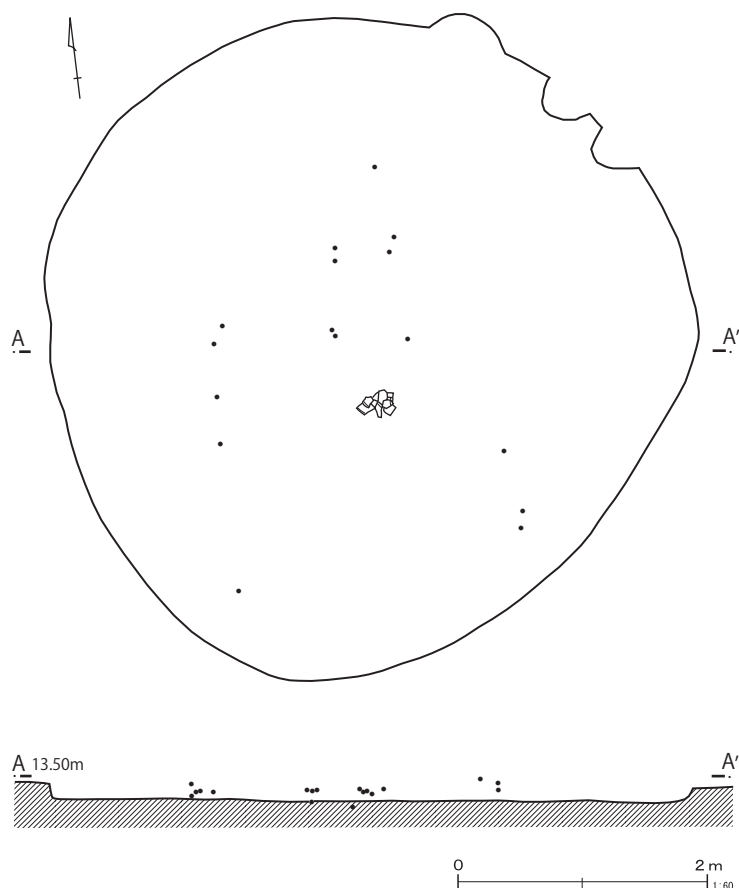
第27图 第3号住居跡出土遺物（4）

確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。住居の壁際を取り囲むように10基のピットが検出された。ピットの配置からは明確な支柱穴は推定し難いが、P5と10は炉跡を挟んで対角線上に位置し、いずれも床面からの深さ約0.4mを測る深いものであった。第29図のように住居跡の中央部付近で土器の大破片が出土している。

炉跡は地床炉で長径約1.4m、短径約1.1mの不整円形を呈し、住居跡内中央部より北寄りに位置している。炉の作り替えが行われており、作り替え後の炉跡は長径約1.1m、短径約1mを測る。炉跡の中央付近の長径約1m、短径約0.8mの範囲に発達した焼土の広がりが見られた。炉跡の付近からは遺物が集中して出土している。



第28図 第4号住居跡

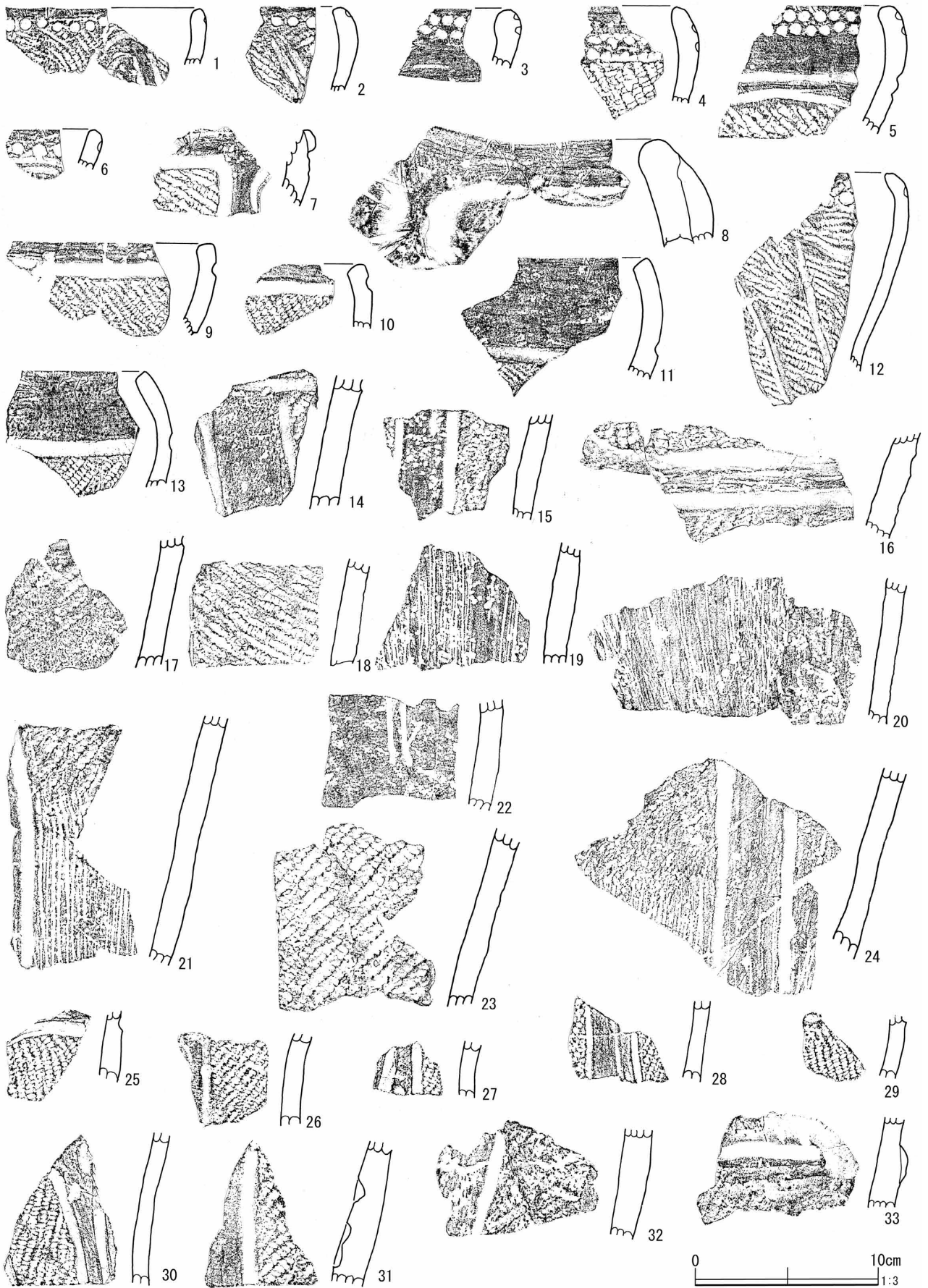


第29図 第4号住居跡遺物分布図

出土遺物（第30・31図）

土器 第30図1～6は、口縁部付近に円形刺突列の見られるキャリパー形深鉢の口縁部資料である。このうち1は、磨消しとなる「∩」状モチーフを看取することができる。5は、第31図5と類似する資料である。7は、隆帯と沈線とで口縁部文様帯を構成するキャリパー形深鉢の口縁部付近の資料である。8～13は、炉内出土の口縁部資料である。8は、丈の高い隆帯とこれに沿うように配される窓枠状区画の描出される内湾傾向の強い資料である。11・13は口唇を内削ぎに整えた内湾傾向の強い資料で、口縁部に比較的幅広い無文帯を置く特徴を持つ。12は、口縁部に配された枠状区画の内部に横走る円形刺突文列の施される資料である。胴部には、右下がり斜行する沈線が引かれる。14・15は胴部に垂下する磨消文帯の看取される資料である。前者の上端に見えるのは、口縁部文様帯下端区画線であろう。16は、口縁部文様帯として横位展開する枠状区画の下端と口縁部文様帯自体の下端区画線の窺える資料である。17・18・23は地文となる単節縄文の施される資料、19・20は縦位の条線文の施された資料、21・24は上部に単節縄文が、下部に条線文が施される胴部資料である。25～33は本址の炉跡出土の胴部資料である。このうち25・29・33は破片上部に口縁部文様帯の下端区画と思われる横走沈線または隆帯の観察される資料、26～28・30～32は垂下する磨消文帯の観察される胴部資料である。

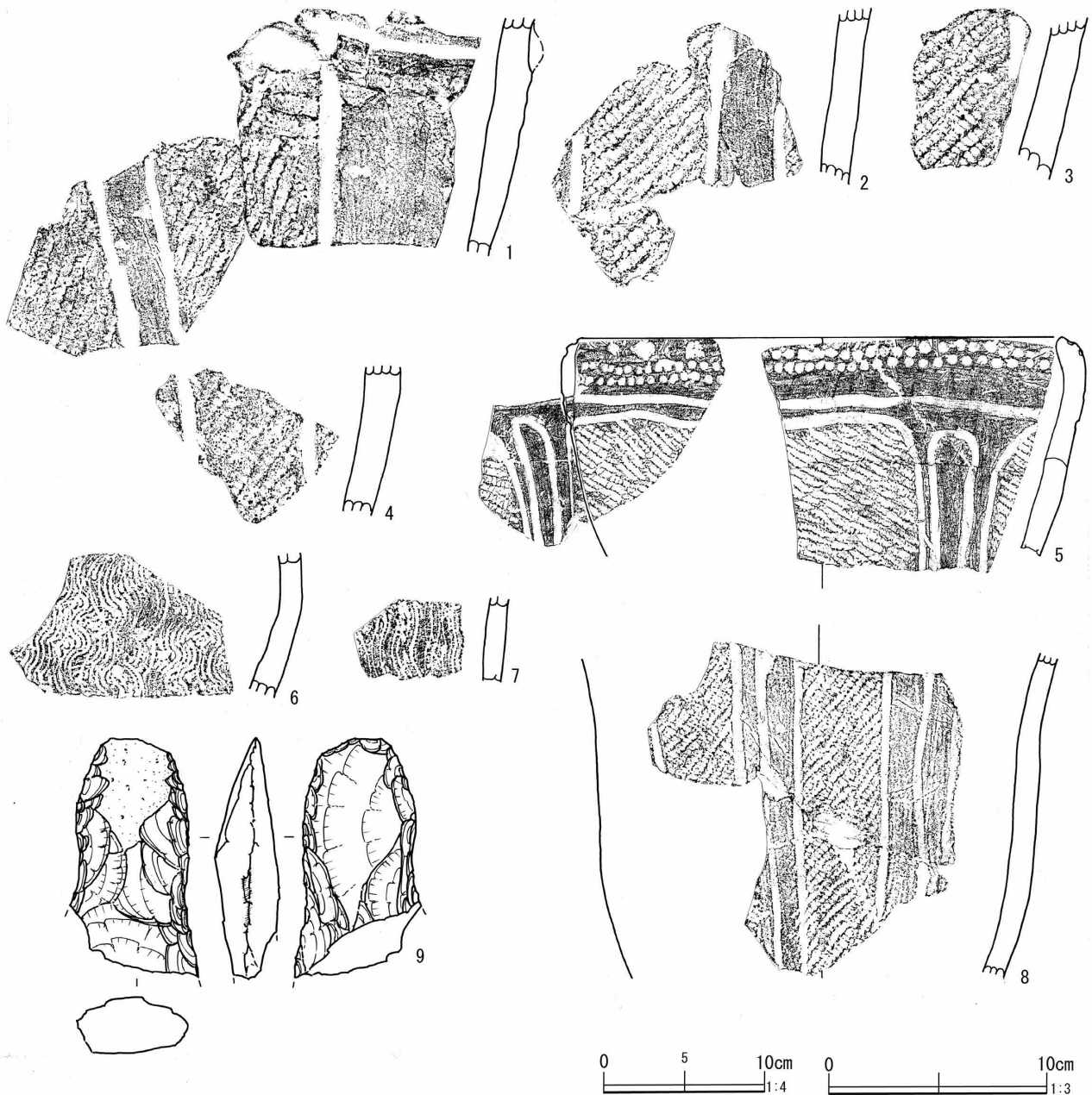
第31図1～8は、本址の炉跡から出土した資料である。1～4は、同一個体と思われる資料で、大型のキャリパー形深鉢土器である。1では、破片上端に断面三角形の横走隆帯を置き、口縁部文様帯の下端区画としている。2～4では、垂下する磨消文帯が観察される。6・7は櫛歯状施文具の支点を交互に変えながら曲線文を描出する資料である。5は、推定口径31cm、残存高14cmを測る深鉢形土器で、無文となる口縁部



第30图 第4号住居跡出土遺物 (1)

には2列の円形刺突文列を施す。胴部には、磨消文帯に縁取られた「∩」状の垂下文が施される。地文は単節LR縄文で、2指幅程度の施文幅で縦位回転施文される。8は、残存部最大径22cm、残存高15cmを測るキャリパー形深鉢土器の胴部資料である。垂下する磨消文帯は、3本1組の沈線で構成され、その間の縄文帯は単節RL縄文を縦位回転施文している。

石器 第31図9は、撥形となる打製石斧である。刃部を欠損する。円礫由来の横長の大型剥片を素材とし、正面基部に素材剥片の表皮を残すほか、裏面中央には素材剥片の主剥離面を残す。両側縁は両面からの連続する階段状剥離で成形されたのち細かな剥離を加え整えている。両側縁中央付近には、着柄痕と思われる擦痕が認められる。



第31図 第4号住居跡出土遺物（2）

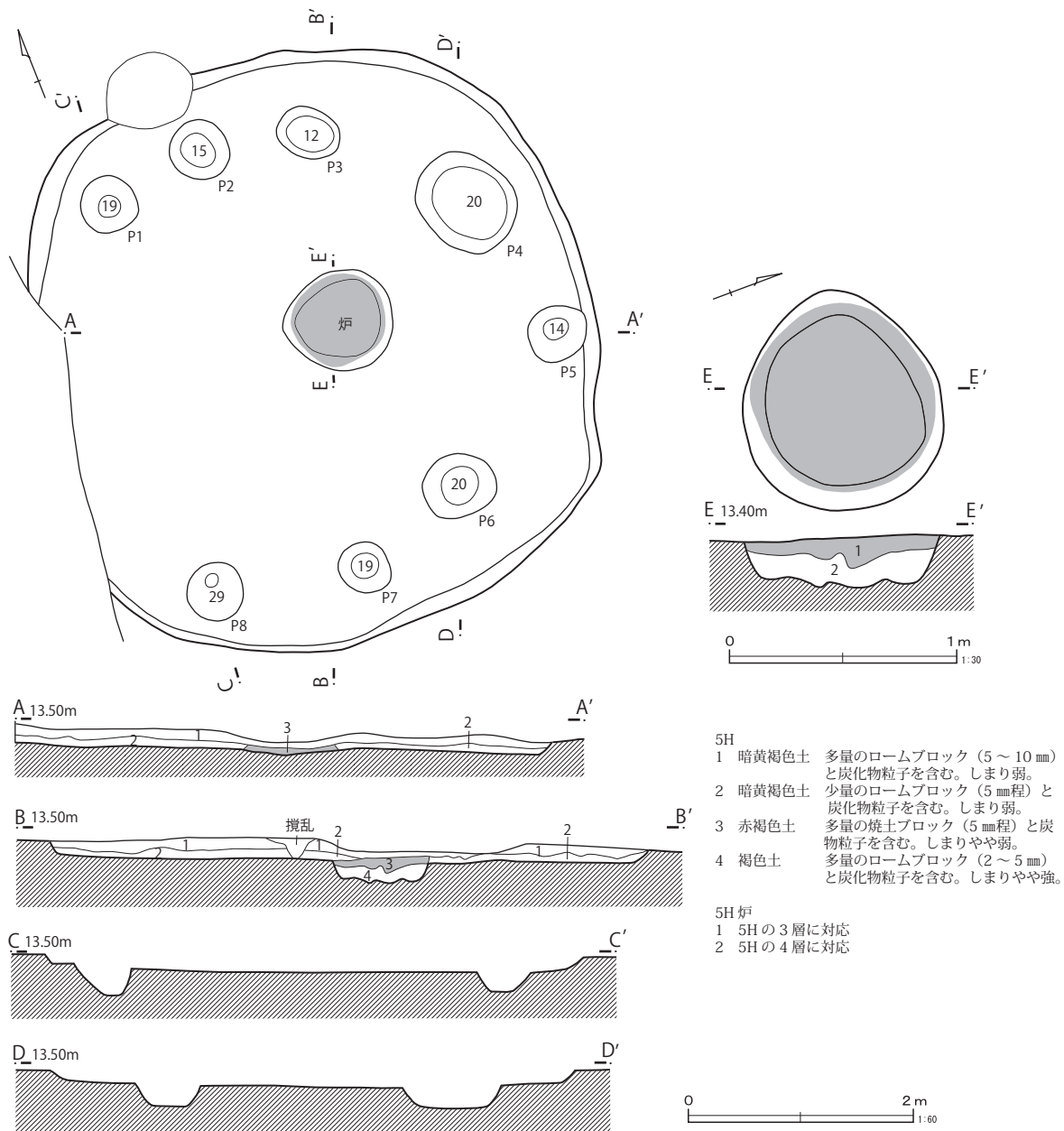
●第5号住居跡（第32・33図）

調査区の北西隅に位置し、西端は調査区外である。平面形は直径約6mの整った円形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。P1、6が対となる支柱穴である可能性が高い。P1、6を軸として考えた場合、炉跡の配置と合わせて、出入口は南西に推定される。

炉跡は長径約1m、短径約0.9mの不整円形を呈し、中央付近の直径約0.8mの範囲に発達した焼土の広がりが見られた。

出土遺物（第33図）

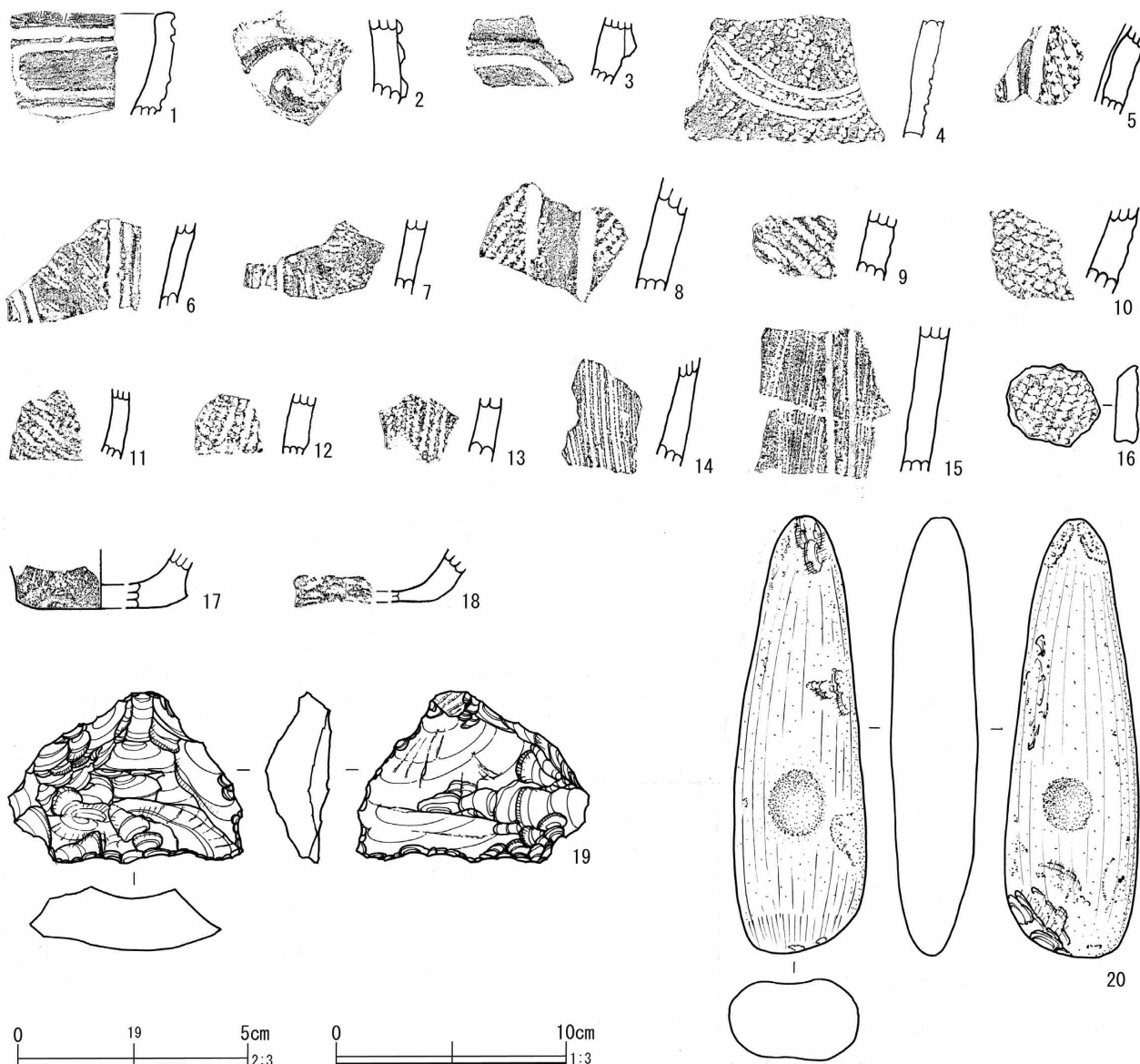
土器 1は、隆帯とその両側に引かれる沈線とで口縁部に杵状の区画を形成する資料である。2は、隆帯による渦巻文の施された口縁部文様帯の破片資料、3は、横走る隆帯と下向きの弧線の観察される資料、



第32図 第5号住居跡

4は、2条の沈線で上向きの弧線の描出された資料、5~8は、垂下する磨消文帯の観察される胴部資料である。9~12は、いずれも単節縄文の施される小破片、13は撚糸文の観察されるもの、14・15は縦位の条線文の施された資料である。17・18は無文の底部資料である。17は、底径7.5cmを測る。16は、長径4cm、短径3.3cmを測る土製円盤である。

石器 19は、チャート製の2次加工剥片である。貝殻状の剥片を素材とし裏面に素材剥片の主剥離面を残す。頂部に打面を残し、対向する縁辺に表裏から押圧剥離による2次加工が施される。20は、棒状を呈する敲石である。表裏及び両側縁はよく研磨整形されており、元来乳棒状の磨製石斧であった可能性もある。頂部と端部に敲打痕を残すほか、表裏両面のほぼ同じ位置に浅い円形の敲打痕が残される。



第33図 第5号住居跡出土遺物

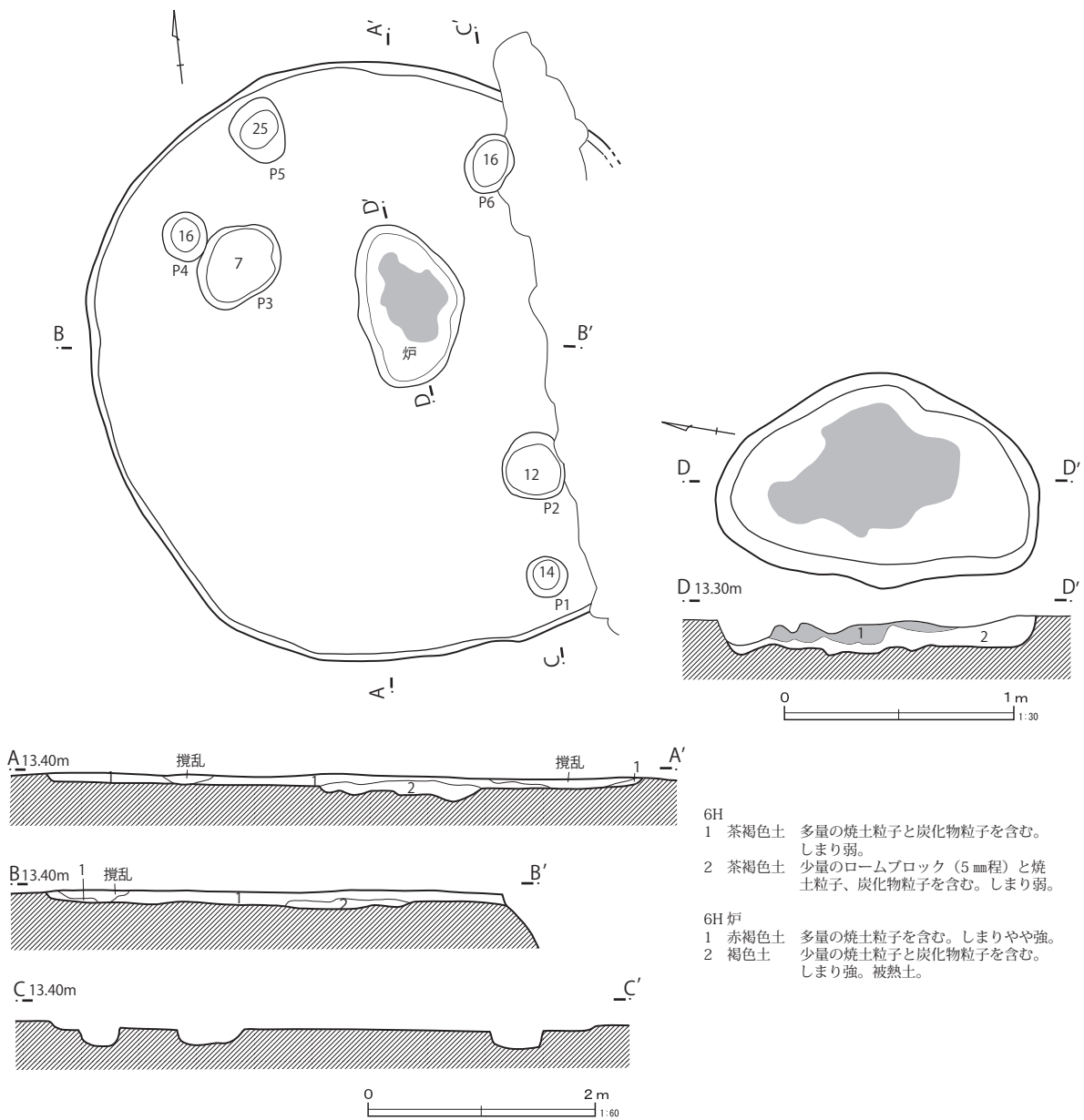
●第6号住居跡（第34・35・36図）

調査区の中央部に位置し、第7号住居跡を切る。住居跡東側は近世のピット列によって切られるが、平面形は直径約5.3mの円形を呈すものと考えられる。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。第35図のように住居跡の南側で集中して遺物が出土した。

炉跡は長径約1.4m、短径約0.9mの楕円形を呈し、炉跡の中央付近の長径約0.9m、短径約0.5mの範囲に発達した焼土の広がりが見られた。

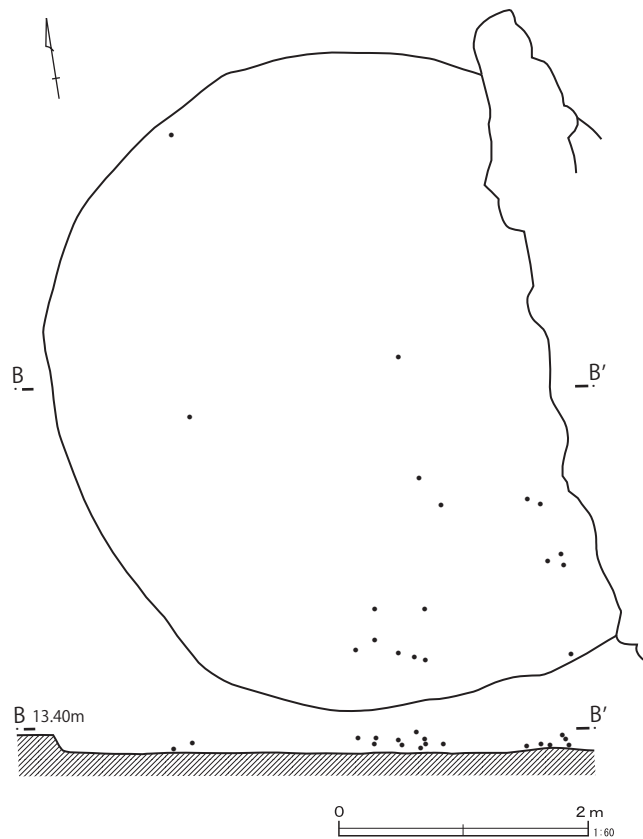
出土遺物（第36図）

土器 第1～3は、口縁部資料、4～8も口唇部を欠くものの口縁部文様帯に係る部分の破片資料である。1は、大ぶりのキャリパー形深鉢土器で、丈の低い隆帯に沿うように太い沈線を施し、杵状区画文を形成するも

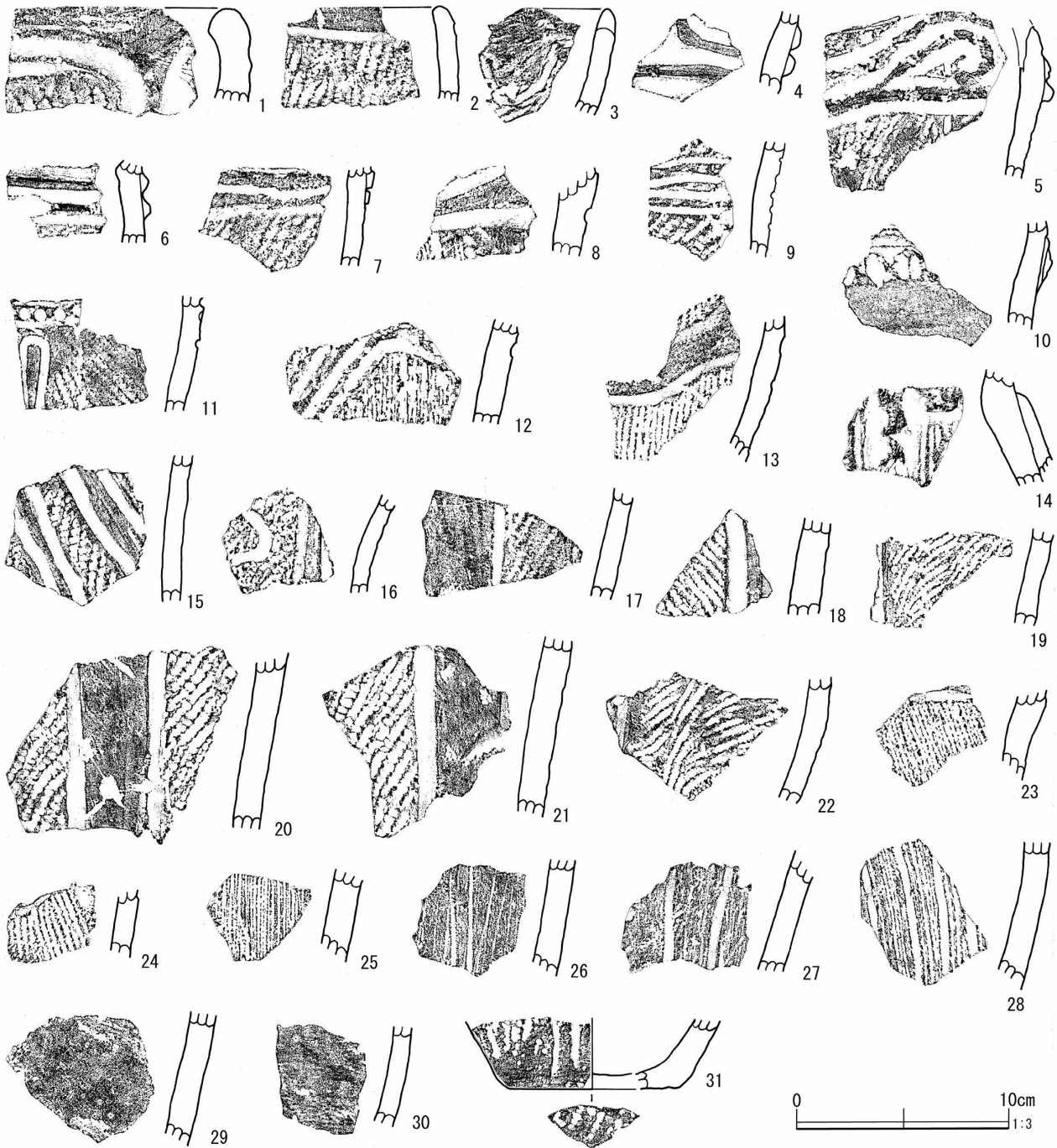


第34図 第6号住居跡

のである。2は、緩やかに内湾する口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下に単節縄文を斜位回転させたもの、3は、山形の小突起を持つもので、突起下部には弧線文が配されるようである。4～8は、隆帯と沈線とで口縁部文様帯を構成するもので、4は、断面台形の隆帯が観察されるもの、5では、内湾する口縁部に丈の高い隆帯で渦巻文とこれを縁取る区画を構成する資料、6は、断面三角形の横走隆帯が施されるものである。9は、地文上に4本の横走沈線が施されるもの、10は、断面三角形の横走隆帯を押し潰すように連続刺突の施された資料である。11は、P4出土で、胴部上半の資料と思われる。2条の沈線に縁取られた円形刺突文列と、この下に垂下する「∩」状の沈線文が窺われるものである。12・13は、条線文の地文上に磨消文による連弧文が描かれる胴部資料、14は、条線文の地文上に垂下する鎖状隆帯を配するもので、曾利式土器に該当しよう。15は、P2出土資料で、斜行する2帯の磨消文帯の観察されるものである。16は、縄文地文上に垂下する磨消文帯と垂下する蛇行沈線とを観察できるもの、17～22は、垂下する磨消文帯と縄文帯が観察される胴部資料、23・24は撚糸文地文で横走、斜行する沈線を認めるものである。25～28は、縦位の条線文を地文とするもので、27・28では、垂下沈線も観察される。29・30は無文のものである。31は、平底の底部資料である。縄文地文に垂下沈線の見られるもので、底径8cmほどと推定される。底面にも縄文が施される。



第35図 第6号住居跡遺物分布図

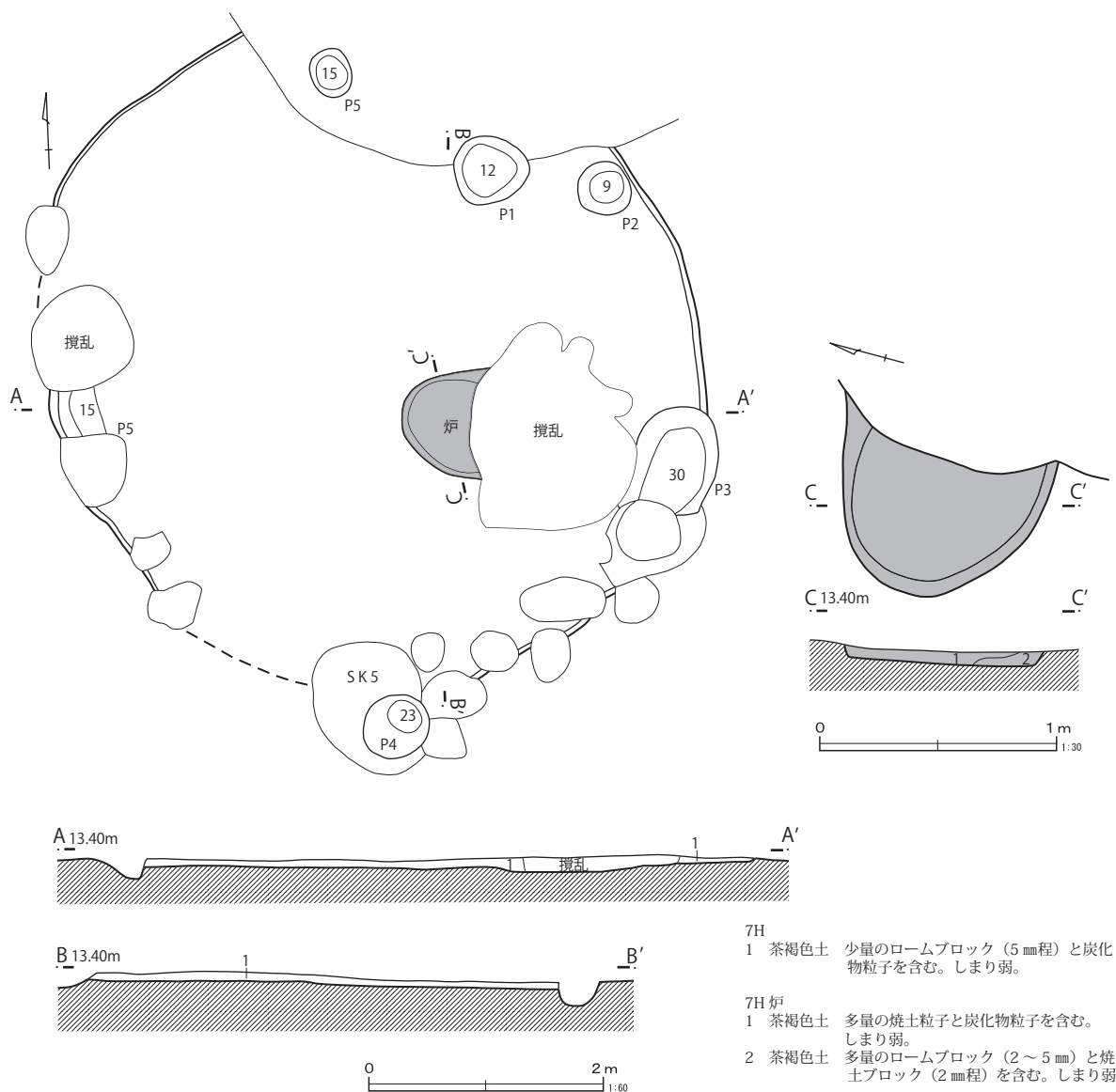


第36図 第6号住居跡出土遺物

●第7号住居跡（第37・38図）

調査区の中央部に位置し、第6号住居跡と第5号土坑に切られる。住居跡南側は近世のピット列によって切られるが、平面形は直径約6mの円形を呈すものと考えられる。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。

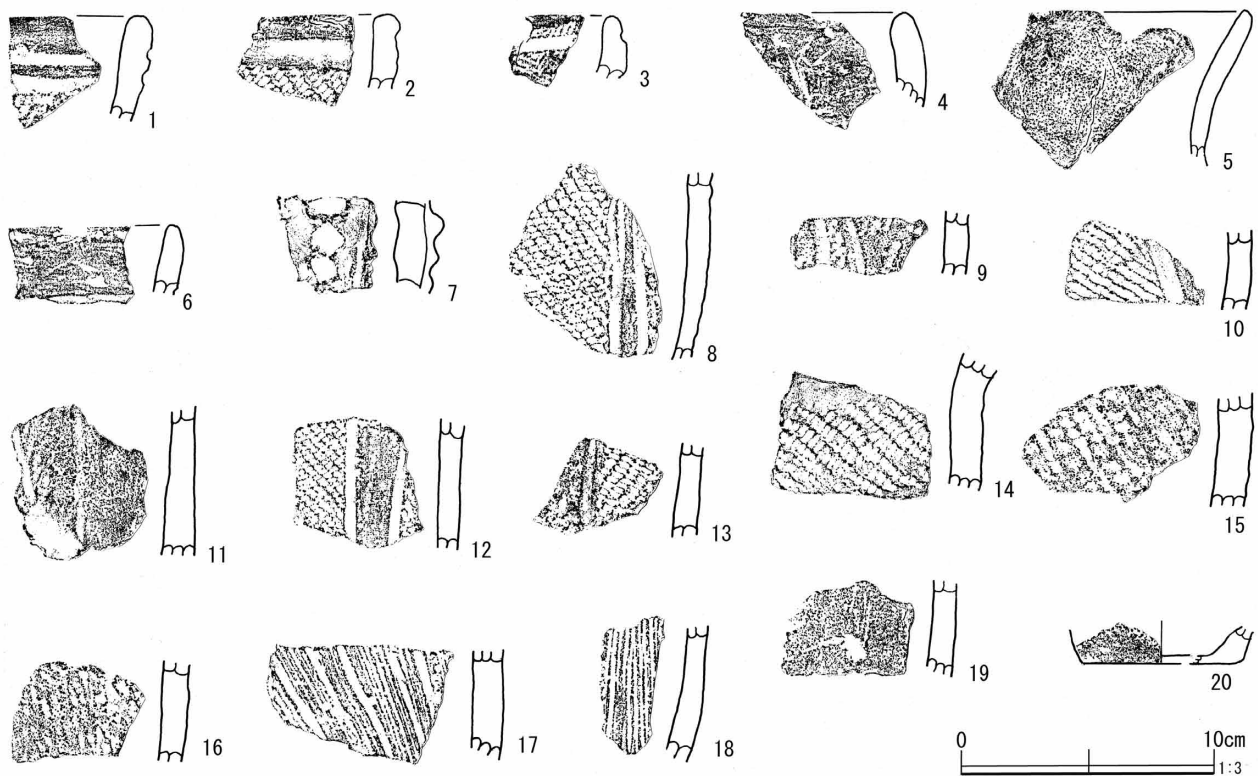
炉跡は住居跡内中央部よりやや南寄りに位置している。南側を攪乱で切られるが、直径約0.9mを測り、全面に発達した焼土の広がり認められた。



第37図 第7号住居跡

出土遺物（第38図）

土器 1～6は本址出土の口縁部資料である。このうち1はP5出土で、口縁部に2条の浅い沈線の引かれる直立傾向の高い資料である。2は、玉縁状となる口唇部直下に太い沈線を引くものである。3は、縄文地文上に1条の沈線を引く小片である。4は、内湾傾向の強い無文の資料で、本址の炉跡出土のものである。5は、大きく外反する無文の口縁部資料で、P3出土のものである。6は、わずかに外反する無文の口縁部資料で、下端に横走沈線が引かれていたことがわかる。7・8はともにP4出土のもので、前者は鎖状隆帯の垂下するもの、後者は数条の沈線の引かれる磨消文帯と単節LR縄文を縦位回転させた縄文帯の観察される胴部資料である。9～13は、垂下する磨消文帯と縄文帯の観察される胴部資料、14は、上部の外反する資料で、外反部分は横位に撫でられている。地文は、単節RL縄文で3指幅ほどで横位回転させたものである。15・16は縄文の施された資料である。器面がやや荒れているが、前者は1段の太さに差のある単



第38図 第7号住居跡出土遺物

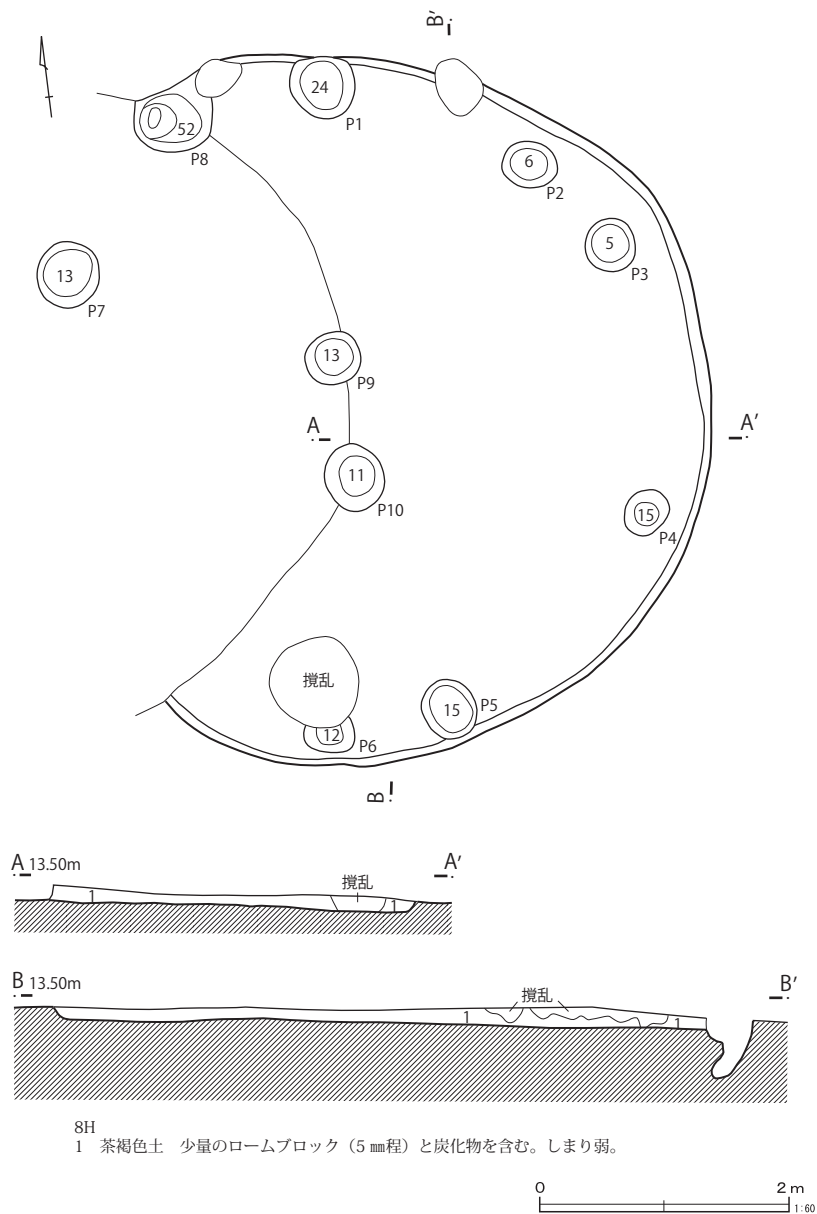
節 LR 縄文である。16は、無節縄文であろう。17・18は条線文の施される胴部資料である。19は無文の胴部資料で縦位の粗い撫でが施される。20は、無文の底部資料で、推定底径6.2cmを測る。底面円盤の非常に薄い資料である。

●第8号住居跡（第39・40・41図）

調査区の北西に位置し、第3・9号住居跡に切られる。住居跡西側は第3号住居跡によって大きく切られるが、平面形は直径約5.7mの円形を呈すものと考えられる。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。住居跡内のピットは床面からの深さ0.1m前後の浅い窪みがほとんどであるが、P8のみは深さ0.5m以上を測る深いもので、柱の抜き取りと思しき痕跡も認められた。第40図のように住居跡の南西隅で集中して遺物が出土した。炉跡を検出することはできなかった。

出土遺物（第41図）

土器 1・2は本址出土の口縁部資料である。1は、玉縁状を呈する口縁部直下に丈の低い隆帯と沈線を配し、口縁部に杵状区画を形成すると思われる資料である。2は、外反傾向を示す無文の口縁部資料で、横位の撫での痕跡が明瞭に残される。3は、1段の太さの大きく異なる単節縄文を地文とするもので、横位の沈線1条が看取される。4は、垂下する磨消文帯と単節縄文の施された縄文帯を見ることのできる胴部資料である。5は、斜行する縄文帯の見られる胴部資料である。繊細な充填縄文は後期の所産である可能性が高い。6は、縦位の条線文と磨消文帯の見られる胴部資料である。破片下端は、輪積から脱落したものである。7は、無文の胴部資料で、横位の幅広の撫での痕跡が残される。8は、無文の底部資料で、推

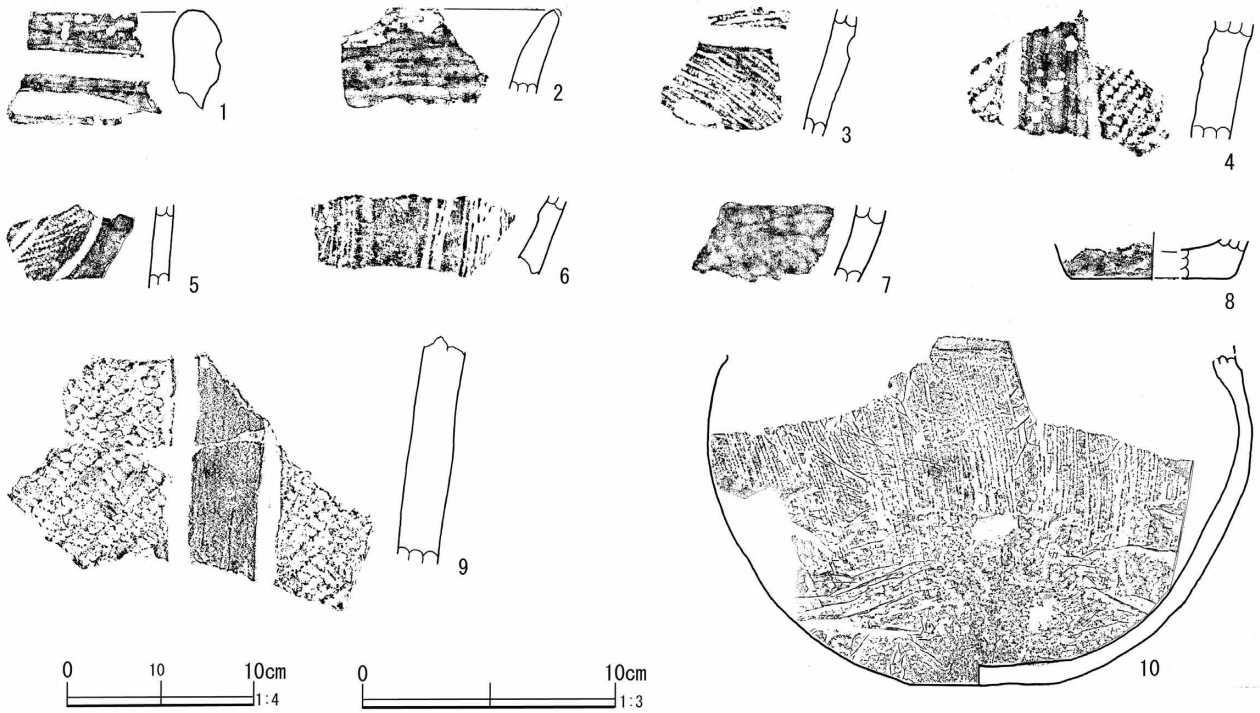


第39図 第8号住居跡

定底径6.4cmを測る。9は、大ぶりの胴部資料で中央に垂下する磨消文帯が見られる。両脇には単節RL縄文の施された縄文帯が残される。本資料は第3号住居跡出土資料との接合関係を持つ。10は、胴部最大径21.5cm、底径6.0cm、残存高14cmを測る比較的小ぶりの広口壺形土器の胴部資料である。頸部に横位の沈線1条を認める。以下胴部中程まで縦位の条線文、以下を無文とするものである。



第40图 第8号住居跡遺物分布图



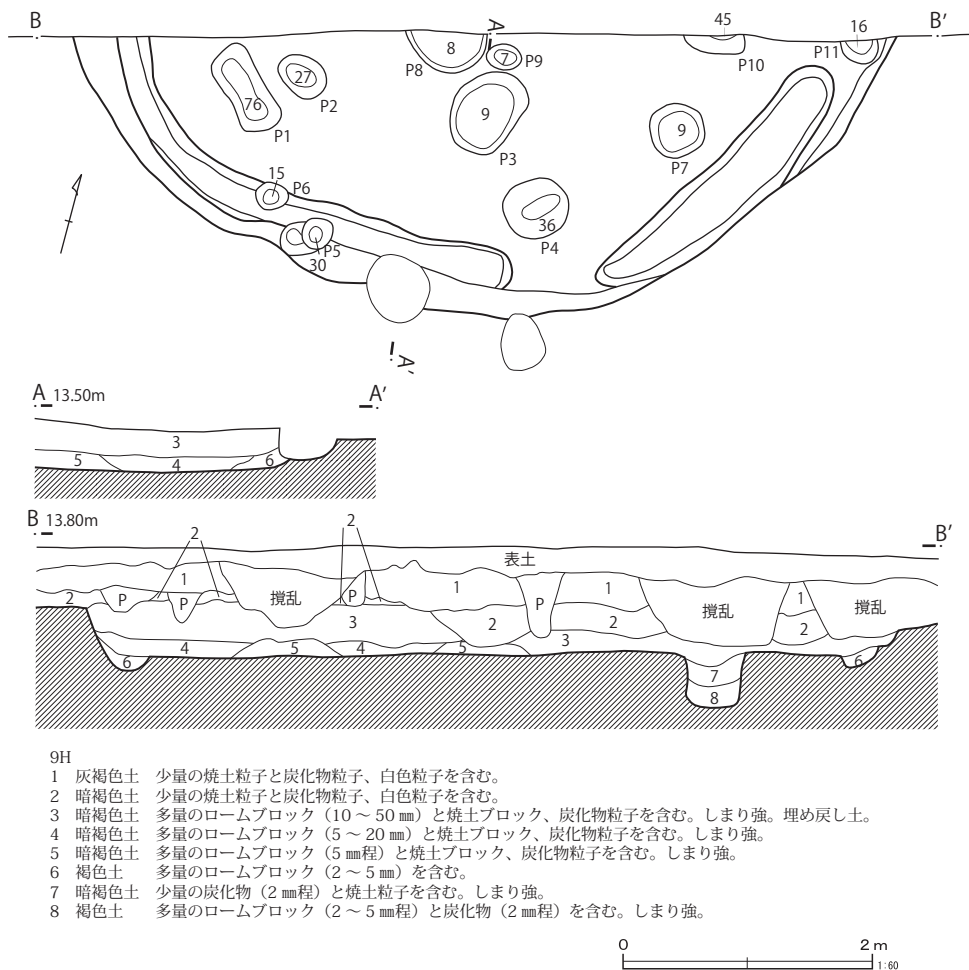
第41图 第8号住居跡出土遺物

●第9号住居跡（第42・43・44・45図）

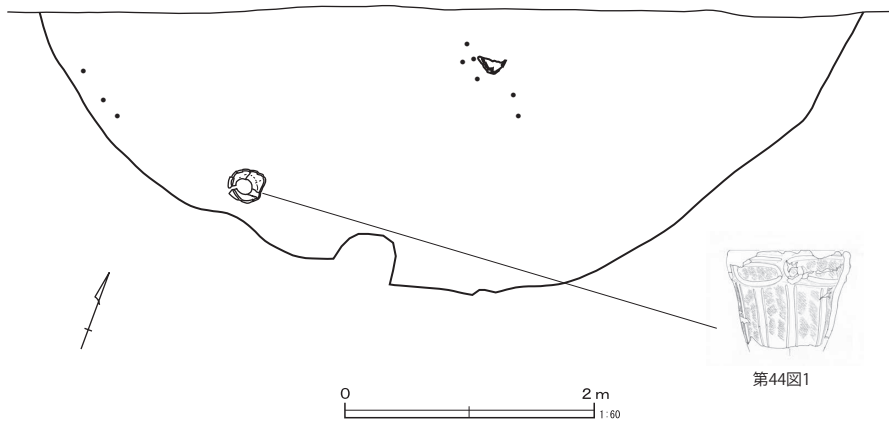
調査区の北西隅に位置し、北側の大半は調査区外である。半分以上が調査区外であるため、詳細は不明であるが、検出部分から平面形は直径約6mの円形を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは約0.4mであった。壁際に壁溝と思しき幅0.3~0.5mの周溝が巡る。第43図のようにP6では、土器が正位で埋置され、住居跡の中央部付近では土器の大破片が出土している。炉跡を検出することはできなかった。

出土遺物（第44・45図）

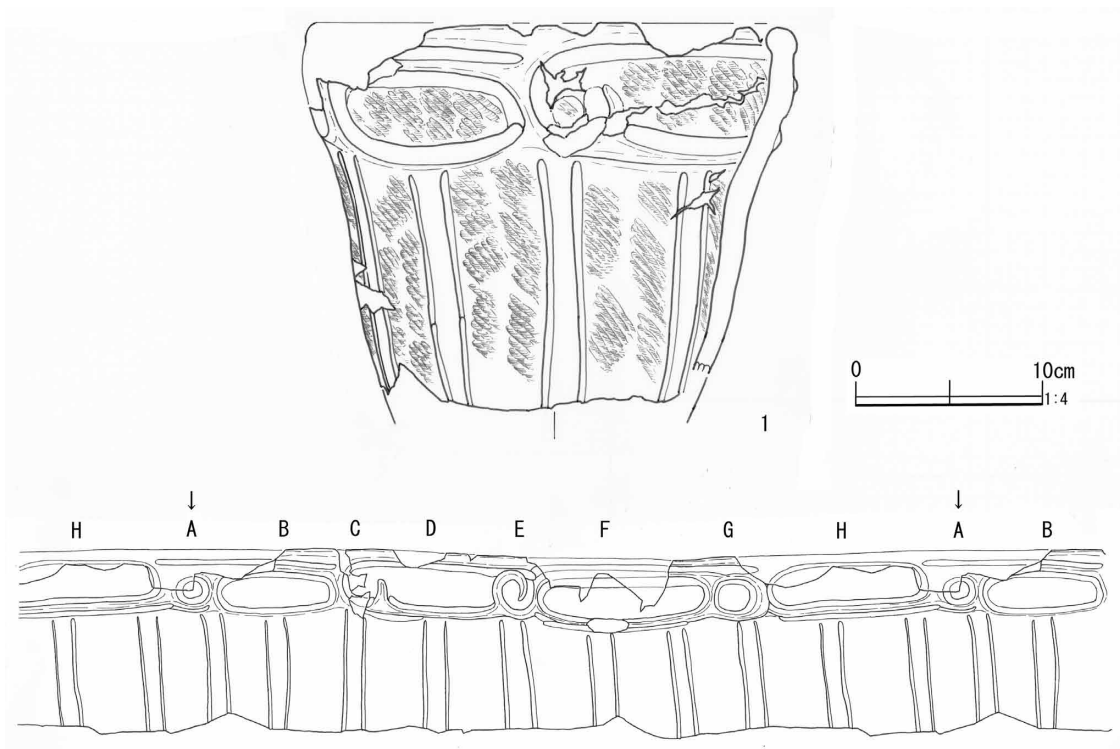
土器 第44図1は、口径25cm、残存高20cmを測る小型のキャリパー形深鉢である。口縁部に、丈の低い隆帯と沈線とで渦巻文と杵状文を連ねた文様帯を持つ。胴部は2条の沈線に画された磨消文帯と無節縄文を縦位回転させた縄文帯が観察される。口縁部を中心に欠損部が目立つが、文様帯の構造自体は、概ね把握できる。展開図を参照しながら概観したい。本資料の口縁部文様帯は、A・C・E・Gの渦巻文ないし円文と、B・D・F・Hの長楕円区画とが交互に組み合わせられて構成される。それぞれの単位文を形成する隆帯に注目してみよう。A・B間とF・G間では、杵状区画と玉縁状となる口縁部との間に横走る沈線が引かれ、単位文の上端区画隆帯と口縁部とは独立している。しかし、Dの上、Hの上には、沈線が引かれておらず玉縁状となる口縁部が上端区画を兼ねる構造となっている。また、長楕円区画Bの下端に



第42図 第9号住居跡

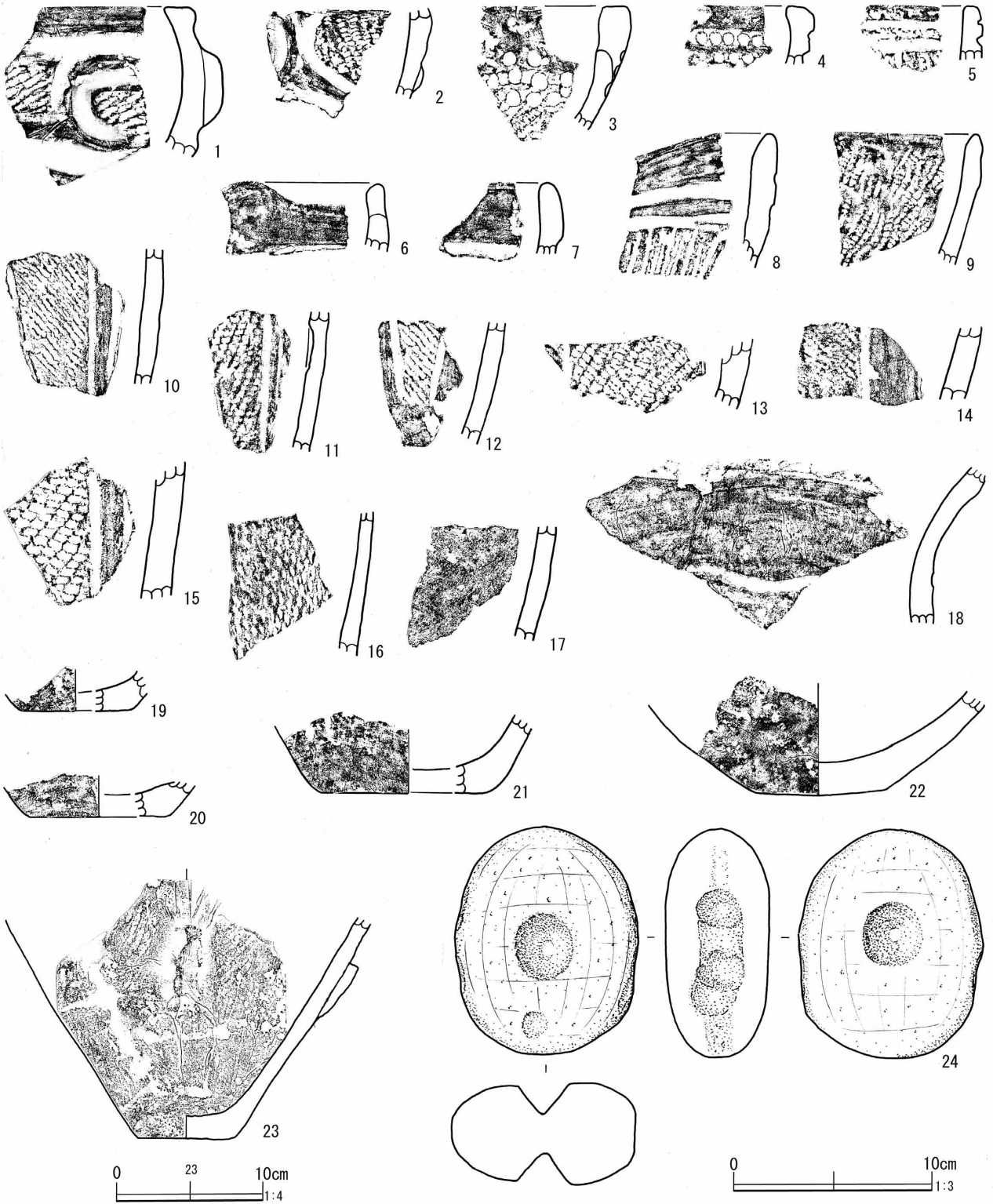


第43图 第9号住居跡遺物分布图



第44图 第9号住居跡出土遺物（1）

は隆帯が貼られておらず、直接磨消文帯が垂下する。それぞれの単位文の下端を画す隆帯の下側に関しては、F・Hの下では細いものの明瞭な沈線が引かれるが、Dの下では浅く不明瞭な撫で風の沈線がC寄りに認められるのみである。次に、それぞれの単位文に目を移すと、F・H・Bでは独立した長楕円区画であることがわかるが、Dでは、巻切らない渦巻文Cを内部に取り込み、同時に渦巻文Eとの間を画す沈

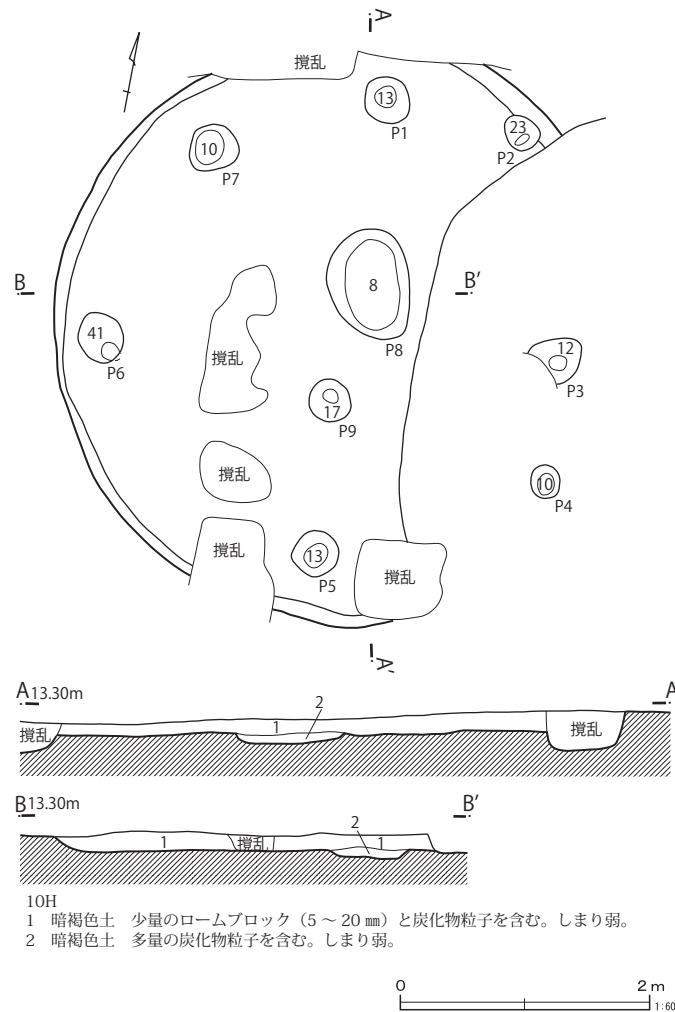


第45図 第9号住居跡出土遺物（2）

線が引かれていないことがわかる。

第45図1・2は、口縁部に隆帯と沈線とで渦巻文や杵状文を配する文様帯を構成するものである。2は、口唇部を欠く。3・4は、口縁部に円形刺突文列を配する資料で、3は、柱状の突起を持つ。4は、2条の凹線の中に刺突列が形成されるもので、口唇部は肥厚する。5は、角頭状を呈する口唇部直下に深さのある横走沈線2条を引くものである。6・7は、口縁部に幅の狭い無文帯を置くもので、6では、半円状の突起が付される。両者とも、破片下端に無文帯を画すると思われる横走沈線が引かれることがわかる。8は、波状縁を呈する深鉢型土器と思われ、口縁部に2条の横走沈線を引き、以下を条線文とするものである。9は、やや外反傾向を示す平縁深鉢で、単節RL縄文を斜め回転させている。10～15は、垂下する磨消文帯と縄文帯の施される胴部資料である。11は、複節縄文を地文とするもの、12は、底部に近い部位と思われ、すぼまりながら終わる縄文帯が観察されるものである。16は、撚糸文を地文とするものである。17は無文の資料、18は、大きく外反する頸部付近の資料と思われる。キャリパー形深鉢の頸部無文帯に該当するものと思われる。19～22は無文の底部である。推定底径は、19が5.8cm、20が7.2cm、21が8.8cm、やや丸底となる22では6.5cmを測る。23は、単節RL縄文を地文とする底部資料で、残存部最大径25cm、残存高17cm、底径6.5cmを測る。鎖状隆帯の末端と思われる丈の高い垂下隆帯が観察される。

石器 第44図24は、石鱗状に整形された磨石兼凹石である。磨石としての使用は両面に及ぶが、正面の



第46図 第10号住居跡

方がよく使用されている。凹石としても両面で使用されている。凹みは漏斗状の深いもので、両面ともほぼ同じ位置に穿たれる。また、両側縁にも浅い凹みが数カ所確認される。

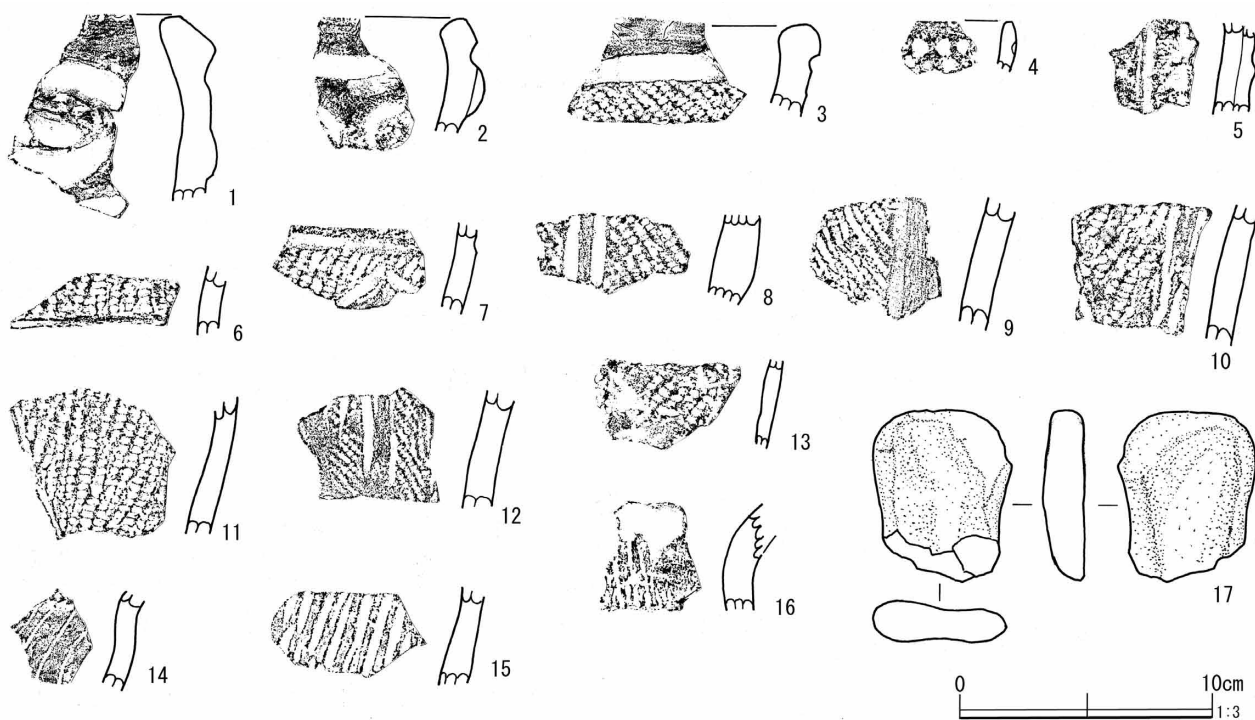
●第10号住居跡（第46・47図）

調査区の東側に位置し、第11号住居跡に切られる。住居跡東側は第11号住居跡によって大きく切られるが、平面形は直径約4.6mの円形を呈すものと考えられる。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。住居跡内のピットは床面からの深さ0.1m前後の浅い窪みがほとんどであるが、P6のみは深さ0.4m以上を測る深いものである。炉跡を検出することはできなかった。

出土遺物（第47図）

土器 1～4は本址出土の口縁部資料で、1・2は、隆帯と沈線とで渦巻文や杵状文を連ねた口縁部文様帯を構成する資料である。3は、玉縁状となる口縁部外縁に太めの沈線を横走させる資料で、杵状文を構成すると思われる沈線以下には単節縄文が施される。4は、2列の円形刺突文列が観察される薄手の資料である。小型の深鉢形土器の口縁部である。5は、鎖状隆帯の垂下することのわかる資料である。6は、P6出土の資料で、破片下端に横走沈線が窺われる。7は、破片上端に1条の横走沈線が引かれ、以下に連弧文が施される。6・7は地文に単節縄文を斜位施文し、条を縦位に走行させることで連弧文土器の持つ撚糸文地文に見立てたものと思われる。8～10・12は2条の沈線に挟まれた磨消文帯と縄文帯の看取される胴部資料である。11は、斜位回転施文した単節縄文地文上に右下がりに斜行する1条の沈線が観察されるものである。13は、単節縄文の施されたもの、14～16は条線文の施された資料である。このうち16は、大きく外反するもので、P4出土の資料である。

石器 17は、砥石と思われる砂岩製の資料で、扁平な円礫を素材とし、表裏両面の中程に浅い溝状の使用面が窺われる。



第47図 第10号住居跡出土遺物

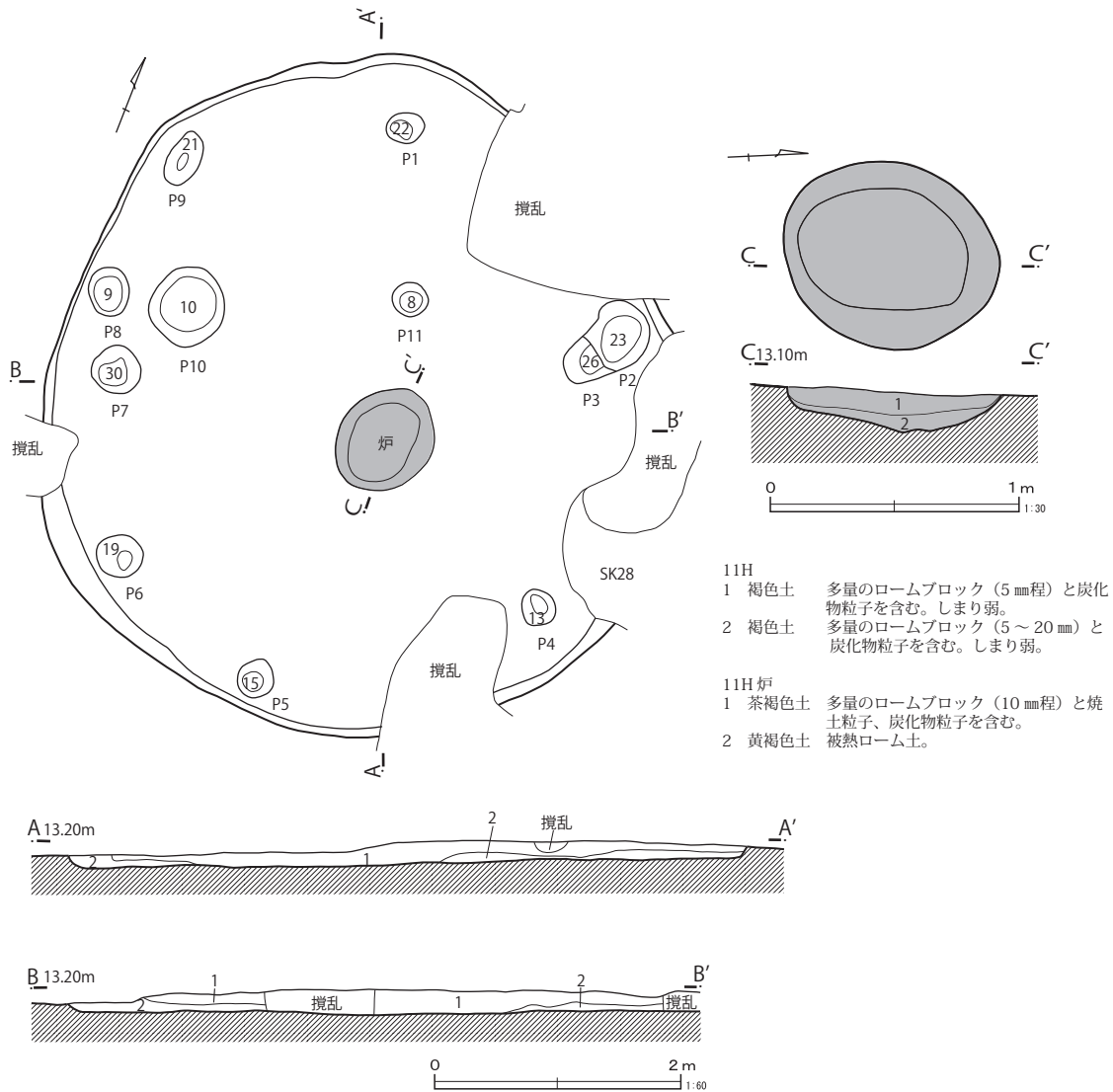
●第11号住居跡（第48・49図）

調査区の東側に位置し、第10号住居跡を切り、第28号土坑に切られる。平面形は直径約5.2mの整った円形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.2mであった。P3、7が対となる支柱穴である可能性が高い。P3はP2の建て替えの柱穴であろう。P3、7を軸として考えた場合、炉跡の配置と合わせて、出入口は北西（P1、9の間）に推定される。

炉跡は地床炉で長径約0.9m、短径約0.7mの楕円形を呈し、全面に発達した焼土の広がりが見られた。

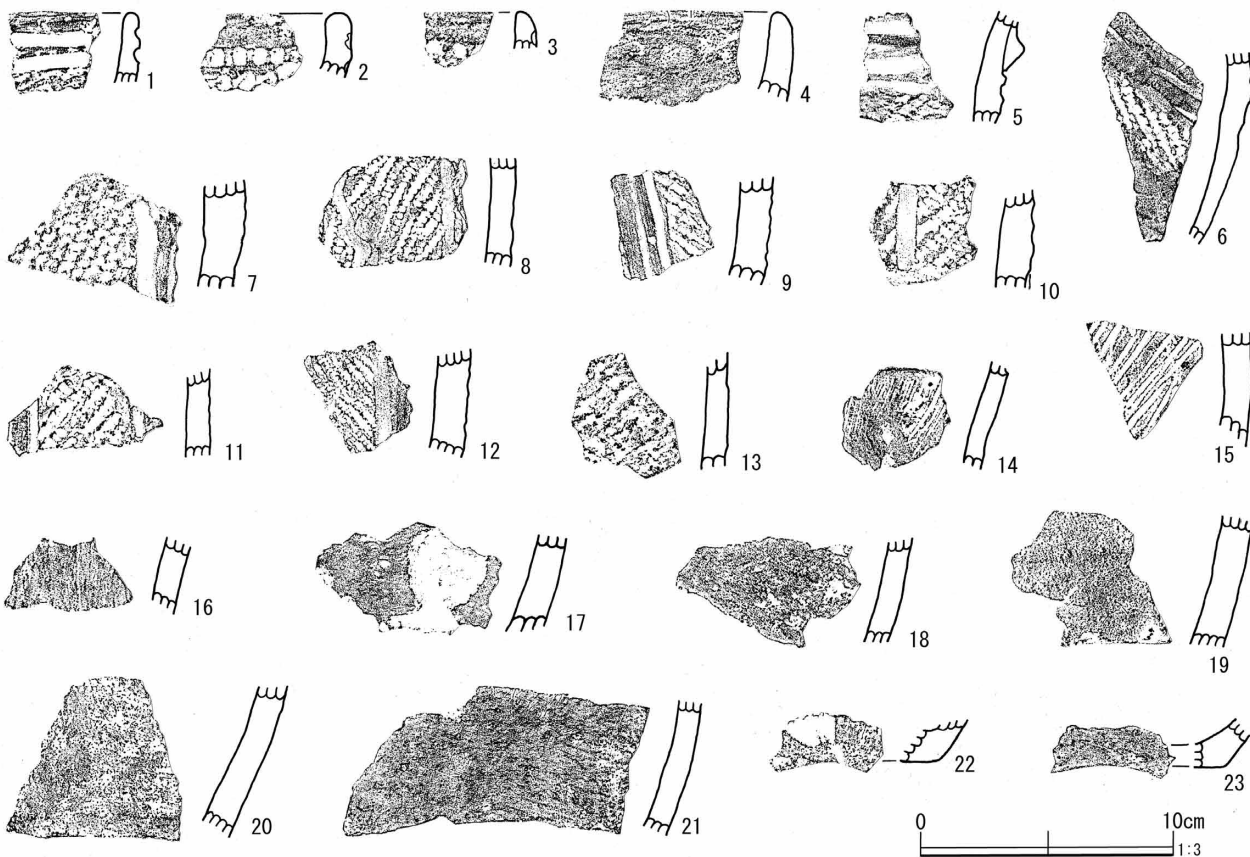
出土遺物（第49図）

土器 1~4は、本址出土の口縁部資料である。1は、口縁部に横走る2条の沈線が認められるもので、以下は単節縄文となる。2・3は、口縁部に円形刺突文列を持つもので、前者は円形竹管によるもので2列確認できる。後者は丸棒状施文具を用いたもので最低1列が施される。4は、無文で直立傾向の強い資料である。5は、横走る断面三角形の隆帯と、その上下を撫でるような浅い沈線の窺われる資料である。6は、P7出土の資料で、右下がりに斜行する縄文帯を見ることができる。縄文帯の上下は丁寧な撫でが加



第48図 第11号住居跡

えられる。7～12は垂下する磨消文帯と縄文帯の観察される胴部資料である。このうち8では、蛇行沈線が観察される。13は単節縄文の施されたもの、14・15は斜行する条線文の施されたものである。16～21は、無文の胴部資料で、17は器面の剥落が目立つ。22・23は無文の底部資料であるが、底径を推定できるほどの大きさを持たない。



第49図 第11号住居跡出土遺物

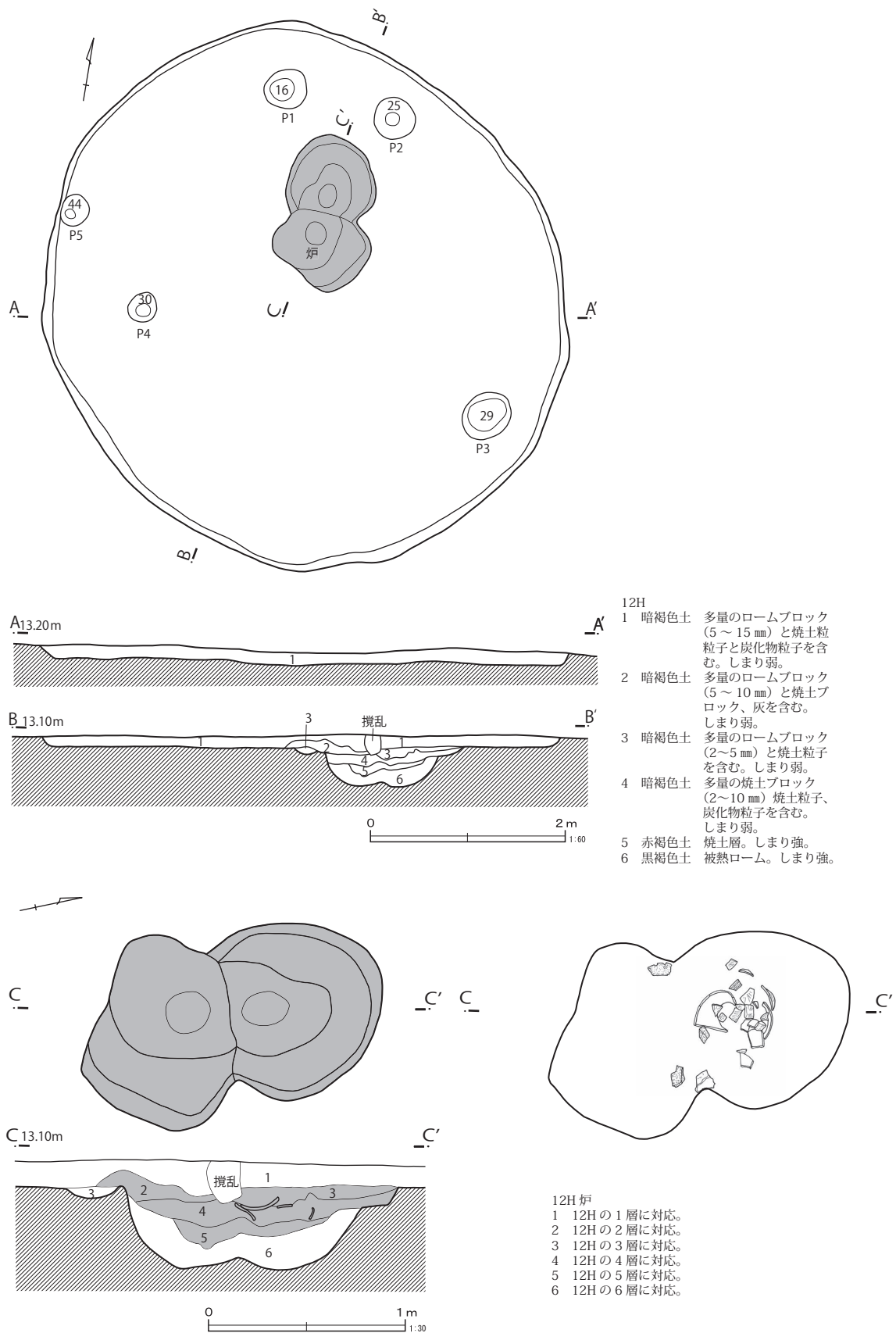
●第12号住居跡（第50・51・52図）

調査区の南東隅に位置し平面形は長径約5.5m、短径約5.1mの不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは浅く約0.1mであった。ピット5基が住居跡内に散在するが、P3、4が床面からの深さ0.3m前後、P5が深さ0.4m以上を測る。P3、5を支柱穴とした場合、炉跡の位置から、住居跡の出入口は南側と思われる。

炉跡は地床炉で長径約1.6m、短径約1mの不整円形を呈し、住居跡内中央部より北寄りに位置している。炉の作り替えが行われており、平面形から南側の炉は北側の炉を壊して構築したように思われる。全面に発達した焼土の広がり認められた。北側の炉跡付近から遺物が集中して出土している。

出土遺物（第51・52図）

土器 第51図1～10は、隆帯と沈線とで渦巻文や楕円形の杵状文などが形成される口縁部文様帯を持つ一群の口縁部資料である。1は、肉厚大ぶりの資料で、太めの沈線で「の」の字の渦巻文が描かれるもの、2は、丈の高い隆帯と、この両脇を撫でるような沈線で渦巻文と縄文の充填される杵状文が描出されるもの、3は、

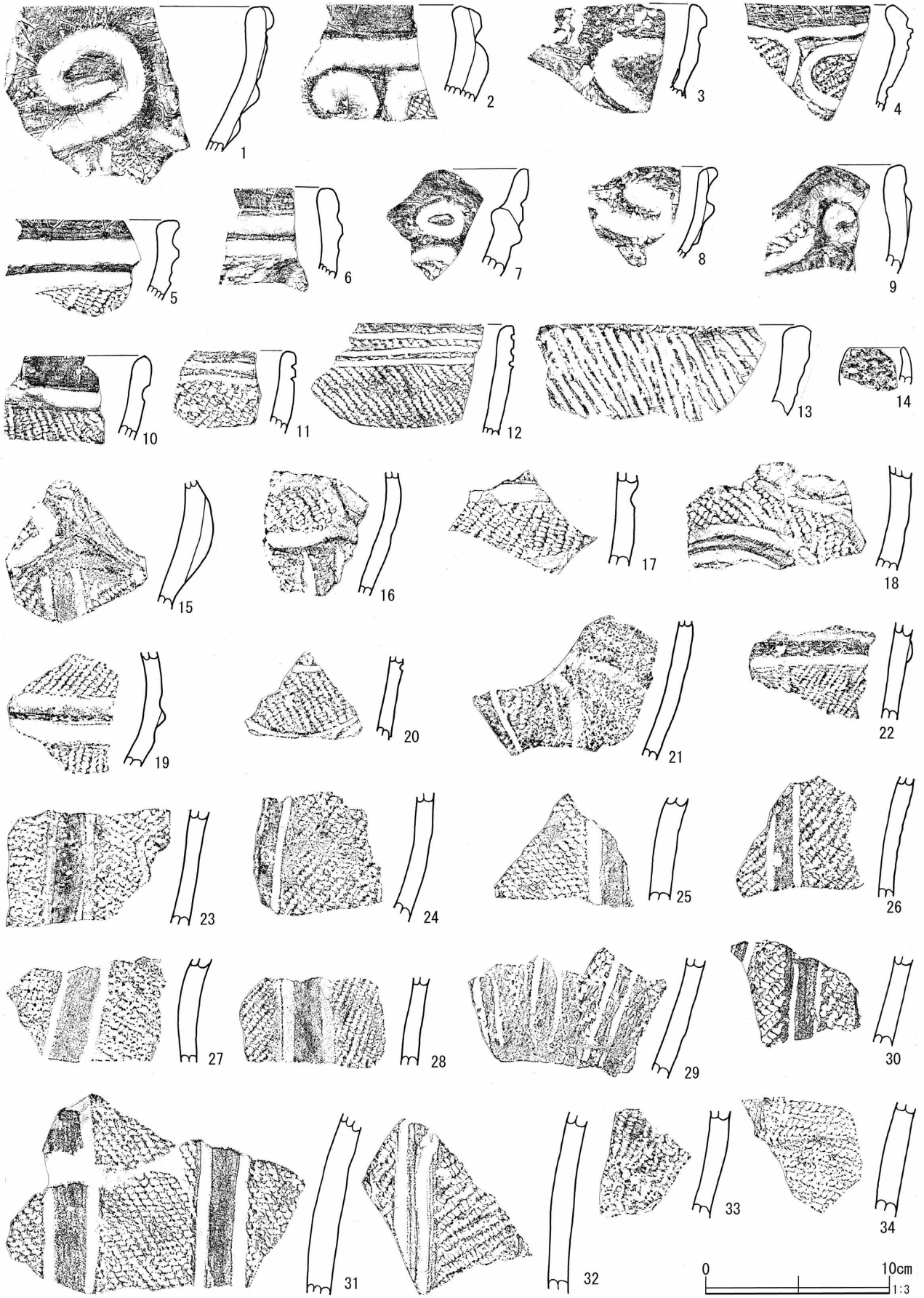


第50図 第12号住居跡

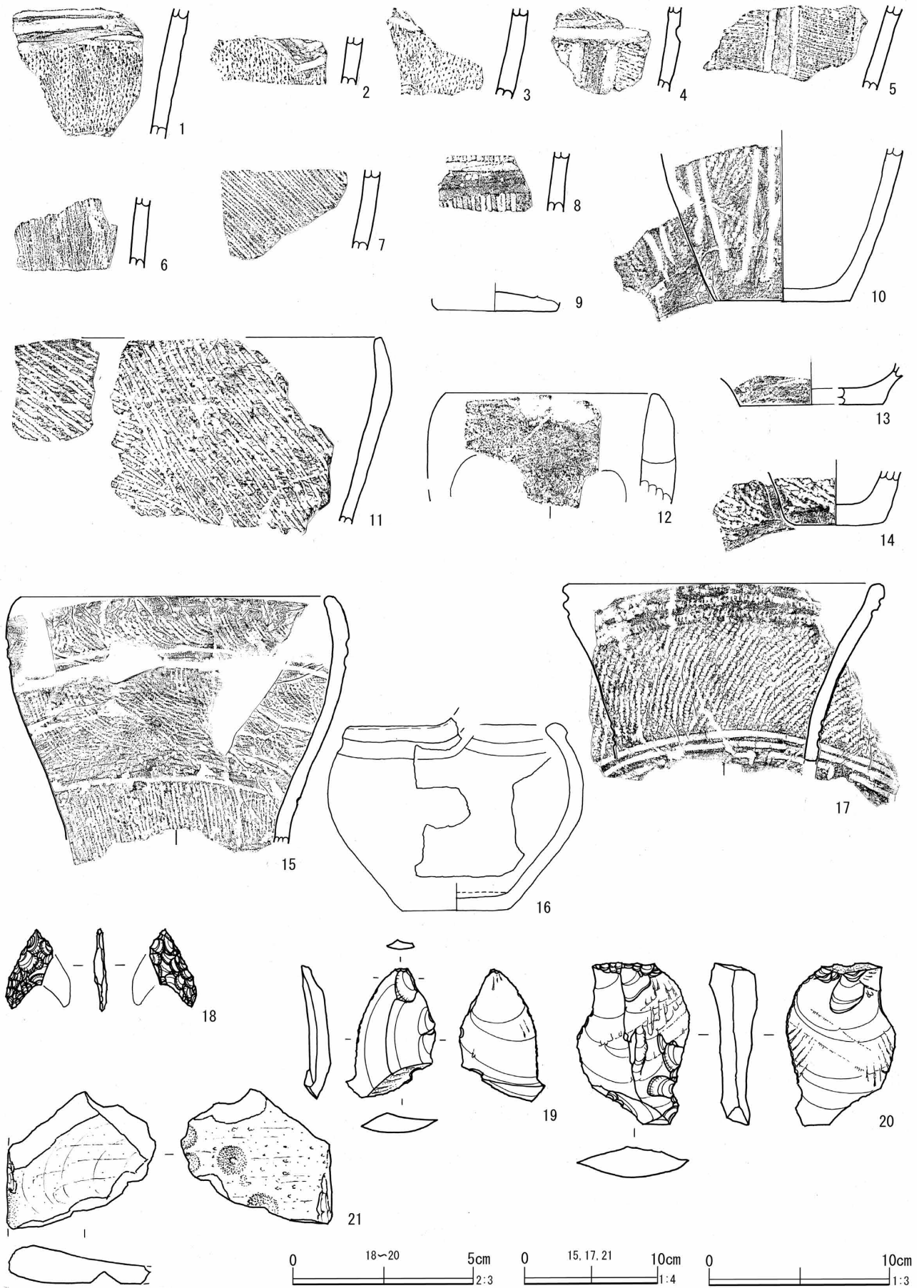
細めの沈線で杵状文が描かれるもの、5・6は、横走する隆帯とこの上下を撫でるような太めの沈線の看取される資料、7は、山形の突起の付された口縁部資料で、突起下には楕円文が描かれる。8は、薄手の波状縁資料で、丈の高い沈線で渦巻文が描かれる。9は、振幅の大きな波状縁資料で、波頂部には隆帯とこれに沿う沈線とでよく巻かれた渦巻文が形成される。10は、口縁部に横走する幅広の沈線が観察されるものである。11・12は単節縄文の地文上に横位の沈線が引かれる平縁深鉢である。13は、わずかに外反する平縁土器で、斜行する太めの集合沈線が隙間なく引かれる。口唇部形態が異なるものの曾利式の斜行沈線文系の一群の影響下に成立したものであろう。14は、ミニチュア土器である。口径3cm、残存高2cmを測る無文の資料である。15～20は、1～10と同様の資料で、口唇部を欠くものである。15は、杵状区画間の隆帯が観察されるもの、16は、単節縄文の充填される円文の看取されるもの、17・19・20は、長楕円形などの杵状区画の一部が観察されるものである。18は、全体構成は不明であるが、湾曲する隆帯や沈線の見られる資料である。21は、湾曲する沈線3条が観察される資料、22は本址の炉跡出土の資料で、横走する丈の低い隆帯とこの上下を縁取るように引かれた沈線の見られる資料である。23～32は、2条の沈線で縁取られた磨消文帯が垂下する胴部資料である。23では、縄文地文上に蛇行沈線が垂下する。25・31は複節縄文を地文とする。33・34は縄文の施された資料で、33は本址の炉跡出土の資料、34は、条間隔のあく複節縄文の施された資料である。

第52図1～3は同一個体と思われるもので、撚糸文地文に磨消文による連弧文の描出される資料である。4は、垂下する磨消文帯同士の間を横位の条線文で埋めるものである。6～8は、条線文地文の資料で、8では、横走する磨消文帯が観察されるものである。9・10・13・14は底部資料である。9は底面円盤のみの資料で、底径7cm、10は、底径7.5cm、残存高9cmほどの胴下半の資料で、2条の沈線に縁取られた磨消文帯と縄文帯の観察される資料である。13は、本址の炉跡出土の資料で、推定底径8cmほどの外反傾向の強い無文の資料である。14は、底径5cmほどの肉厚な底部資料で、縄文が施される。11は、比較的薄手で口唇部がわずかに内湾する平縁土器で、横位の器面調整の上から斜行する集合沈線文が施される資料である。焼成は極めて良好で、胎土に3～5mmほどの砂粒を含む。本址の炉跡出土である。12は、推定口径11.5cmを測る器台形土器と思われる。器壁は厚く2cmほどを測る。体部には不規則な円窓が開けられる。15は、推定口径23cm、残存高18cmを測るキャリパー形深鉢土器で、炉跡出土の資料である。口縁部に器面を巡る2条の沈線が引かれるほか、胴部に1条の沈線が巡る。地文は櫛状施文具による条線文である。胴部に巡る沈線より上は弧状の、下は垂下する条線が施される。16は、無文の壺型土器で、口径12cm、胴部最大径14cm、底径5.8cmを測る。肥厚する口縁部を縁取るように太めの沈線が1条引かれ、口縁部から上方へ伸びることから、突起の存在が浮かび上がる。17は、口径24cm、残存高15cmを測る。口縁部に2条の爪形文列が巡り、胴部には3条の沈線が巡る。地文には単節RL縄文を斜位回転させている。

石器 第52図18は凹基無茎の石鎌で、右脚部を欠く。薄手に成形し、表裏に規則的で丁寧な押圧剥離を加え整形している。19は、使用痕のある剥片で縦長の不整形剥片を素材とするが、剥片剥離は不規則なもので、正面は、右側にネガティブな打瘤を持つ横長の剥離面が残される。裏面には、剥片頂部に打点を残し、打瘤の観察される主剥離面を見ることができる。使用痕は正面左側縁に見られる細かなものである。20は、縦長の不整形剥片を素材とするもので、正面には縦位の稜線が残される。裏面には打瘤と打瘤剥痕が観察される。2次加工は正面右側縁に施された細かいが規則的で丁寧なものである。21は、石皿の残欠で裏面は凹石として使用されており、残存部分だけでも4つの凹みが窺われる。



第51图 第12号住居跡出土遺物 (1)



第52图 第12号住居跡出土遺物(2)

(2) 土坑

●第8号土坑（第53図）

調査区西端に位置し、平面形は長径約2m、短径約1.1mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第9号土坑（第53図）

調査区中央よりやや南側に位置し、南側の一部を近世のピット列に切られる。南端が切れているため、長径は不明であるが、短径は約1mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第10号土坑（第53・57図）

調査区北西に位置し、第4号住居跡を切る。平面形は長径約2.5m、短径約0.6mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 1は、大ぶりの胴上半部の資料で、右上には斜行する隆帯とこれをなぞるような沈線が観察される。胴部にも横走沈線が引かれることがわかる。2は単節縄文の施される胴部資料、3は、条線文の施される胴部資料である。

●第11号土坑（第53図）

調査区中央よりやや北側、第4号住居跡の南側に位置し、平面形は長径約1.4m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面の南寄りが浅く窪む。

●第12号土坑（第53・57図）

調査区中央部に位置し、平面形は直径約1.1mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面中央付近が窪む。

出土遺物（第57図）

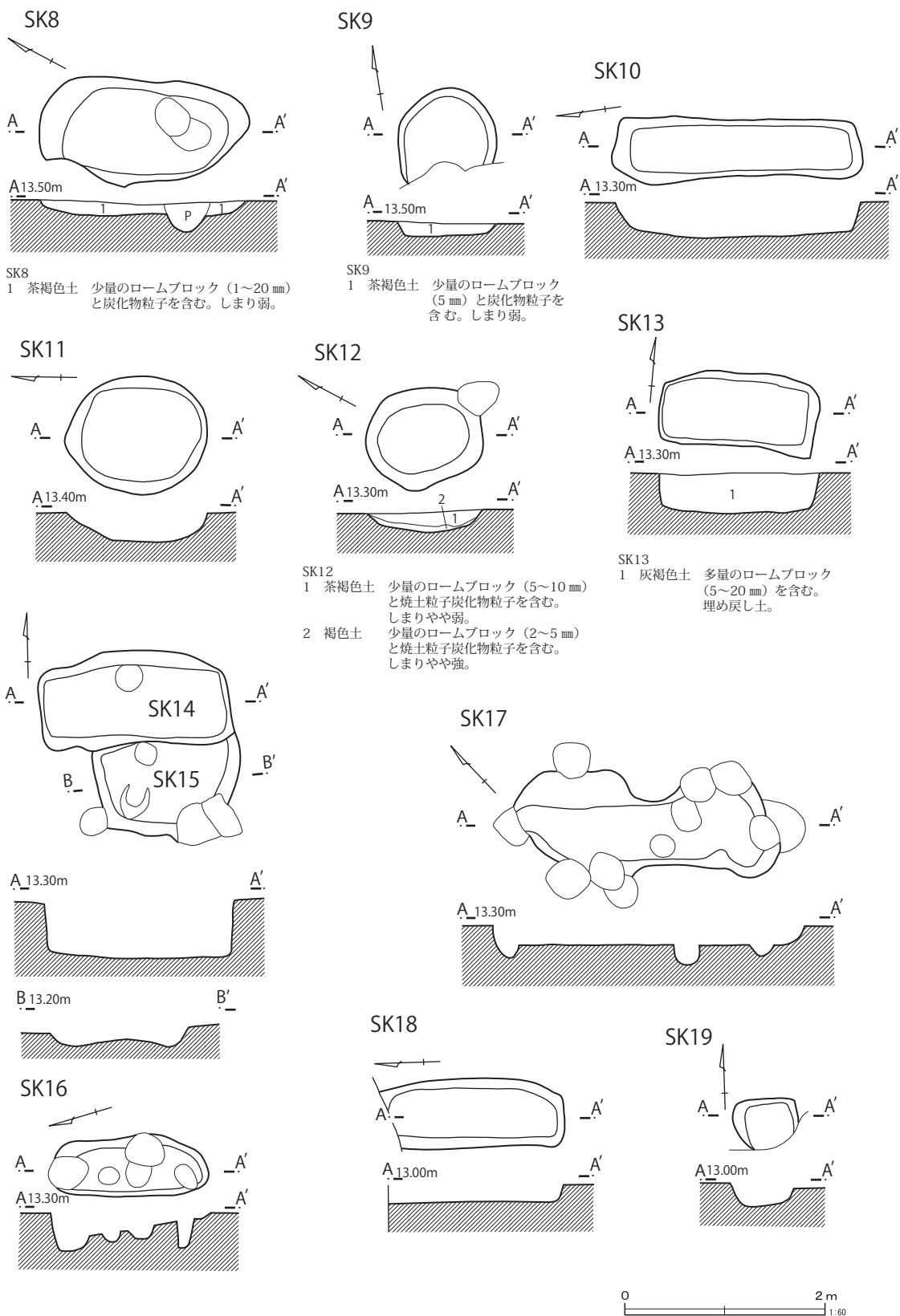
土器 4～6は口縁部資料で、5・6は口縁部に横位の円形刺突文列が施されるものである。7～10は縄文地文に垂下する磨消文帯が観察される胴部資料である。11は縄文の地文上に交差する沈線の描かれる資料である。12は条の縦走する単節縄文の施されたものである。

●第13号土坑（第53・57図）

調査区北西に位置し、第4号住居跡を切る。平面形は長径約1.6m、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 13・14は縄文地文上に垂下沈線の観察されるもの、15は、無文の胴部資料である。



第53図 第8~19号土坑

●第14号土坑（第53図）

調査区中央よりやや北側に位置し、第15号土坑を切る。平面形は長径約1.9m、短径約0.9mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

●第15号土坑（第53図）

調査区中央よりやや北側に位置し、第14号土坑に切られる。平面形は長径約1.4m、短径約1mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面の東西端がそれぞれ浅く窪む。

●第16号土坑（第53図）

調査区北端、第4号住居跡の北側に位置し、平面形は長径約1.6m、短径約0.6mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面の北寄りが浅く窪む。

●第17号土坑（第53図）

調査区中央よりやや東側に位置し、平面形は長径約2.5m、短径約1mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第18号土坑（第53図）

調査区北端に位置し、北端は調査区外である。北端が切れているため、長径は不明であるが、短径は約0.7mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第19号土坑（第53図）

調査区北東に位置し、第1号溝跡に切られる。南側が切れているため、長径は不明であるが、短径約0.6mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面の西寄りが浅く窪む。

●第20号土坑（第54図）

調査区北東に位置し、第1号溝跡に切られる。北側が切れているため、長径は不明であるが、短径約0.7mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第21号土坑（第54・57図）

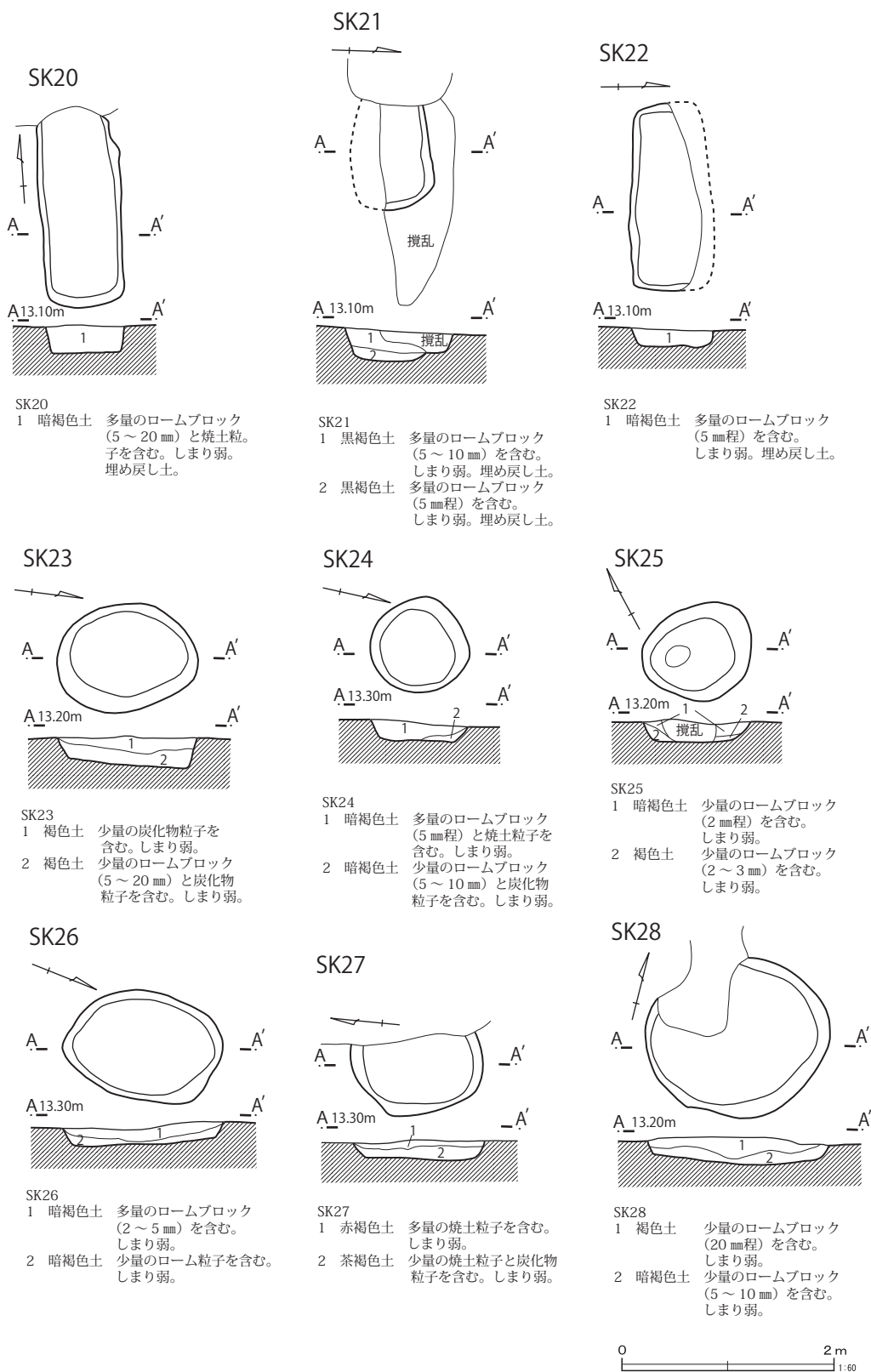
調査区北東に位置し、第1号溝跡を切る。西側が攪乱に切られているため、長径は不明であるが、短径約0.7mの不整形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 16は、破片上部に口縁部文様帯下端区画と思われる幅広の沈線が窺われ、以下に2条の沈線に縁取られた磨消文帯が施される資料、14は垂下沈線の窺われる胴部資料、18は、破片上半に横位の撫でが加えられ、下半に縄文の施される胴部資料である。

●第22号土坑（第54図）

調査区北側に位置し、第1号溝跡を切る。平面形は長径約1.8m、短径約0.8mの長方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。



SK20
1 暗褐色土 多量のロームブロック (5~20mm) と焼土粒子を含む。しまり弱。埋め戻し土。

SK21
1 黒褐色土 多量のロームブロック (5~10mm) を含む。しまり弱。埋め戻し土。
2 黒褐色土 多量のロームブロック (5mm程) を含む。しまり弱。埋め戻し土。

SK22
1 暗褐色土 多量のロームブロック (5mm程) を含む。しまり弱。埋め戻し土。

SK23
1 褐色土 少量の炭化物粒子を含む。しまり弱。
2 褐色土 少量のロームブロック (5~20mm) と炭化物粒子を含む。しまり弱。

SK24
1 暗褐色土 多量のロームブロック (5mm程) と焼土粒子を含む。しまり弱。
2 暗褐色土 少量のロームブロック (5~10mm) と炭化物粒子を含む。しまり弱。

SK25
1 暗褐色土 少量のロームブロック (2mm程) を含む。しまり弱。
2 褐色土 少量のロームブロック (2~3mm) を含む。しまり弱。

SK26
1 暗褐色土 多量のロームブロック (2~5mm) を含む。しまり弱。
2 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。しまり弱。

SK27
1 赤褐色土 多量の焼土粒子を含む。しまり弱。
2 茶褐色土 少量の焼土粒子と炭化物粒子を含む。しまり弱。

SK28
1 褐色土 少量のロームブロック (20mm程) を含む。しまり弱。
2 暗褐色土 少量のロームブロック (5~10mm) を含む。しまり弱。

第54図 第20~28号土坑

●第23号土坑（第54・57図）

調査区東側に位置し、平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面の北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第57図）

土器 19は、横走る2条の沈線が窺われるもの、20・21は単節縄文の施される資料である。

●**第24号土坑（第54・57図）**

調査区東側に位置し、平面形は直径約0.9mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面の北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第57図）

土器 22は瓦質の浅い土器で、焙烙の破片と思われる。

●**第25号土坑（第54図）**

調査区東側に位置し、平面形は直径約1mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●**第26号土坑（第54・57図）**

調査区東側に位置し、平面形は長径約1.5m、短径約1mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 23は、刺突文列の窺われる口縁部付近の資料、24は、破片上下に横位沈線の痕跡の残される資料である。25は、垂下する縄文帯の施される胴部資料である。

●**第27号土坑（第54・57図）**

調査区南東に位置し、東側が攪乱に切られているため、長径は不明であるが、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

土器 26は、下向きの3重の弧線の看取される資料である。27は、2条の沈線に縁取られた磨消文帯の垂下する胴部資料である。29は、単節縄文の施されるもの、30は、縦位の条線文の施されるものである。

鉄器 28は鉄鎌である。背側の身部と先端を欠損している。残存長は6.8cm、最大幅は2.1cm、最大厚は0.4cm、重量は11.2gを測る。曲刃鎌で刃部は約4cmである。

●**第28号土坑（第54・57図）**

調査区東側に位置し、第11号住居跡を切る。平面形は長径約1.7m、短径約1.5mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第57図）

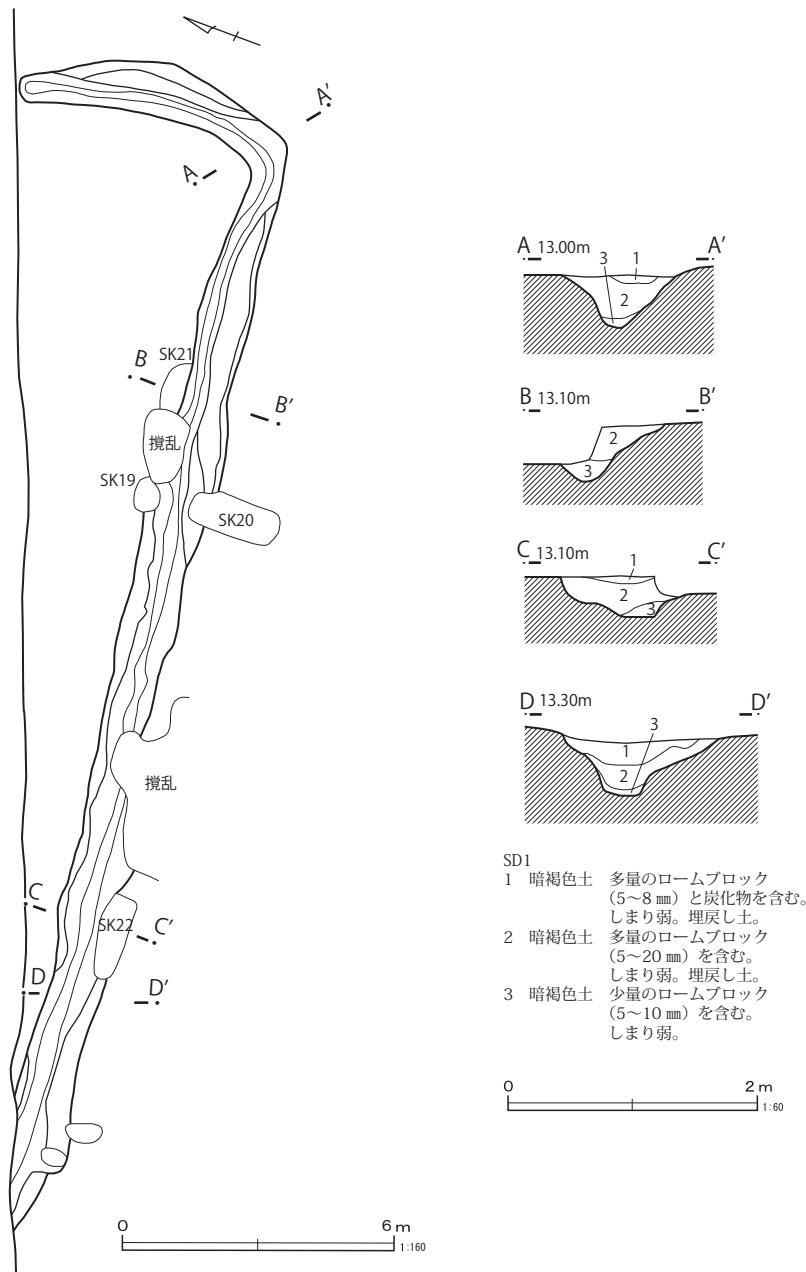
土器 31は、縦位の条線文が施される口縁部資料である。32は、2条の沈線に縁取られた磨消文帯の観察される胴部資料である。

(3) 溝跡

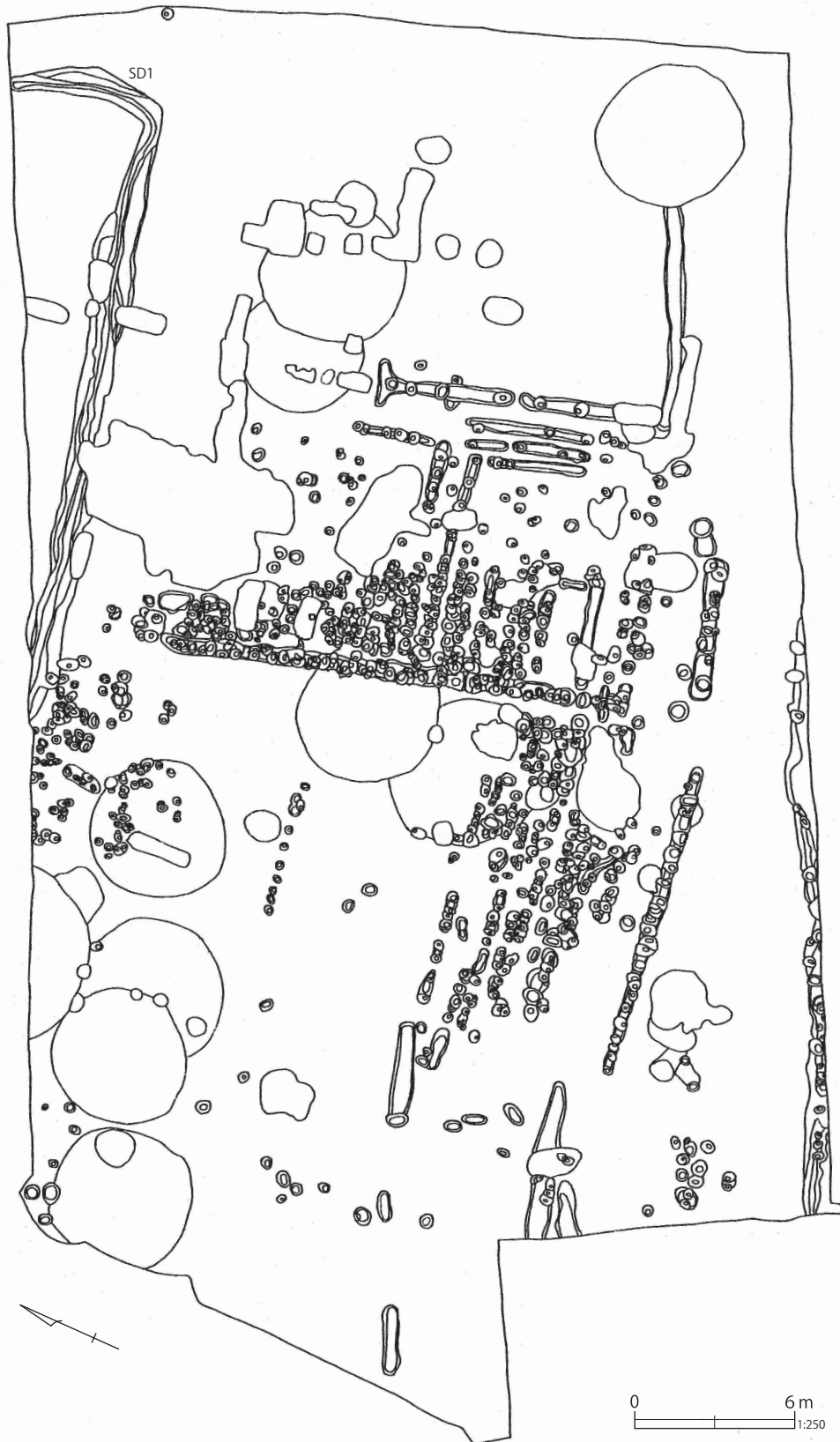
●第1号溝跡（第55・56・57図）

調査区の北側に位置し、第21・22号土坑を切り、第19・20号土坑に切られる。調査区北東端から南へ約6m延伸し、クランク状に曲折した後、西へ約25m延伸して調査区外に到る。幅は平均2mで、断面形は逆台形を呈すが、テラス状の張り出しを持つ部分がある。確認面からの深さは最大深0.5mを測る。覆土の状態から近世以降の所産と考えられる。

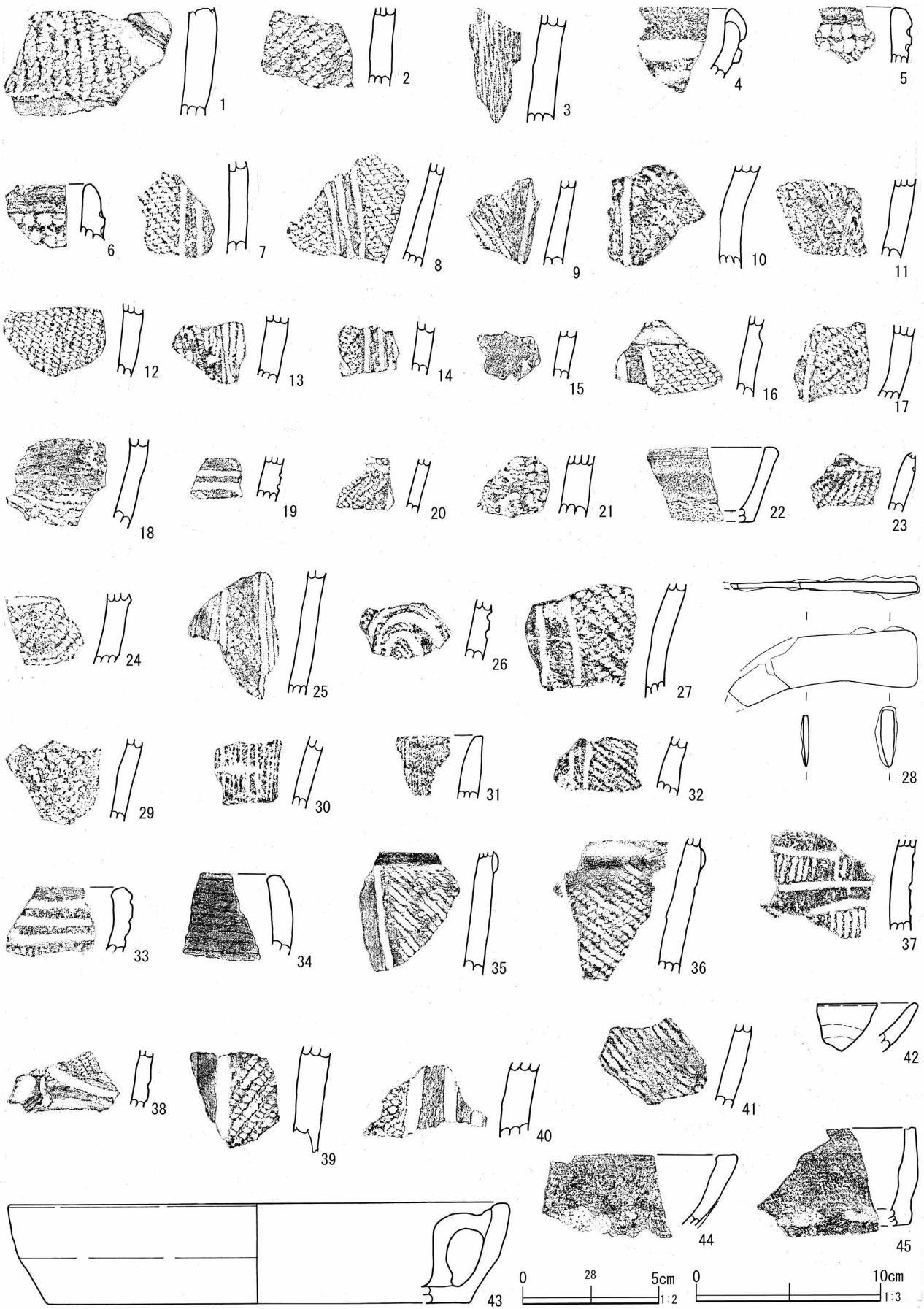
第56図に示したように、調査区内には第1号溝跡以外も多数のピット列が検出された。ピット列は東西方向あるいは南北方向に並列するものが多く、ピット間は小規模な溝跡で接続されているものも多く見受



第55図 第1号溝跡



第56図 沖山西遺跡（第2地点）溝跡・ピット配置図



第57图 土坑·溝跡出土遺物

けられた。その形態から柵列のような機能を有していたものと思われる。ピット列は住居跡や土坑の多くを壊して掘削されており、第1号溝跡同様に近世以降に帰属時期が求められるものと考えられる。第1号溝跡とともに、屋敷の区画や境界としての役割を果たしたものと思われる。

出土遺物（第57図）

土器 33は、3条の横走沈線が観察される平縁の口縁部資料、35・36は、破片上部に横走する断面カマボコ状の隆帯が観察される資料である。37は、条線文を地文とする胴部資料で横走する磨消文帯2帯を見ることができる。39は垂下する磨消文帯の観察される胴部資料である。41は、無節縄文の施された胴部資料である。42は、志野焼の小皿である。43～45は焙烙で、43では内耳部分が残される。

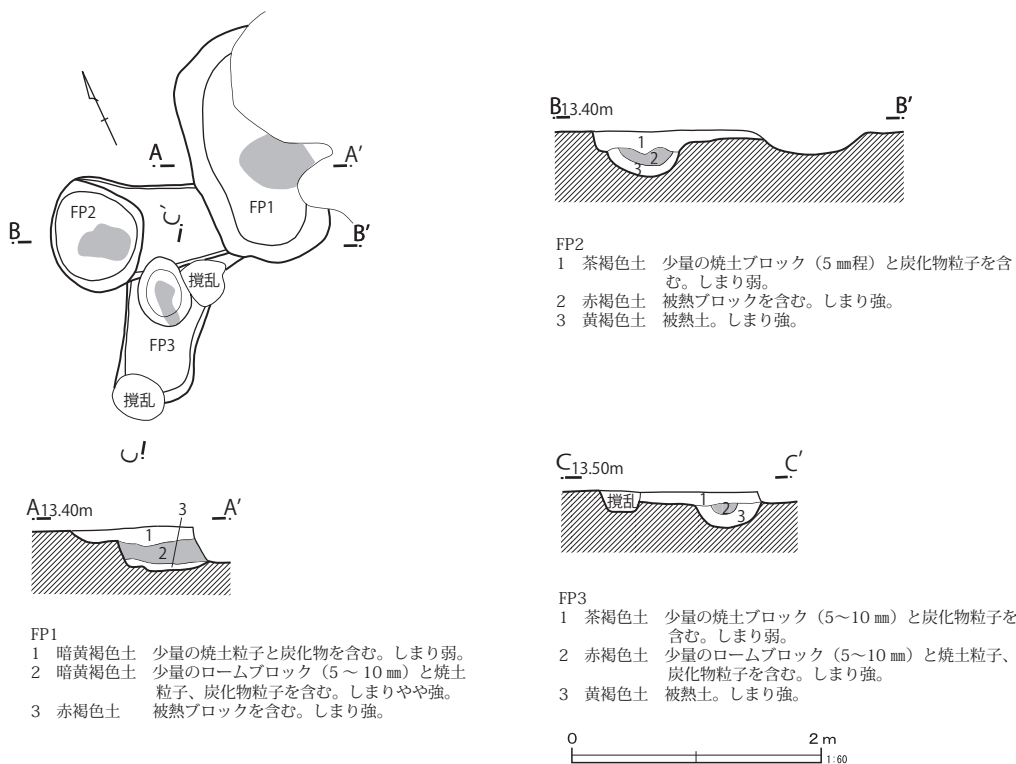
34・40はピット列から出土した。34は、やや内湾傾向のある無文の口縁部資料である。横位の撫での痕跡を残す。40は、垂下する磨消文帯の観察される胴部資料である。磨消文帯には3条の沈線が観察される。

(4) 屋外炉跡

出土遺物がなく帰属不明の屋外炉として扱うが、グリッド出土遺物の中に少量ながら早期条痕文系土器群を含むことから、該期の所産である可能性が高い。調査区南西で3基が集中して検出された。

●第1号屋外炉跡（第58図）

攪乱によって東側が切られるが、平面形は長径約1.9m、短径1mの楕円形を呈すものと考えられる。中央付近の長径約0.6m、短径0.4mの範囲に発達した焼土の広がりが見られた。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。



第58図 第1～3号屋外炉跡

●第2号屋外炉跡（第58図）

平面形は長径約1.3m、短径1mの不整円形を呈す。西側の長径約0.4m、短径0.2mの範囲に発達した焼土の広がり認められた。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面中央付近が窪む。

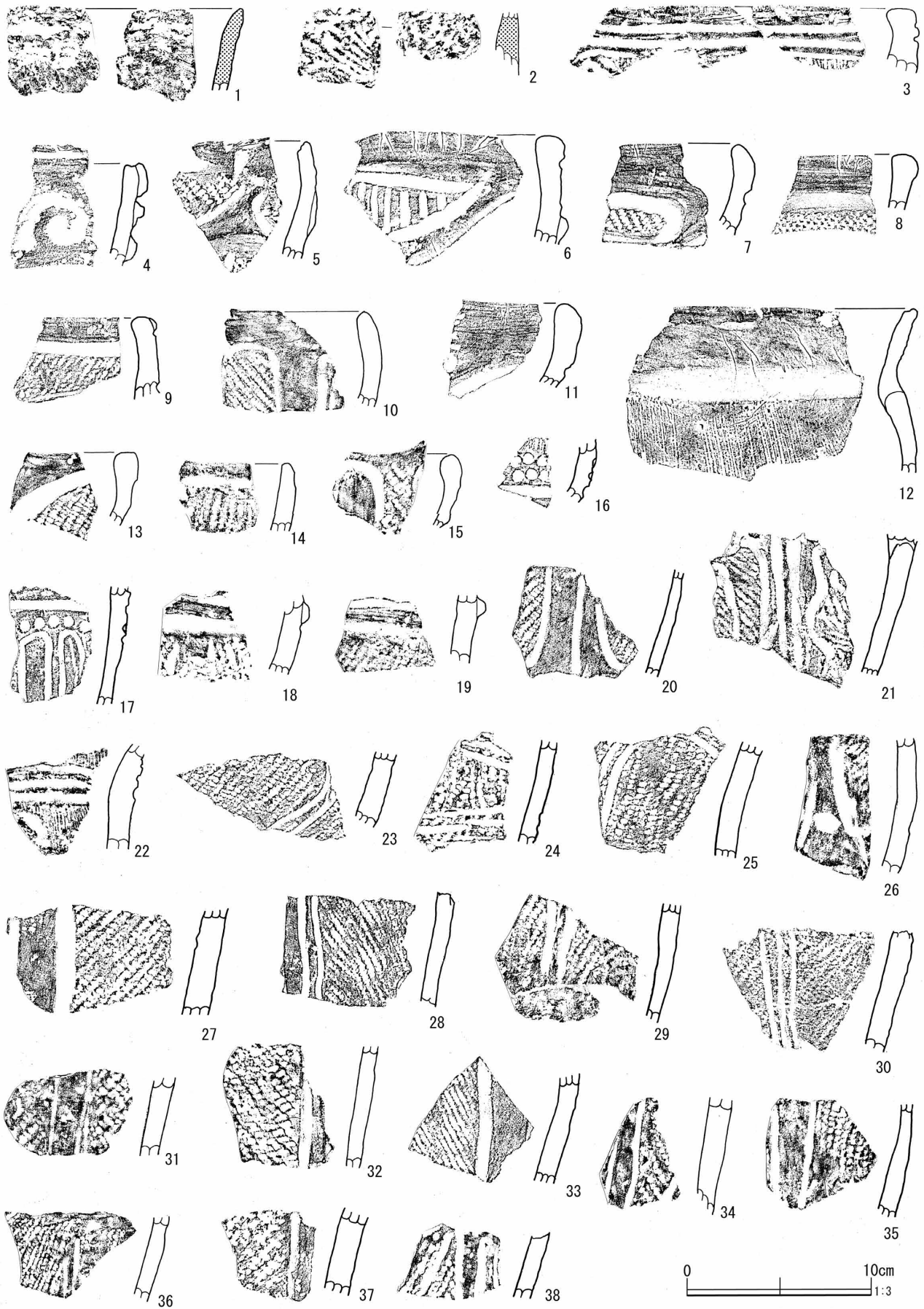
●第3号屋外炉跡（第58図）

平面形は長径約1.2m、短径0.6mの不整円形を呈す。北側の長径約0.4m、短径0.1mの範囲に発達した焼土の広がり認められた。確認面から深さは約0.3mを測り、底面中央付近が窪む。

(5) グリッド出土遺物（第59・60図）

土器 第59図1・2は、胎土に微量の繊維を含む早期条痕文系土器群である。表裏に条痕文が施される。1はD5グリッド、2はH5グリッド出土である。3は、F4グリッド出土資料で、口縁部に3条の横走沈線が観察される角頭状に整えられた口縁部を持つ資料で、地文は条線文となるようである。4～9は、隆帯とこれに沿うように施される沈線とで、渦巻文や杵状区画の施される口縁部文様帯の形成される一群である。4は、丈の高い隆帯と沈線で構成される渦巻文が形成されるもの、5・7は、C2グリッド出土で、沈線と隆帯によって杵状区画が施されるもの、6は、文様帯を斜めに画す縦位の沈線の充填される杵状区画が観察されるものである。8は、複節縄文の施される口縁部資料、9は、丈の低い隆帯を貼る口縁部を沈線で区画するものである。10は、F5グリッド出土資料で、口縁部の内湾するキャリパー形深鉢土器で、「∩」状の縄文帯が垂下する資料である。12は、C4出土資料で、頸部で「く」の字に屈曲する広口壺形土器である。無文の口縁部は外反し、頸部に引かれた幅広の沈線の下は縦位の条線文となる。13は、I2グリッド出土資料で、肥厚させた口縁部に左下がりの弧線が観察されるもの、14は、F5グリッド出土資料で、幅広の浅い沈線によって楕円文の描出される資料である。15は、F5グリッド出土資料で、内湾する口縁部に磨消となる「∩」状モチーフが描かれる。16は、2列の円形刺突文列が施される口縁部付近の資料と思われる。17は、B5グリッド出土資料で、胴部に1条の沈線と円形刺突文列が横位展開し、以下に「∩」状のモチーフが垂下するものである。18・19は、横走する隆帯とこれを縁取る沈線の観察される胴部資料である。20は、2条の沈線に縁取られた磨消文帯の観察される胴部下半の資料、21は、縄文地文の上に直線や蛇行沈線が垂下するものである。22はJ6グリッド出土で、頸部に3条の横走沈線が引かれる条線文地文の資料、23は、C4グリッド出土で、破片右端に2条の曲線の看取されるものである。24は、F3グリッド出土で、条の縦走する単節縄文の地文上に横走する3条の沈線と右下がりに傾斜する3条の沈線が観察される資料である。25は、C4グリッド出土で、単節縄文の地文上に弧線が描かれるもの、26～38は、沈線や沈線に区画された磨消文帯が垂下する胴部資料である。26は、G4グリッド出土で胴部に湾曲する沈線が垂下するもの、27は、幅広で浅い沈線に縁取られた磨消文帯が垂下するもの、29は、E5グリッド出土で太めの沈線2条が垂下するもの、30は、3本の沈線が垂下するものである。31・36はG3グリッド出土、32はH2グリッド出土の資料である。33は、無節縄文を地文とするもの、34はG4グリッド、35はE3グリッド、38はE6グリッド出土の資料である。

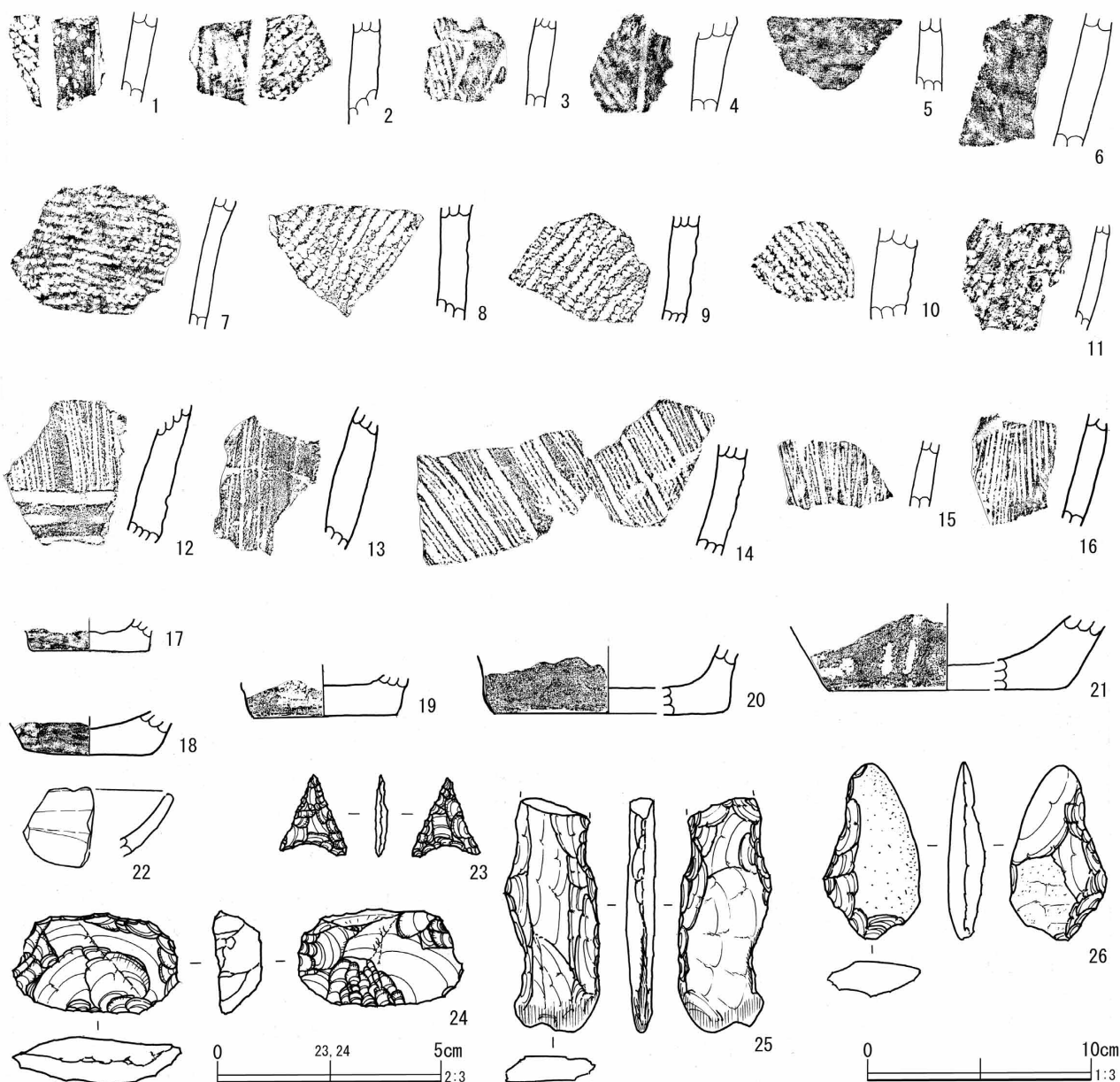
第60図1～4は、沈線に区画された磨消文帯が垂下する胴部資料である。1はH5グリッド出土、2はF4グリッド、3はF5グリッド、4はG3グリッドの出土である。5・6はともにG3グリッド出土の無文の胴部資料である。7～11は地文として単節縄文が施されたものである。7・10はG3グリッド出土資料である。



第59図 グリッド出土遺物 (1)

前者は単節LR縄文を斜位回転させ、条が横位に走行するよう施文したものである。12～16は、条線文を地文とするものである。このうち12は、破片下端には、中に短沈線の施された横走磨消文帯が配される。14は、斜行する条線文の施された資料である。条線文は7条の櫛状施文具で施されるが、幅の広い櫛の端部が沈線状に現れている。15はF6グリッド、16はE3グリッド出土の資料である。17～21はいずれも無文の底部資料である。17はG4グリッド出土で底径5.4cm、18はD6グリッド出土で底径6cm、19は、B4グリッド出土で底径6.6cm、20はC4グリッド出土で推定底径10.6cm、21は外反傾向の強い資料で、推定底径10.8cmを測る。22は志野焼の輪花皿の口縁部資料である。

石器 第60図23は、凹基無茎の石鏃である。C4グリッド出土で、薄い剥片を素材とし、両側縁及び基部に丁寧で規則的な押圧剥離を加えている。24は、E3グリッド出土の2次加工剥片で、横長の剥片を素材とし、



第60図 グリッド出土遺物 (2)

正面側に素材剥片の主剥離を残す。25は、H5グリッド出土の打製石斧である。大型の剥片素材で裏面に主剥離面を残す。刃部は使用による磨耗が顕著である。26は、F5グリッド出土の打製石斧である。扁平な楕円礫を素材とし、両側縁からの階段状剥離によって刃部を形成している。

第4表 沖山西遺跡（第2地点）出土石器計測表

図No.	遺物No.	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
27	1	3号住	石鏃	チャート	2.4	(1.1)	0.5	(1.3)	
27	2	3号住	石鏃	チャート	2.2	1.4	0.3	0.8	
27	3	3号住	磨斧	緑色岩	(5.0)	(4.5)	2.7	(89.1)	
27	4	3号住	打斧	ホルンフェルス	(5.6)	5.3	2.1	(70.4)	
27	5	3号住	石皿	安山岩	(7.7)	(7.9)	4.9	(315.0)	
27	6	3号住	石皿	安山岩	(10.1)	(7.5)	4.0	(425.0)	
27	7	3号住炉	石皿	緑泥片岩	(17.4)	(14.5)	4.5	(2250.0)	
27	8	3号住炉	石皿	閃緑岩	(7.6)	(16.4)	3.8	(1120.0)	
27	9	3号住	石皿	安山岩	(11.6)	(17.0)	4.0	(1505.0)	
31	9	4号住	打製石斧	硬砂岩	(10.4)	(5.3)	2.5	(168.7)	
33	19	5号住	二次加工剥片	チャート	3.7	5.0	1.4	22.3	
33	20	5号住	凹石兼磨製石斧	緑色岩	18.8	5.7	3.5	650.0	
45	24	9号住	磨石兼凹石	安山岩	11.4	9.2	5.1	750.0	
47	17	10号住	砥石	砂岩	(6.7)	(5.4)	1.6	(75.6)	
52	18	12号住	石鏃	チャート	2.2	(0.9)	0.2	(0.6)	
52	19	12号住	使用痕剥片	チャート	3.7	2.1	0.6	4.8	
52	20	12号住	使用痕剥片	チャート	4.5	3.0	1.3	11.4	
52	21	12号住	石皿	緑泥片岩	(8.7)	(10.8)	1.5	(345.0)	
60	23	C4	石鏃	チャート	2.3	1.5	0.2	0.4	
60	24	E3 P8	二次加工剥片	チャート	2.3	3.6	1.0	9.6	
60	25	H5	打製石斧	石墨片岩	(10.0)	4.0	1.2	(68.5)	
60	26	F5 P51	打製石斧	ホルンフェルス	7.7	4.2	1.6	43.8	

4 第3地点の遺構と遺物

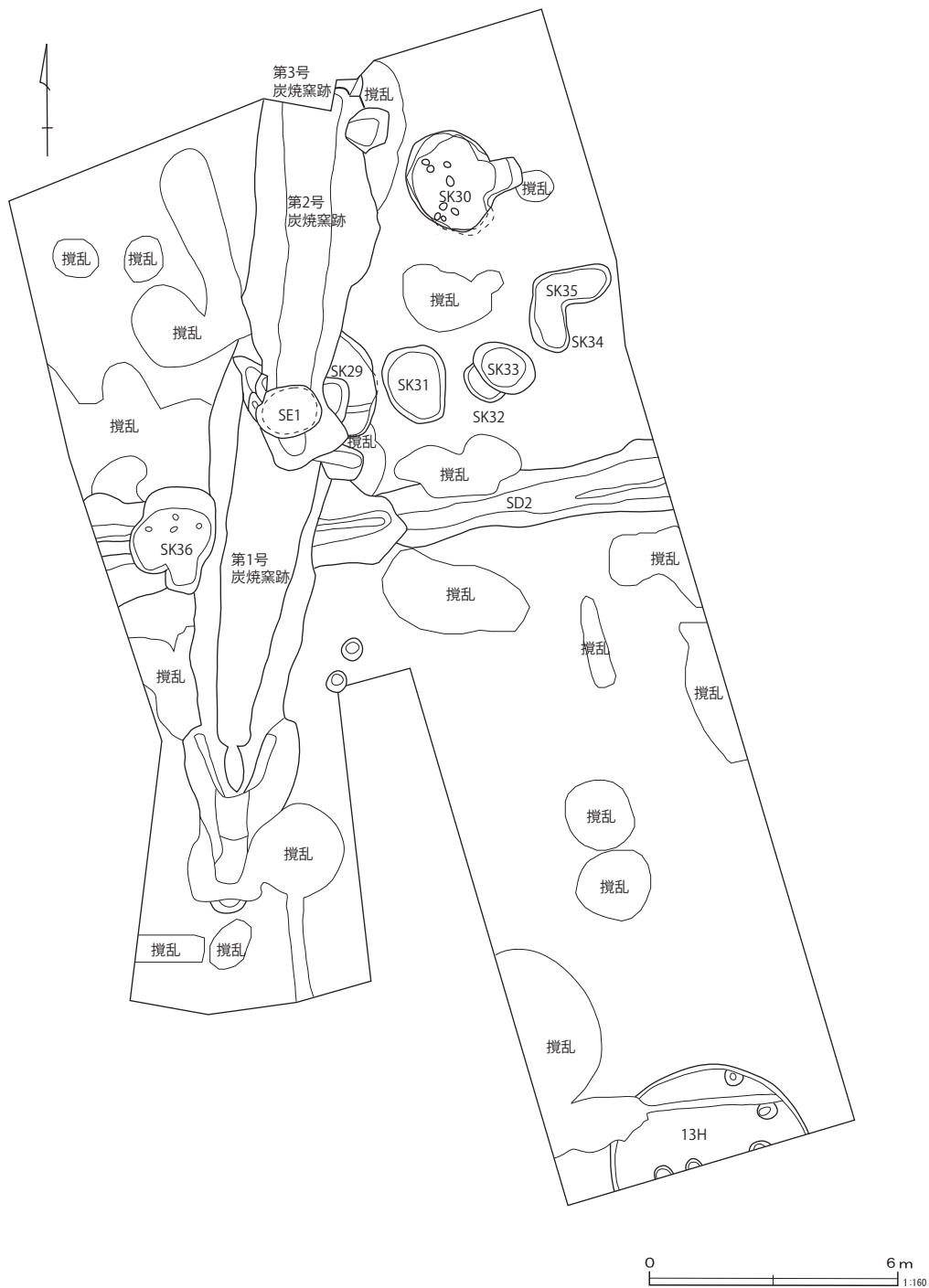
(1) 住居跡

●第13号住居跡（第62・63図）

調査区の南隅に位置し、南側の大半は調査区外である。半分以上が調査区外であるため、詳細は不明であるが、検出部分から平面形は直径約4.7mの円形を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは約0.3mであった。炉跡を検出することはできなかった。

出土遺物（第63図）

土器 1は、破片上部に横走沈線が引かれ、以下に櫛状施文具による条線文が施される。条線文は、櫛状施文具をコンパス文風にローリングさせながら施文している。2は、右下がり斜行する集合沈線が施される。

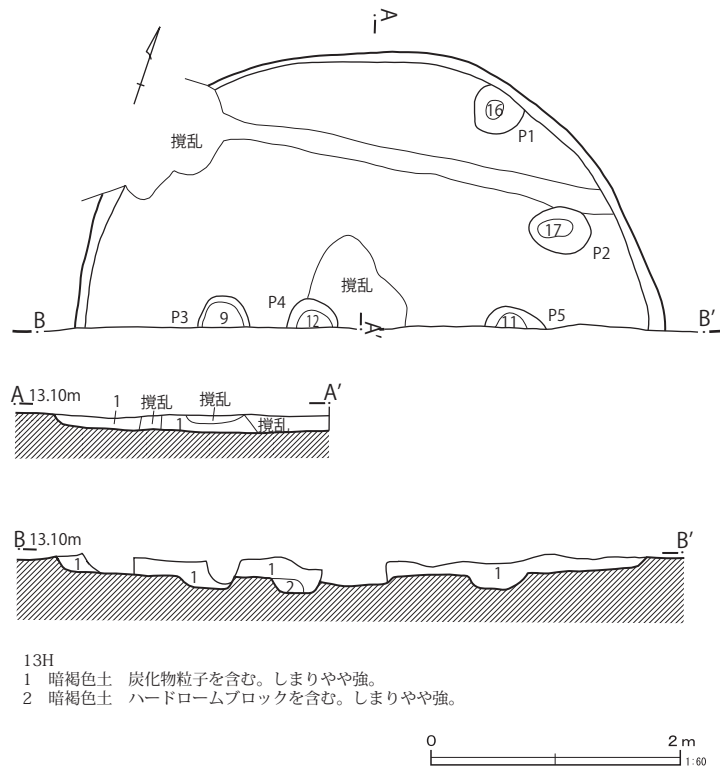


第61図 冲山西遺跡（第3地点）全測図

(2) 土坑

●第29号土坑（第63・64・65・66図）

調査区中央よりやや北側に位置し、第2号炭焼窯跡と重複する。詳細は不明であるが、検出部分から平面形は長径約3.5m、短径約2.6mの不整円形を呈すものと推定される。確認面からの深さは約1.3mを測り、底面は平坦である。東側の壁面がややハングする。



第62図 第13号住居跡

出土遺物（第63・65・66図）

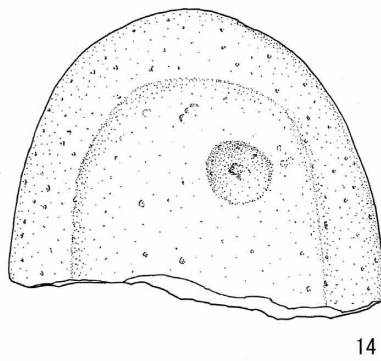
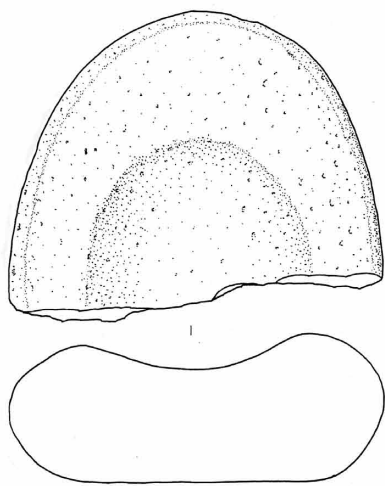
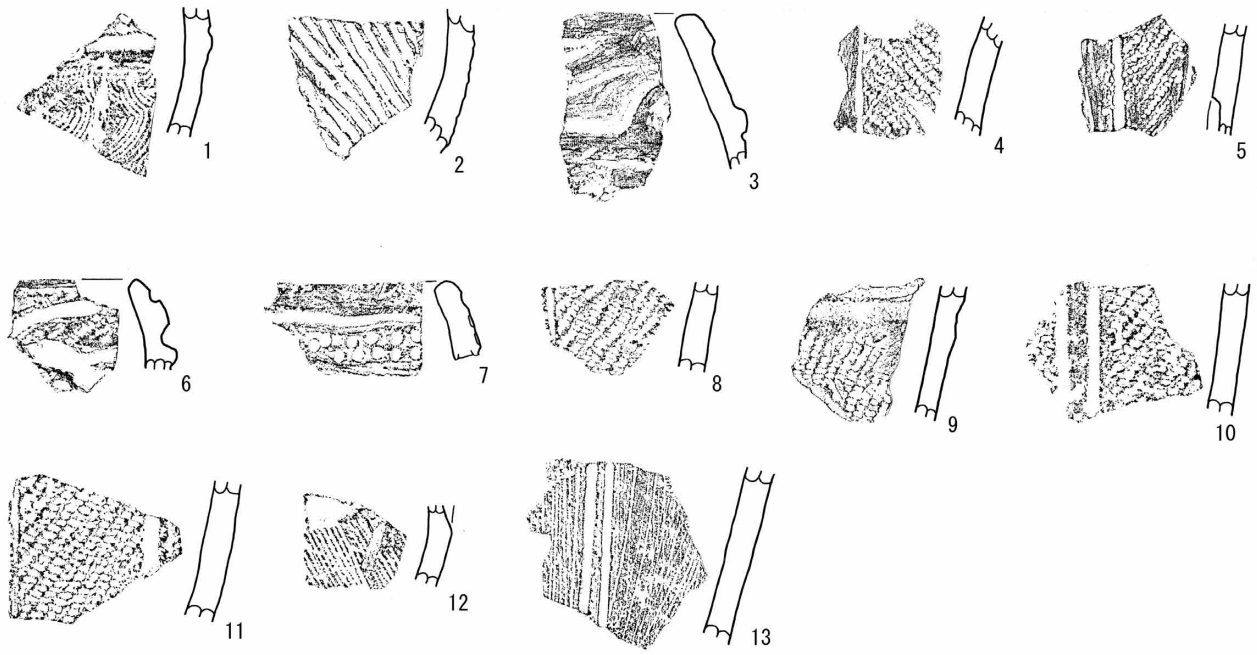
土器 第63図3は、キャリパー形の深鉢形土器の口縁部資料で、断面台形の隆帯とこれを縁取る沈線で渦巻文や杵状文を施すものである。

第65図1は、陶器壺である。ほぼ全面に黄色の釉薬が塗布されるが、外面の底部付近のみ無釉箇所がある。2は陶器壺の底部片である。高台が付き、底面に明瞭な糸切りの痕跡が認められる。3・4は、瀬戸美濃系の陶器灯明皿である。3は片口が付き、体部にトチンの痕跡が認められる。4は底部内外面に部分的に炭の付着が認められた。5は、瀬戸美濃系の陶器徳利である。黄色の釉薬が外面に塗布されるとともに、内面の口縁部から胴部上半の一部にも釉薬が付着している。櫛状工具によって頸部に3条の沈線が施される。また、胴部に釘書の線刻文字が認められ、「傘」あるいは「ひとやね（冠）」と「平」と読める。6は、陶器底部片である。底部に線刻文字が認められ「大極上」と読める。7は陶器鉢の口縁部から体部片である。8～12は焙烙で、いずれも瓦質である。9・10・12は内耳が底部に付き、9・10は平底であるが、12は底部が丸みを帯びる。9・10は外面下半に指頭圧痕が認められる。

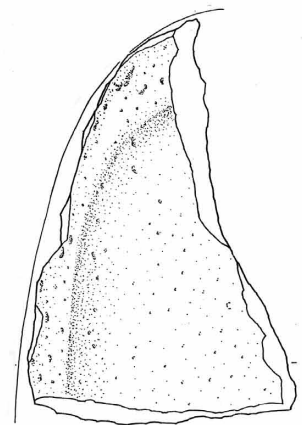
第66図1は、瀬戸美濃系の陶器播鉢の胴部から胴部片である。底部と胴部の内面に播面があり、播面の摩耗は著しく使い込まれたものと考えられる。底部は糸切り未調整の平底で、鉄釉が全面に施釉される。外面には重ね焼きの痕跡が認められた。近世の所産と考えられる。2～10は、磁器碗である。体部外面に植物文が描かれ、3の底部内面には鳥をあしらった意匠が施される。11は磁器猪口で体部外面に松の文様が描かれる。

石器 第63図14・15は、石皿片である。前者は、比較的小ぶりの石皿で、推定長軸20cmほどと思われる。裏面には、断面漏斗状の凹み1孔が観察される。後者は、かなり大型の石皿の残欠で、使用面はよく擦られている。

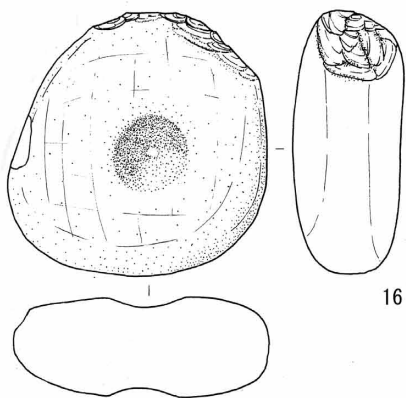
第66図12～14は、砥石である。いずれも全面に使用痕が認められ、よく使い込まれている。



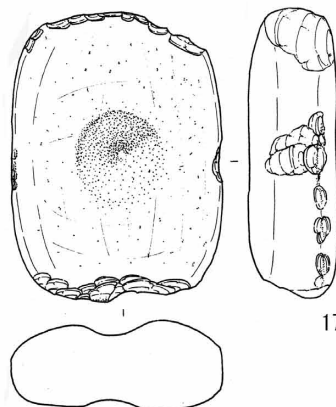
14



15



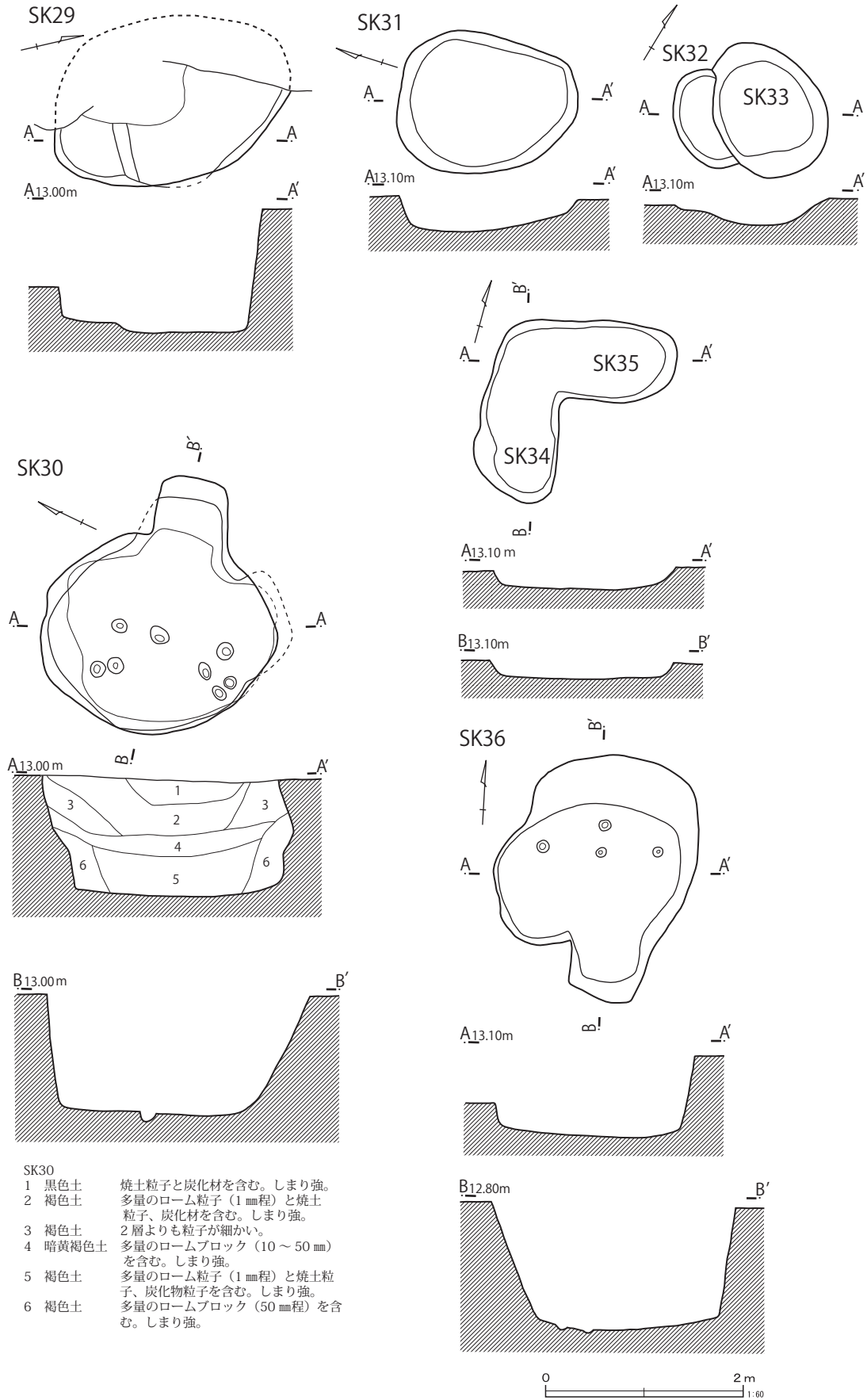
16



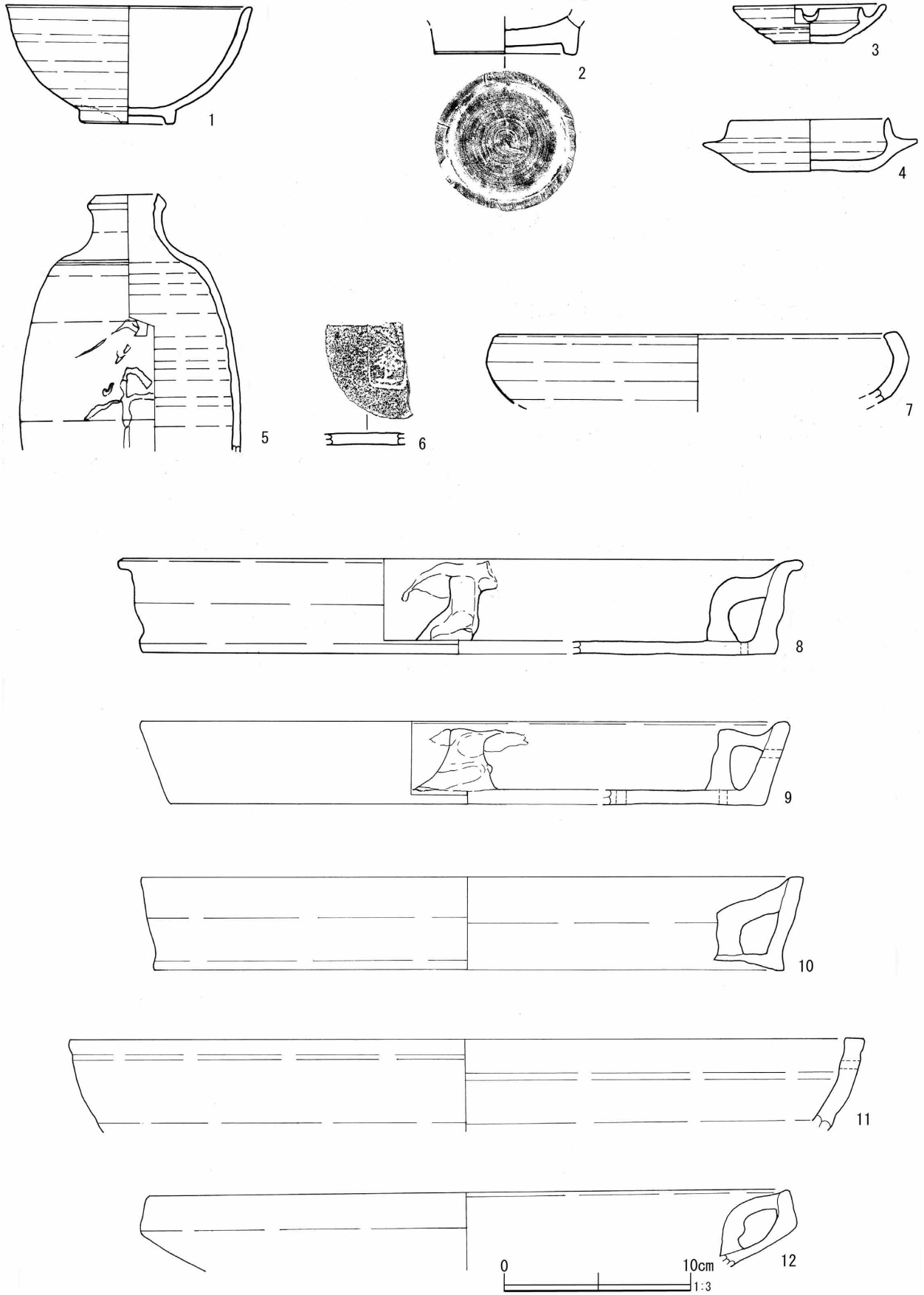
17



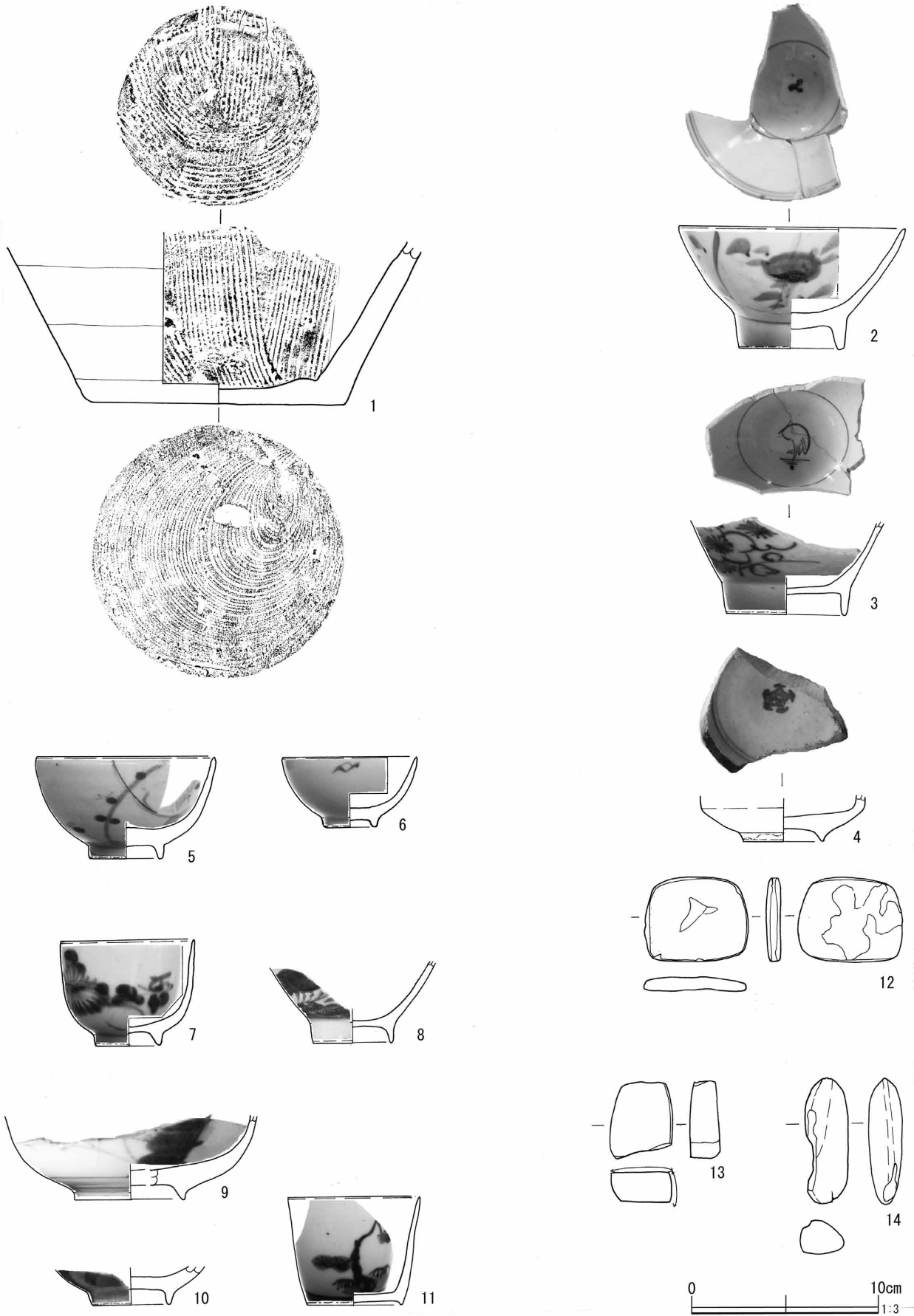
第63図 第13号住居跡・土坑・溝跡・グリッド出土遺物



第64図 第29~36号土坑



第65図 土坑出土遺物（1）



第66図 土坑出土遺物 (2)

●第30号土坑（第64・67図）

調査区北東に位置する。平面形は長径約2.5m、短径約2mの楕円形のプランに直径約0.7mの竪穴が付く。確認面からの深さは約1.2mを測り、底面で直径約0.1mのピットが8基検出された。壁面がハングする。本土坑はその形態から地下式坑（いわゆる地下ムロ）と考えられ、帰属時期は近世以降と思われる。

出土遺物（第67図）

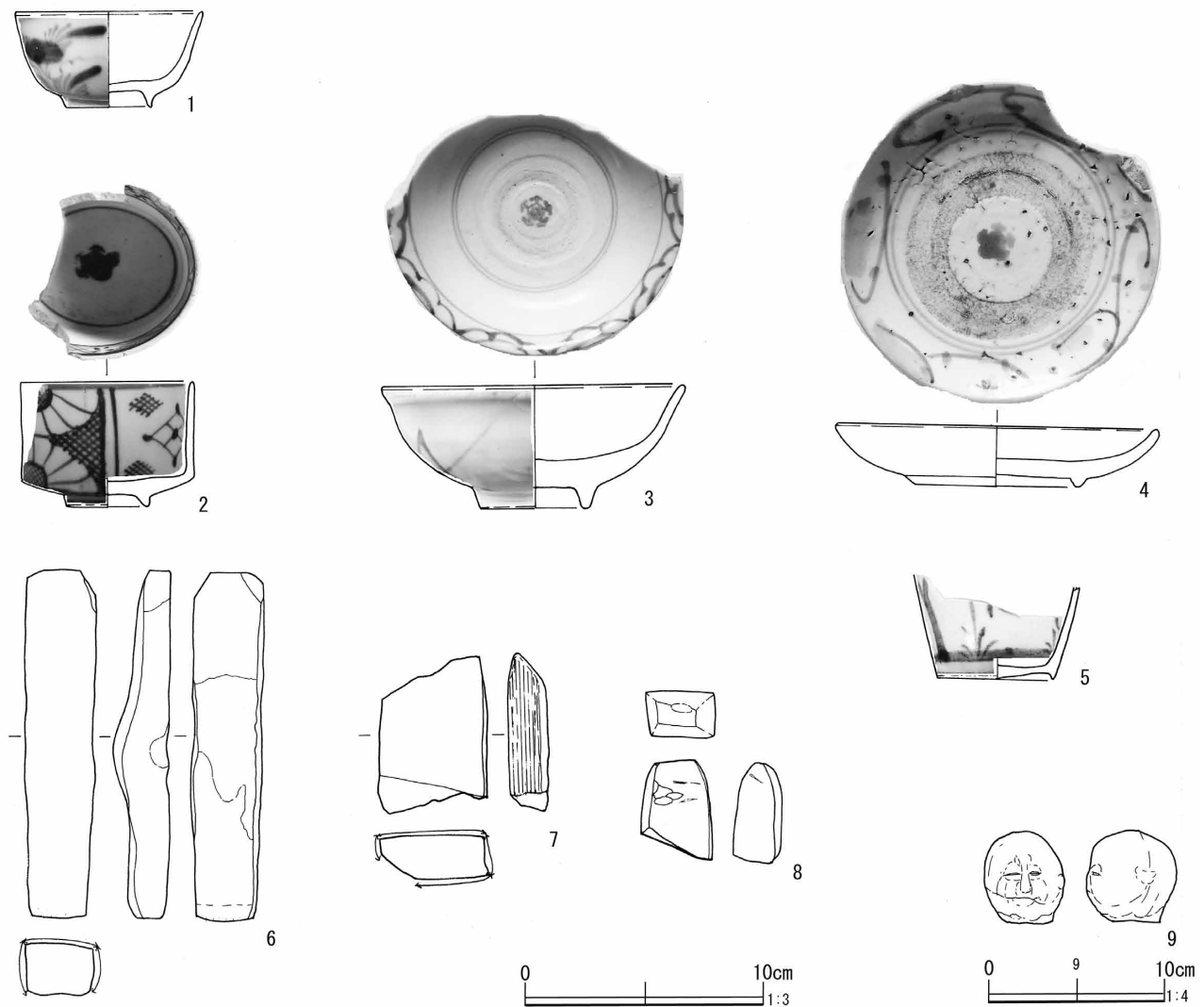
土器 1は磁器碗である。体部外面に植物文が描かれる。

●第31号土坑（第63・64図）

調査区中央よりやや北側に位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.5mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面の北寄りが浅く窪む。

出土遺物（第63図）

土器 4・5は2状の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する胴部資料である。



第67図 土坑・井戸跡・グリッド出土遺物

●第32号土坑（第64図）

調査区東側に位置し、第33号土坑に切られる。西側が切られているため、短径は不明であるが、長径約1mを測り、平面形は不整形円形を呈すものと考えられる。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面中央付近が窪む。

●第33号土坑（第64図）

調査区東側に位置し、第32号土坑を切る。平面形は長径約1.5m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面中央付近が窪む。

●第34号土坑（第64図）

調査区東端に位置し、第35号土坑と隣接するが切り合い関係は不明である。平面形は長径約1.9m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第35号土坑（第64図）

調査区東端に位置し、第34号土坑と隣接するが切り合い関係は不明である。平面形は長径約1.9m、短径約0.9mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第36号土坑（第64図）

調査区西側に位置し、第2号溝跡と第1号炭焼窯跡と重複する。平面形は長径約2.1m、短径約1.9mの楕円形のプランに直径約0.6mの竪穴が付く。確認面からの深さは約1.3mを測り、底面で直径約0.1mのピットが4基検出された。本土坑も第30号土坑同様に地下式坑と考えられ、帰属時期は近世以降と思われる。

(3) 溝跡

●第2号溝跡（第63・68図）

調査区中央を東西方向に直線的に延伸する。第36号土坑と第1号炭焼窯跡と重複する。幅は東側で狭まり0.9mを測るが、西側ではテラス状の張り出しをもち約1.9mを測る。中央部分で掘り直されたような痕跡が認められる。

出土遺物（第63図）

石器 16・17は磨石兼敲石である。前者は、扁平な楕円礫を素材とし表裏両面を磨石として使用している。また、表裏両面の中央部に浅い凹みが穿たれる。上端部は繰り返し敲打され、不規則な割れ目や潰痕が顕著である。後者は、扁平な楕円礫を素材とし、石鱗状に整形している。磨石としての使用は表裏両面に及ぶ。表裏両面の中央付近には敲打による浅い凹みが観察される。上下両端は、繰り返し敲打され、不規則な割れ目や潰痕が顕著である。また、両側縁の中程にも敲打によると思われる剥離や潰痕が窺われる。

(4) 井戸跡

●第1号井戸跡（第67・69図）

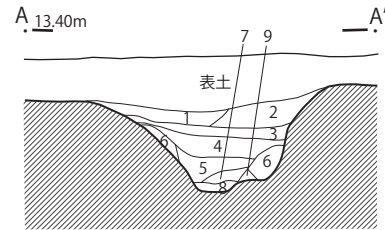
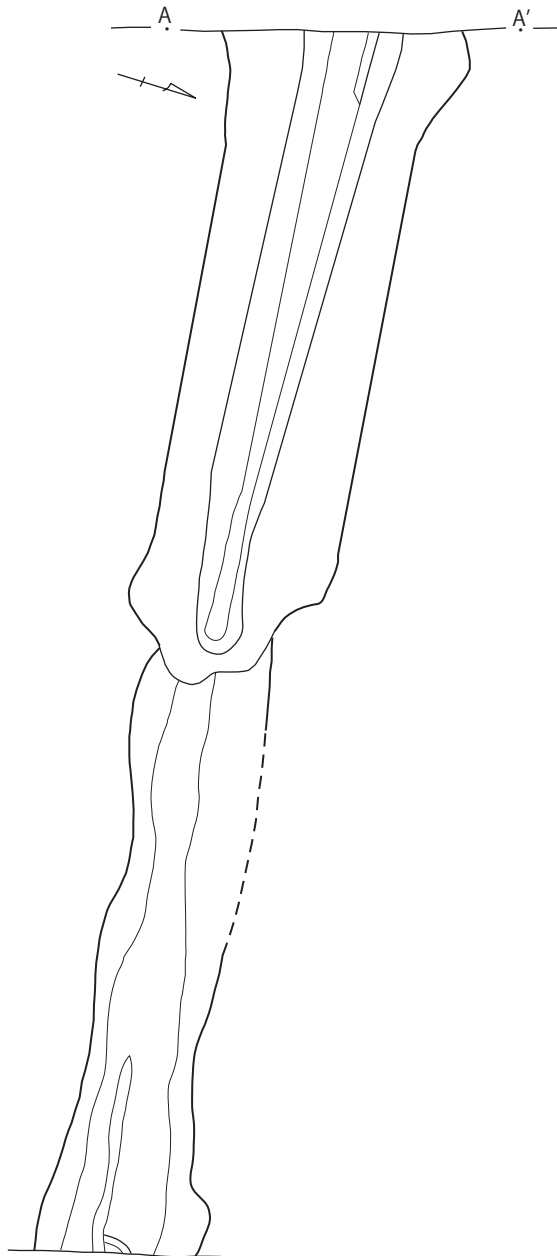
調査区中央よりやや北側に位置し、第2号炭焼窯跡を切る。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不

整円形を呈す。開口部が狭く直線的に落ち込む。近世以降の所産と考えられる。

出土遺物（第67図）

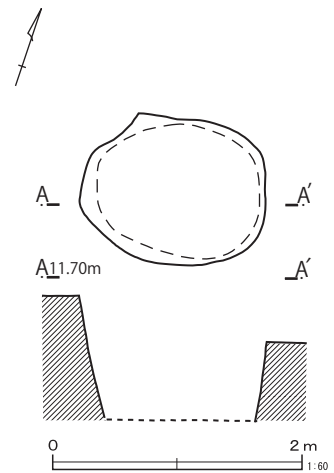
土器 2～3は磁器碗である。体部外面に植物文が描かれる。4は磁器皿で内面、5は磁器猪口で体部外面にそれぞれ植物文が描かれる。

石器 6・8は砥石である。6は長方形を呈し、全面に使用痕が認められるが、端部の使用面において特に顕著である。



SD2

- 1 暗褐色土 少量のローム粒子（1mm程）を含む。しまり強。
- 2 暗褐色土 多量のロームブロック（20mm程）を含む。しまり強。
- 3 黄褐色土 二次堆積ローム土。しまり強。
- 4 暗褐色土 少量の焼土ブロック（50mm程）を含む。しまり強。
- 5 褐色土 ブラックバンドの埋戻し土。しまり強。
- 6 褐色土 しまり強。
- 7 暗褐色土 ロームブロックと褐色土粒子を含む。しまり強。埋戻し土。
- 8 褐色土 多量のロームブロック（2～5mm）と炭化物（2mm程）を含む。しまり強。
- 9 黄褐色土 ロームブロック主体層。しまり強。



第68図 第2号溝跡

第69図 第1号井戸跡

（5）炭焼窯跡

調査区の南北18.5mの範囲で炭焼窯跡を確認した。断面の状況から、炭焼窯は3基が連続して重複しており、廃絶後に、北側へ2度に渡って移設したものと考えられる。堆積土にはローム土が挟在しており、天井部が崩れ落ちたものと考えられる。このことから、窯の構造はローム層を掘り抜いて天井部を構築していたものと推定される。断面観察によって得られた知見をもとに窯の構築の新旧関係を想定した。築造の古い順から第1号炭焼窯跡（調査区南側）、第2号炭焼窯跡（調査区中央）、第3号炭焼窯跡（調査区北側）と呼び分ける。

●第1号炭焼窯跡（第70・71・72図）

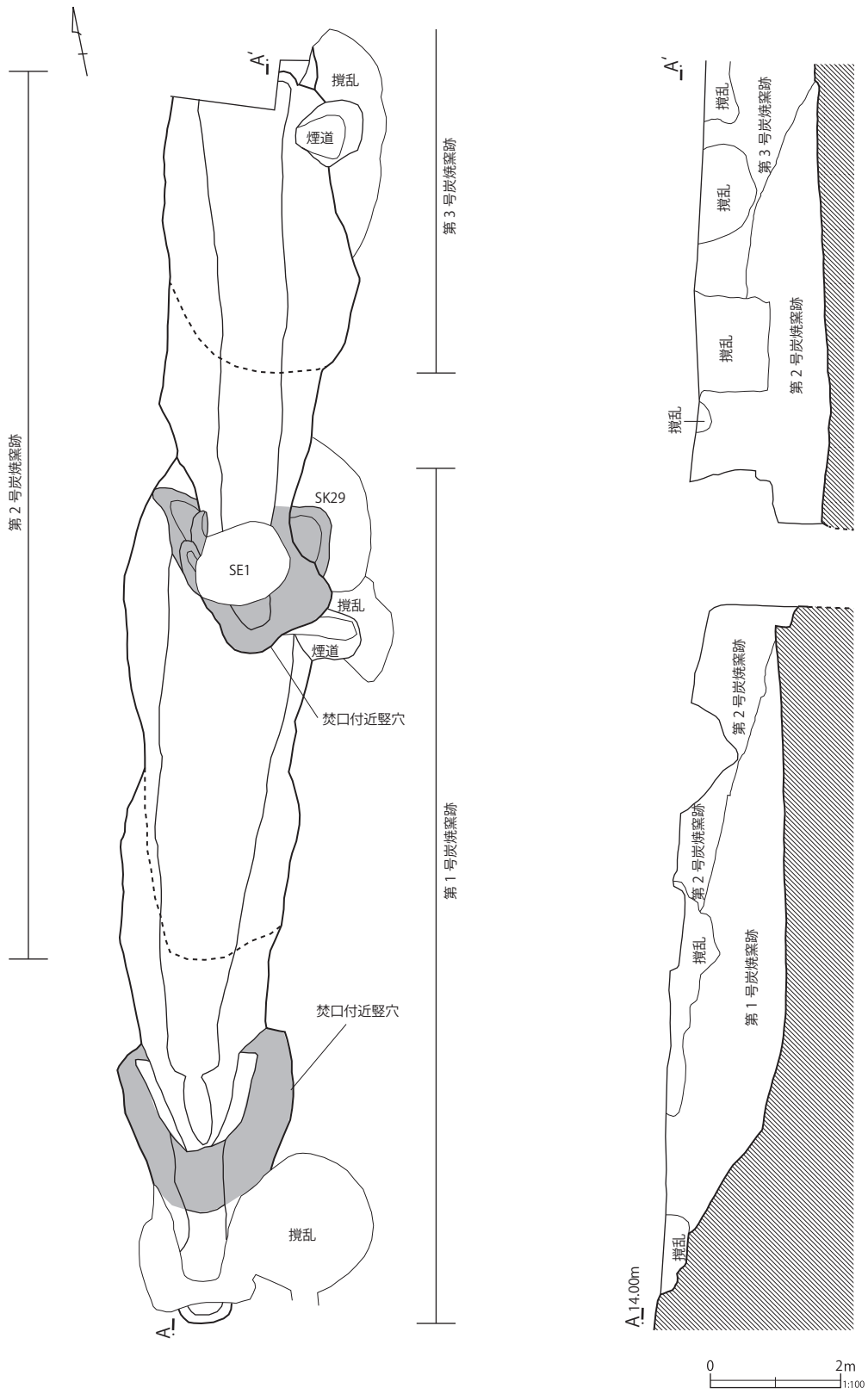
第36号土坑と第2号炭焼窯跡に切られる。窯体構造は、焚口部（5層）を境に前庭部から炭化室に移行するようであるが、平面形からは明確な区分は難しい。断面上で炭主体層と焼土主体層の互層が認められ始めるセクションDライン付近を焚口部の端とすると、前庭部は全長約4.5m、最大幅2.7m（焚口部付近）を測り、逆台形を呈す。炭化室の北側は重複する第2号炭焼窯跡前庭部によって切られているものの、確認できる限り全長約9m、最大幅約2.9mを測る。確認面からの深さは約1.8mを測り、煙道部から北側の底面は概ね平坦である。炭化室北側で、東に向かって約1m張り出す煙道部を1箇所確認することができた。

前述の通り、炭化室内では炭主体層と焼土主体層が互層となって堆積している。焼土主体層には、ロームブロックを多く含むものも見受けられ、作業前後の天井崩落に伴うものと考えられる。炭主体層を4面確認することができ、最低でも4回の作業が行われたものと推定される。切り合い関係から3基の窯跡の中では最も古いものと考えられる。遺構の年代を特定できる遺物は出土しなかったが、炭化材が大量に認められ、炭化室下部の9層でサンプリングした炭化材を年代測定試料（No.1）とした。

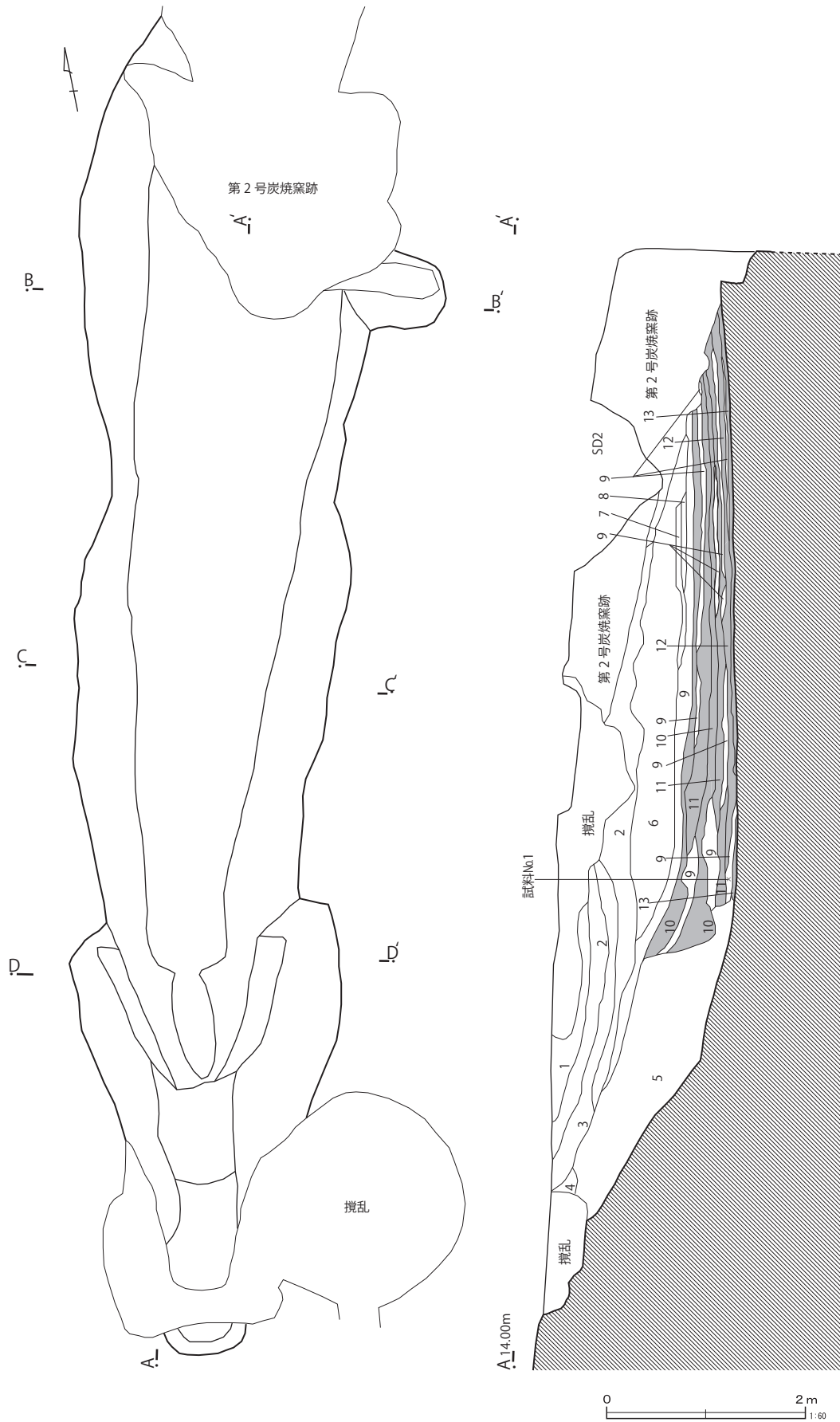
●第2号炭焼窯跡（第70・73・74図）

第1号炭焼窯跡を切り、第1号井戸跡と第3号炭焼窯跡に切られる。窯体構造は、焚口部（12層）を境に前庭部から炭化室に移行するようであるが、他遺構や攪乱の重複が激しく、第1号炭焼窯跡同様に明確な区分は難しい。断面上で炭主体層と焼土主体層の互層が認められ始めるセクションEライン付近を焚口部の端とすると、前庭部は全長約7.2m、最大幅3mを測り、長大なスロープを有す長方形を呈す。炭化室の北側は重複する第3号炭焼窯跡前庭部によって切られているものの、確認できる限り全長約6.5m、最大幅約2.9mを測る。確認面からの深さは約2.1mを測り、煙道部から北側の底面は概ね平坦である。第1号炭焼窯跡同様に、炭化室北側で、東に向かって約1.1m張り出す煙道部を1箇所確認することができた。

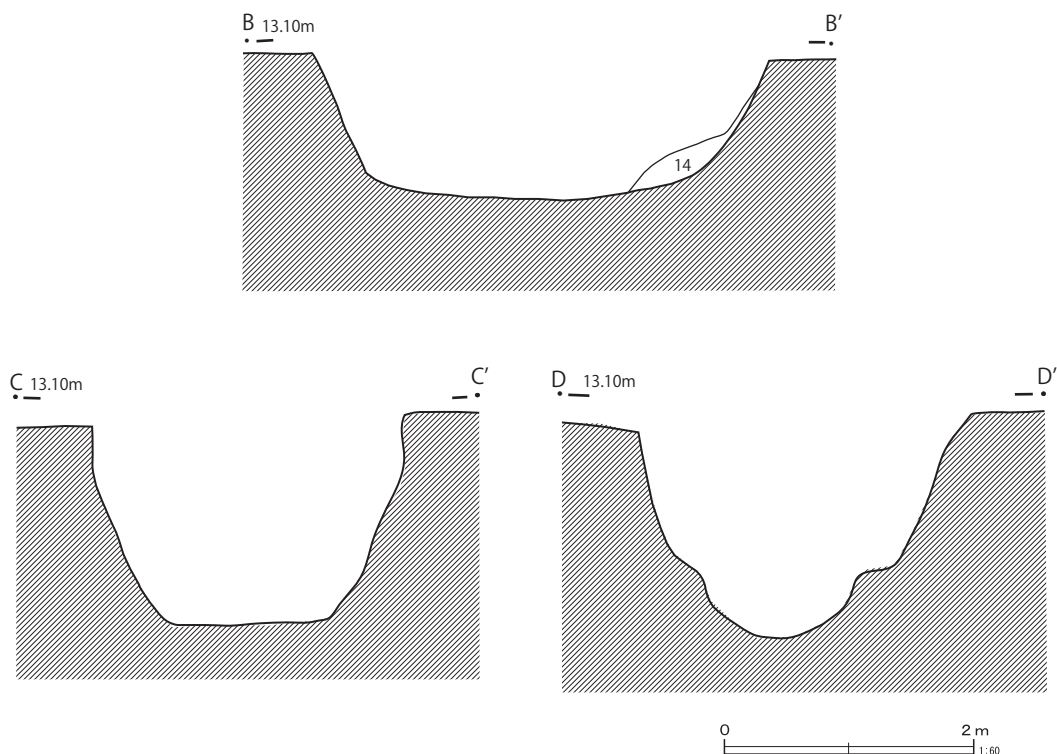
前述の通り、炭化室内では炭主体層と焼土主体層が互層となって堆積している。焼土主体層には、ロームブロックを多く含むものも見受けられ、作業前後の天井崩落に伴うものと考えられる。炭主体層を8面確認することができ、最低でも8回の作業が行われたものと推定される。切り合い関係から3基の窯跡の中では第1号炭焼窯跡に次いで、2番目に古いものと考えられる。遺構の年代を特定できる遺物は出土しなかったが、炭化材が大量に認められ、炭化室下部の12層でサンプリングした炭化材を年代測定試料（No.2）とした。



第70图 炭烧窑跡全体图



第71図 第1号炭烧窯跡 (1)



第1号炭焼窯跡

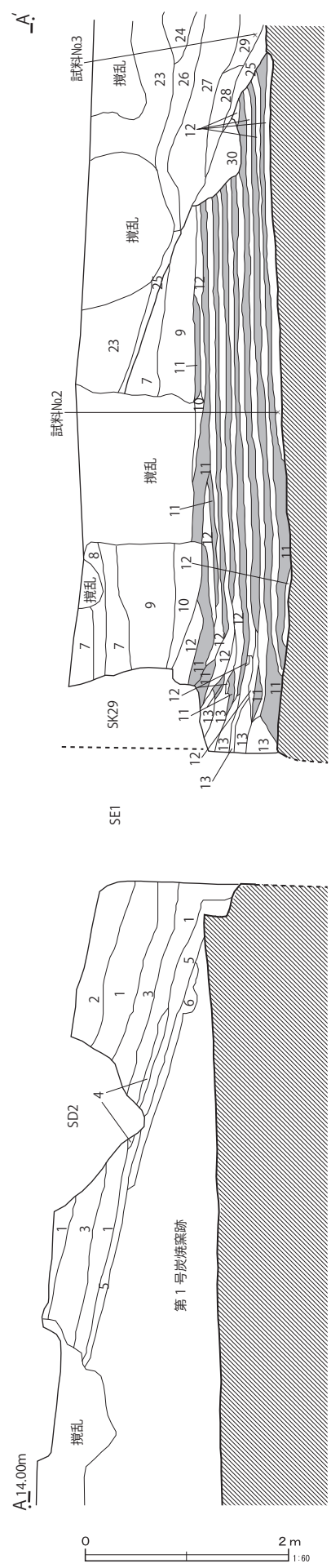
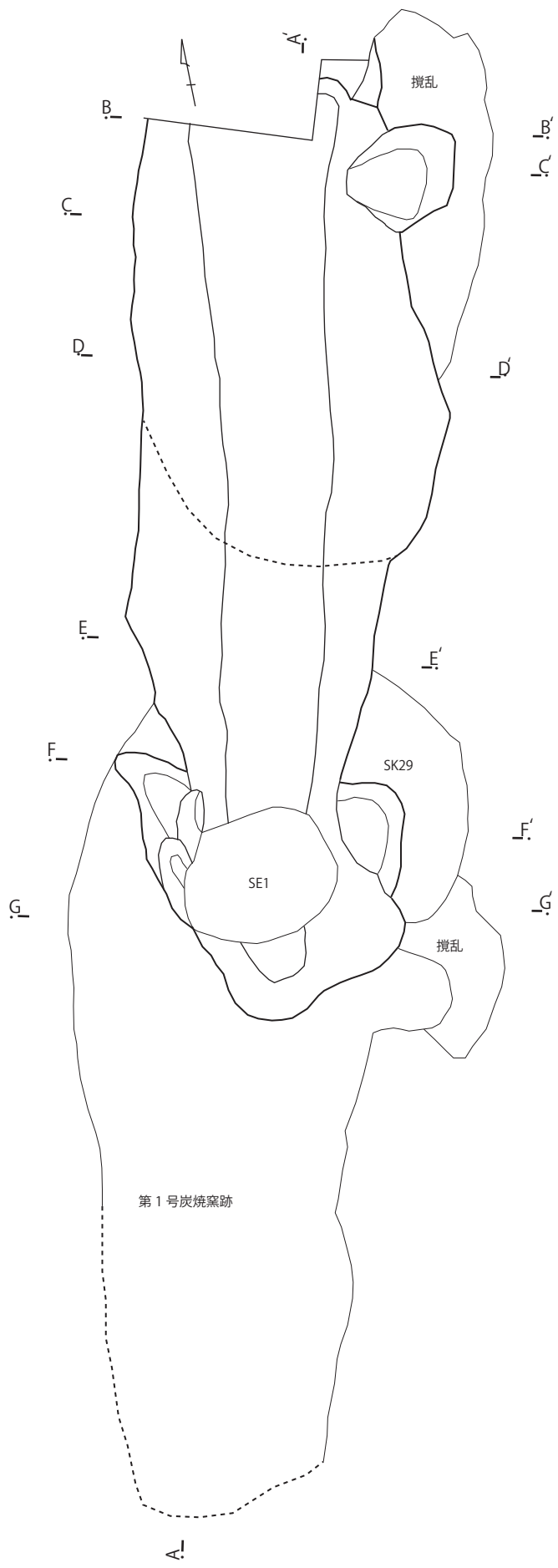
- 1 黄褐色土 多量のローム土を含む。窯跡崩落後に堆積した層。
- 2 黒色土 少量のローム粒子（1mm）を含む。窯跡崩落後に堆積した層。
- 3 暗褐色土 焼土微粒子主体層。灰を含む。
- 4 黄褐色土 ハードロームブロック。
- 5 褐色土 焼土粒子と炭化材被熱ロームブロック主体層。窯の灰層。
- 6 暗褐色土 窯跡の天井崩落土。二次堆積ローム土。
- 7 黄褐色土 焼土と炭化材を多く含む。窯跡の天井崩落土。二次堆積ローム土。
- 8 黄褐色土 炭化材と還元化窯体ブロックを含む。二次堆積ローム土。
- 9 黒色土 炭化材主体層。焼土粒子と青灰色粒子を含む。被熱しジャリジャリする。
- 10 橙色土 焼土粒子主体層。ロームブロックを含む。炭焼後の天井小崩落層。被熱しジャリジャリする。
- 11 暗褐色土 焼土粒子主体層。ローム土と炭化材を含む。
- 12 暗黄褐色土 焼土粒子と炭化材を含む。被熱し硬化。二次堆積ローム土。
- 13 暗黄褐色土 少量の焼土粒子と炭化材を含む。
- 14 暗褐色土 炭化材主体層。煙道部の堆積土。

第72図 第1号炭焼窯跡（2）

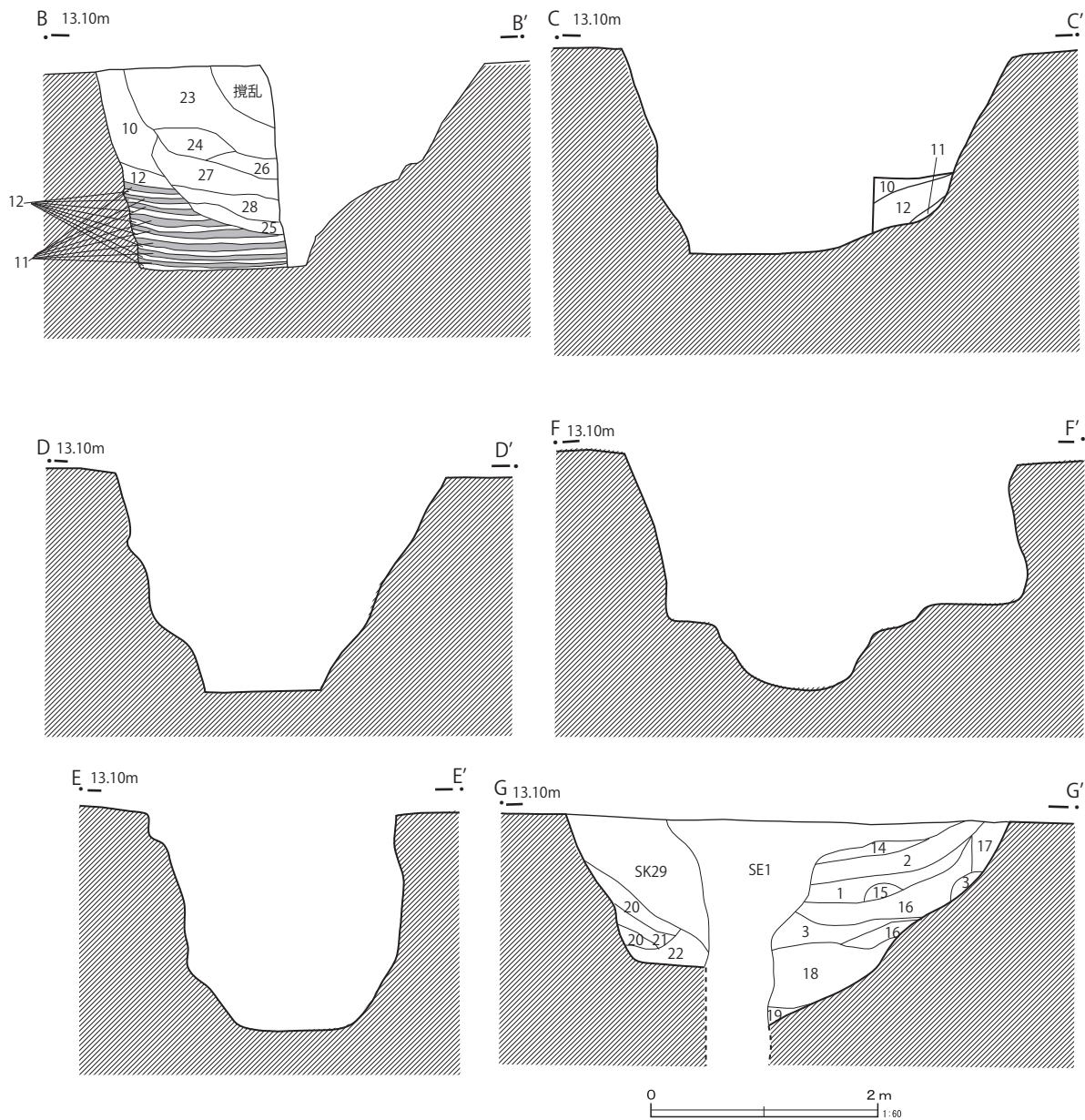
●第3号炭焼窯跡（第70・73・74図）

第2号炭焼窯跡を切る。前庭部の一部のみが認められ、北側の大半が調査区外である。そのため窯体構造も判然としないが、調査区際の25層や29層が焚口部付近に相当するものと思われる。残存長は約3.9m、最大幅約2mを測る。確認面からの深さは約1.5mを測る。

前庭部しか確認できなかったため、操業回数は不明である。切り合い関係から3基の窯跡の中では最も新しいものと考えられる。遺構の年代を特定できる遺物は出土しなかったが、炭化材が大量に認められ、焚口部付近と思われる29層でサンプリングした炭化材を年代測定試料（No.3）とした。



第73図 第2・3号炭烧窯跡 (1)



第2号炭焼窯跡

- | | |
|---------|--|
| 1 淡赤色土 | 多量の焼土ブロックと炭化材を含む。灰色ブロック（30 mm程）含む |
| 2 黒色土 | 多量のローム粒子（15 mm以下）と焼土粒子を含む。 |
| 3 黒色土 | 多量のローム粒子（5 mm未満）と焼土粒子、炭化材を含む。 |
| 4 褐色土 | 焼土粒子と炭化材を含む。しまり強。 |
| 5 黄褐色土 | 炭化材を含む。しまり強。二次堆積ローム土。 |
| 6 暗黄褐色土 | 炭化材を含む。しまり強。二次堆積ローム土。 |
| 7 黒色土 | 少量のローム粒子（1 mm）を含む。窯天井崩落土の凹みに堆積。 |
| 8 黒色土 | 少量のローム粒子（1 mm）とロームブロック（10 mm）を含む。窯天井崩落土の凹みに堆積。 |
| 9 暗黄褐色土 | 二次堆積ローム土。窯跡の天井崩落土。 |
| 10 暗褐色土 | 多量の焼土粒子と炭化材を含む。窯跡の天井崩落土。 |
| 11 橙褐色土 | 焼土ブロック主体層。灰色土ブロック（還元化した窯体）を含む。被熱し粒土が粗い。 |
| 12 黒色土 | 炭化材主体層。灰色土ブロック（還元化した窯体）を含む。被熱しジャリジャリする。 |
| 13 橙褐色土 | 焚口付近の灰層。ローム土と焼土ブロック、炭化材を含む。被熱しジャリジャリする。 |
| 14 明黒色土 | 多量の焼土粒子と炭化材を含む。ボンボン。 |
| 15 褐色土 | 二次堆積ローム土。 |
| 16 褐色土 | 多量の焼土粒子と焼土ブロック、炭化材、灰色土ブロック（10 mm）を含む。 |
| 17 暗褐色土 | 二次堆積ローム土。 |
| 18 褐色土 | 多量の焼土ブロックと炭化材、少量のロームブロック（50 mm）を含む。 |
| 19 黄褐色土 | 炭化材と灰色土ブロックを含む。 |
| 20 暗褐色土 | 1号炭焼窯跡の天井崩落土。二次堆積ローム土。 |
| 21 褐色土 | 1号炭焼窯跡の覆土。焼土粒子を含む。ややボンボン。 |
| 22 黒色土 | 1号炭焼窯跡の覆土。多量の焼土粒子と焼土ブロック、炭化材を含む。 |

第3号炭焼窯跡

- | | |
|---------|--------------------------------------|
| 23 黒色土 | 少量のローム粒子（1 mm）と焼土粒子を含む。焚口の凹みの覆土。 |
| 24 淡褐色土 | 橙色化した焼土微粒子を含む。 |
| 25 黄褐色土 | 二次堆積ローム土。被熱硬化している。焚口のスロープ面。 |
| 26 灰色土 | 少量の焼土粒子を含む。 |
| 27 暗褐色土 | 焼土粒子と炭化物粒子主体層。ボンボンしている。 |
| 28 褐色土 | 焼土粒子と焼土ブロック、炭化材、ローム土を含む。被熱しジャリジャリする。 |
| 29 黒色土 | 微細な炭化物主体層。ボンボンしている。 |
| 30 淡褐色土 | 29層に近似し黄色味強い。被熱しジャリジャリする。 |

第74図 第2・3号炭焼窯跡（2）

(6) グリッド出土遺物（第63・67図）

土器 第63図6は、F98グリッド出土の口縁部資料である。やや内湾する平縁土器で沈線による長楕円形の区画が看取される。7は、内湾する平縁土器で、横走る2条の沈線間に2列の円形刺突文列が施される。8・9は、F98グリッド出土の胴部資料で、前者は破片左端に垂下する1条の沈線が看取される。後者は、破片上端に幅広の2条の浅い沈線が観察される。沈線間はミミズ腫れ状に盛り上がるが、隆帯を貼っているわけではない。10・11は、単節縄文地文上に2条の沈線に縁取られた磨消文帯が垂下する胴部資料である。12は斜行する条線文の施されるもの、13は、F98出土で縦位の条線文地文上に2条の沈線が垂下する胴部資料である。

石器 第67図7は砥石である。

土製品 9は人頭を模した土製品である。

第5表 沖山西遺跡（第3地点）出土石器計測表

図No.	遺物No.	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
63	14	29号土坑	石皿	安山岩	(11.6)	14.7	15.9	(1400.0)	
63	15	29号土坑	石皿	閃緑岩	(15.5)	(10.2)	5.4	(1180.0)	
63	16	16号溝	磨石兼敲石	砂岩	10.4	10.1	4.0	640.0	全体被熱
63	17	16号溝	磨石兼敲石	閃緑岩	11.5	8.3	3.5	550.5	

V 大町遺跡（第2地点）の調査

1 遺跡の概要

大町遺跡は大宮台地慈恩寺支台の北部西縁に位置する。同支台の西側には旧利根川やその支流の氾濫によって形成された沖積低地である日川低地^{にっかわ}が広がり、遺跡はその日川低地から支台へ入り込む支谷に南面して立地する。この支谷は旧来「忠恩寺沼」と称される後背湿地で、戦後まもなくまで、「堀上田」という独特の水田耕作が行われてきた場所でもある。当遺跡の西隣には、奈良時代以降の遺跡と把握される忠恩寺遺跡が展開する。

大町遺跡では平成10年度、本地点東側宅地で初の発掘調査を行い、縄文土器や土坑を検出している。調査地点は、遺跡の北寄りに位置し、標高は12mである。

2 遺構と遺物

第75図のとおり3条の溝跡と井戸跡と屋外炉跡を1基ずつと、10基のピットを検出した。3条の溝跡は近接して並行する。3条とも区画を意図して掘り直したものと考えられる。第1号溝跡が最古で、第3号溝跡が最も浅く最新の溝跡である。

(1) 溝跡

●第1号溝跡（第75・76図）

調査区を南北に直線的に延伸する。第2号溝跡と第1号井戸跡に切られる。幅は中央部で狭まり0.3mを測るが、南側ではテラス状の張り出しを持ち約1mを測る。覆土の状態から近世以降の所産と考えられる。

出土遺物（第76図）

土器 5は、かわらけの底部資料である。推定底径6.8cmほどを測り、底面には回転糸切痕を残す。

●第2号溝跡（第75・76図）

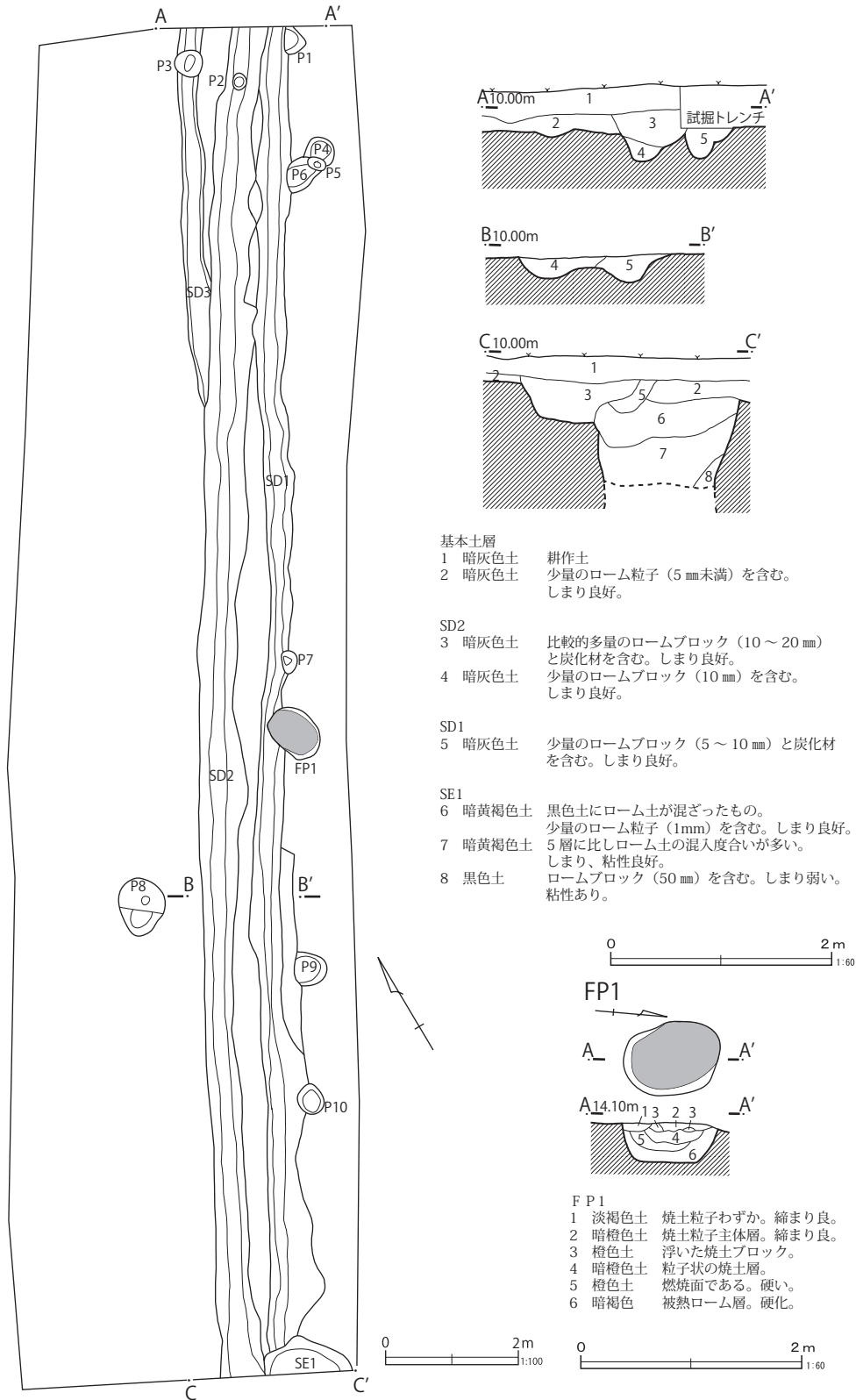
調査区を南北に直線的に延伸する。第1号溝跡を切る。幅は約0.7mであるが、南側の最も狭い箇所では、0.4mを測る。覆土の状態から近世以降の所産と考えられる。

出土遺物（第76図）

土器 1・2は、胎土に微量の繊維を含む条痕文系土器群である。2では、口唇部に絡条体圧痕文が施される。6は、近世以降の磁器片である。小型の皿形土器であり、表裏に釉薬がかけられている。

●第3号溝跡（第75図）

調査区の北端から南に向かって5m程延伸したところで途切れる。幅は約0.4mを測る。非常に浅い窪みである。覆土の状態から近世以降の所産と考えられる。



第75図 大町遺跡（第2地点）全測図及び遺構図

(2) 井戸跡

●第1号井戸跡（第75図）

調査区南端で一部を検出した。第1号溝跡を切る。平面形は円形を呈すようである。開口部が狭く直線的に落ち込む。近世以降の所産と考えられる。

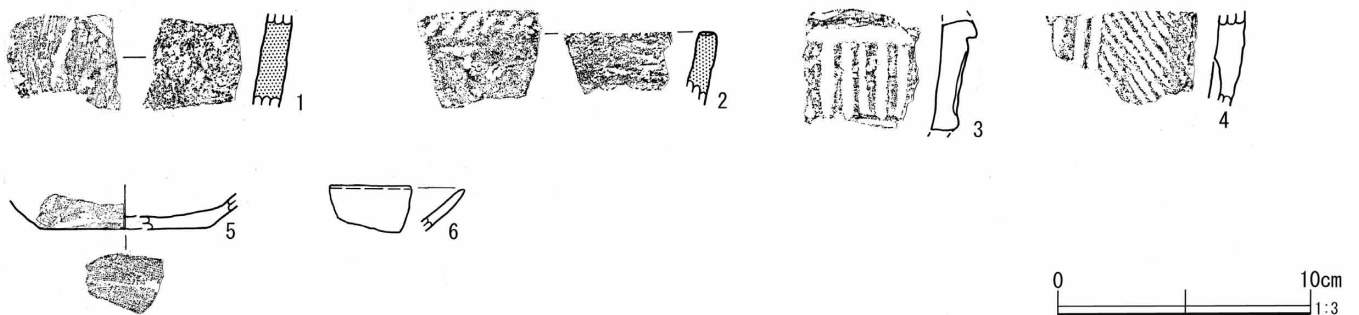
(3) 屋外炉跡

●第1号屋外炉跡（第75図）

帰属不明の屋外炉として扱うが、グリッドから縄文早期後葉の条痕文系土器群が出土しており、該期の炉穴である可能性が高い。平面形は長径約0.9m、短径0.7mの不整円形を呈す。焼面が非常に発達しており、被熱ロームの堆積も厚い。

(4) グリッド出土遺物（第76図）

土器 3は、沈線と隆帯とで枠状区画を形成する口縁部付近の資料である。区画内には縦位の沈線が充填される。4は、縄文地文上に沈線を垂下させる胴部資料である。



第76図 溝跡・グリッド出土遺物

VI 自然科学分析

1 沖山西遺跡（第3地点）出土炭化材の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

沖山西遺跡（埼玉県白岡市小久喜地内）は、大宮台地東側、白岡支台の東縁部に位置し、日川低地へ半島状に突き出た台地に立地する。本遺跡では、これまでに3地点で発掘調査が実施されており、縄文時代中期及び近世～近代の遺構が確認されている。

本報告では、沖山西遺跡の第3地点より検出された炭焼窯跡の年代の検討を目的として、同遺構内より出土した炭化材を対象に放射性炭素年代測定を実施した。

1. 試料

試料は、1～3号炭焼窯跡の各遺構より採取された炭化材3試料（試料No.1～3）である。1～3号炭焼窯跡は、いずれも土器等の出土遺物が認められなかったものの、遺構の重複関係から1号→2号→3号という新旧関係が推定されている。分析に供された炭化材試料は、いずれも複数の破片からなり、後述する放射性炭素年代測定に供する試料を抽出するため形状や木取りの観察を行った。以下、各試料の概要及び測定に供した試料を記す。

(1) 試料No.1;1号炭焼窯跡 9層

炭化材試料の観察の結果、残存状況がミカン割状（半径約2.5cm）を呈し、端部に加工（切断）痕とみられる痕跡が残る炭化材をはじめ、半裁あるいは芯持丸木状を呈する径2cm未満の炭化材などが確認された。本遺構では、樹皮が残る芯持丸木状（径約5mm;4年生）の炭化材を供した。

(2) 試料No.2;2号炭焼窯跡 12層

炭化材試料の観察の結果、残存状況がミカン割～半裁状（半径約2～3cm）を呈する炭化材などが確認された。本遺構では、樹皮が残存する半裁状（径約2cm）を呈する炭化材の最外年輪より3年分を供した。

(3) 試料No.3;3号炭焼窯跡 29層

炭化材試料の観察の結果、残存状況が芯持丸木～分割材状（半裁～ミカン割状）を呈し、外観が類似する炭化材が複数確認された。本遺構では、径（最大）約2.5cmを呈するほぼ芯持丸木状を呈する炭化材の最外年輪より5年分を供した。

なお、本分析では、上記の観察所見から抽出した炭化材3点の試料の履歴（樹種）に関する情報を得るため、同一破片を用いて樹種の確認（樹種同定）も行った。

2. 分析方法

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・ア

ルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果及び考察

炭焼窯跡から出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定年代(補正年代)は、1号炭焼窯跡試料が1,350±20yrBP、2号炭焼遺構試料が1,160±20yrBP、3号炭焼窯跡試料が1,250±20yrBPである。各炭化材試料の暦年較正結果(1 σ)は、1号炭焼窯跡試料がcalAD 656-calAD 672、2号炭焼窯跡試料がcalAD 778-calAD 940、3号炭焼窯跡試料がcalAD 694-calAD 771を示す(表1、図1)。

上記した放射性炭素年代測定結果に基づく較正暦年代(以下、暦年代)を参考とすると、3基の炭焼遺構は7世紀中頃から10世紀中頃までの年代観が推定される。遺構の構築(造りかえ)順についてみると、1号炭焼遺構が最も古い暦年代を示し、2号及び3号炭焼窯跡では後者がやや古い暦年代を示した。

また、放射性炭素年代測定に供した炭化材3点は、いずれも広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*)に同定された。日本のクヌギ節には、クヌギとアベマキの2種があり、関東地方にはクヌギが広く分布する。一方、アベマキは西日本を中心に分布しており、関東地方には分布していないことから、今回のクヌギ節もクヌギの可能性が高い。クヌギは、二次林等に生育する落葉高木であり、同じ二次林を構成するコナラ節に対してより湿った場所を好み、エノキと共に河畔林を構成することもある。さらに、クヌギの木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては国産材の中で最も優良な

種類の一つとされる。

白岡市周辺及び埼玉県内の調査事例では、薬師堂根遺跡（伊奈町）や東台遺跡（旧大井町）の古墳時代末期～平安時代初期の炭窯から出土した炭化材にクヌギ節が多く確認されており（伊東・山田，2012）、本遺跡においても上述したようにクヌギ節が確認されている。このようなクヌギ節が多く確認されるという傾向は、同時期の薪炭材の木材利用を反映している可能性があり、今後さらに資料の蓄積による検討が期待される。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久（編），2012，木の考古学 出土木製品用材データベース．海青社，449p.

第6表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果			相対比	測定機関 CodeNo.
				σ	cal AD	cal BP		
試料No.1 1号炭焼窯跡 9層 炭化材(クヌギ節)	1,350±20	-23.34±0.23	1,346±20	σ	cal AD 656 - cal AD 672	cal BP 1,294 - 1,278	1.000	IAAA- 131809
				2σ	cal AD 647 - cal AD 688	cal BP 1,303 - 1,262	1.000	
試料No.2 2号炭焼窯跡 12層 炭化材(クヌギ節)	1,160±20	-26.01±0.18	1,164±22	σ	cal AD 778 - cal AD 791	cal BP 1,172 - 1,159	0.159	IAAA- 131810
					cal AD 805 - cal AD 819	cal BP 1,145 - 1,131	0.119	
					cal AD 822 - cal AD 842	cal BP 1,128 - 1,108	0.184	
					cal AD 861 - cal AD 895	cal BP 1,089 - 1,055	0.429	
				2σ	cal AD 928 - cal AD 940	cal BP 1,022 - 1,010	0.109	
					cal AD 774 - cal AD 901	cal BP 1,176 - 1,049	0.848	
試料No.3 3号炭焼窯跡 29層 炭化材(クヌギ節)	1,250±20	-25.50±0.18	1,252±22	σ	cal AD 694 - cal AD 746	cal BP 1,256 - 1,204	0.862	IAAA- 131811
					cal AD 763 - cal AD 771	cal BP 1,187 - 1,179	0.138	
				2σ	cal AD 676 - cal AD 777	cal BP 1,274 - 1,173	0.930	
					cal AD 792 - cal AD 804	cal BP 1,158 - 1,146	0.022	
					cal AD 812 - cal AD 825	cal BP 1,138 - 1,125	0.016	
					cal AD 840 - cal AD 862	cal BP 1,110 - 1,088	0.031	

VII 考 察

1 炭焼窯跡の構造と年代

沖山西遺跡第3地点で3基の炭焼窯跡を検出した。IV章で既述のとおり、3基の窯跡は南北方向に重複を繰り返しながら構築されている。全ての窯跡で切り合いが認められ、最新の3号炭焼窯跡が前庭部のみを残して調査区外に延伸しているため、窯跡の全容が明らかになっている事例は認められなかった。切り合い関係から、3基の窯跡の新旧関係は、1号が最古で以降、1→2→3号の順に構築されたものと考えられる。一方、各窯跡の出土炭化材の放射性炭素年代測定の結果は、VI章のとおりである。第1号炭焼窯跡に7世紀後半、第2号炭焼窯跡に8～10世紀、第3号炭焼窯跡に8～9世紀後半の暦年代が示された。第2・3号炭焼窯跡の年代幅が広いものの、相対的には第3号炭焼窯跡が第2号炭焼窯跡よりも古い数値を示している。この結果は、土層の切り合い関係と合致するものではないが、その一因として第1・2号炭焼窯跡の試料が炭化室の下部でサンプリングしたものであるのに対し、第3号炭焼窯跡においては、調査区の制約上、炭化室を検出できなかったため、サンプリングした試料が焚口付近であった点をあげることができよう。こうした試料サンプリングの条件の違いと土層の切り合い関係から、本稿では窯跡の構築順序はあくまで1→2→3号であり、1・2号間の構築時期は断絶を挟むものの、2・3号間の時期差は少ないものであったと考えたい。

窯跡の構造の特徴として、第1・2号炭焼窯跡において、奥壁手前右側に約1mの煙道の張り出しが認められる点があげられる。上尾市の八番耕地遺跡（赤石・小宮山編1994）で検出された第1号炭焼窯跡は、窯の全体構造を捉えることができる良好な事例で、焚口部を境として逆三角形の前庭部と長方形の炭化室が併設され、炭化室の奥壁手前の右側には約1mの煙道の張り出しが認められる。本遺跡での事例と比較すると、前庭部の形状など細部での相違が認められるものの、奥壁手前右側に約1mの煙道の張り出しをもつという点において、共通性を見出すことができる。また、白岡市内の事例としても未報告であるが小久喜の南鬼窪氏館跡第5地点において、同様の煙道をもつ炭焼窯跡が見つかっており、出土炭化材の放射性炭素年代測定からは、8～9世紀の所産であるという結果を得ている。奥壁手前に煙道の張り出しをもつという特徴が、古代における市域周辺の炭焼窯跡の形態的特徴として普遍的なものと言えるのか、今後の類例の増加を俟ちたい。

第1号炭焼窯跡と第2号炭焼窯跡の構築の間に顕著な時期差が存在する点をどのように理解するのか。古代の炭焼窯の多くは製鉄に用いる炭を生産したと考えられているが、周辺の資源（木材）確保の問題から、各炭焼窯が同時期に一斉に構築された訳ではなく、転々と場所を変えながら移設されたとも考えられている。製炭のための大量の木材が必要とされるため、同一場所において、長期間、炭焼窯の操業を行うと、周辺の森林資源の枯渇を招くおそれがあるが、炭焼窯の1回の操業で、どの程度の木材が必要とされるのか、検討する必要がある。一つの炭焼窯で操業を行い、資源の回復後に再操業するといった周期的な操業のほか、季節的な操業なども想定される。また、炭の消費地の需要の多寡といった外的要因にも操業は左右されよう。こうして大小の断絶を挟みながら、同一場所で窯の操業と窯自体の再構築が繰り返された結果が、第1・2・3号炭焼窯跡の姿ではないだろうか。

2 白岡市域の炭焼窯跡と古代製鉄

第77図は白岡市域における炭焼窯跡検出遺跡と製鉄関連遺跡の位置を示したものである。市域では、本報告の沖山西遺跡第3地点のほか、山遺跡と南鬼窪氏館跡の計3遺跡で炭焼窯跡が検出された。南鬼窪氏館跡第5地点においては、8～9世紀の炭焼窯跡が1基検出されている。山遺跡では第7地点や第9地点、第10地点などで炭焼窯跡が検出されているが、山遺跡第7地点炭焼窯跡出土炭化材は放射性炭素年代測定の結果、近現代という値が示された（松崎編2011）。

炭は重量に対して容積が大きくなるため、近距離から供給されるものと考えられ、炭焼窯跡の周囲には製鉄関連遺構がセットとなって存在することが多い。埼玉県屈指の古代製鉄遺跡である伊奈町の大山遺跡では、製鉄炉や鍛冶工房跡（赤熊編2012など）に加えて、同一遺跡内にも炭焼窯跡が検出されている（谷井ほか編1979、栗岡編2005）。また、近隣の同町赤羽遺跡（利根川ほか編1984）や上尾市の谷津下I遺跡（赤石編1987）でも同時期のものとされる炭焼窯跡が認められており、大山遺跡へ供給する炭が生産されたものと考えられる。

白岡市域における製鉄関連遺跡としては、白岡支台においてタタラ山遺跡、入耕地遺跡、中妻遺跡が、慈恩寺支台において赤砂利遺跡と宮山遺跡の計5遺跡が認められる。タタラ山遺跡第8地点では、奈良・平安時代住居跡の竈焚口部分で大口径羽口片が出土した。少量の鉄滓も出土しており、製鉄遺構そのものは検出されていないものの、付近での製鉄の可能性を窺わせる。入耕地遺跡では、第1・3地点より少量の鉄滓が出土している（奥野編2010）。中妻遺跡では、第2地点の第1～4号住居跡から、鉄滓と刀子や鎌といった鉄製品、砥石が出土しており、住居跡内で小鍛冶が行われていた可能性が高い（岡田編2012）。相伴土器の年代観から、第3号住居跡は7世紀後半、第1号住居跡は8世紀第Ⅲ四半期、第4号住居跡は8世紀第Ⅳ四半期、第2号住居跡は9世紀代に帰属するものと考えられる。第10地点では、市域では初めて精錬工房跡が1軒検出され、炉跡と鉄が流れ出た湯口の痕跡が認められた。工房内からは、土師器や須恵器、鉄製品とともに、夥しい数の鉄滓や羽口が出土している。出土土器の年代観から、工房の帰属時期は8世紀第Ⅰ四半期末から第Ⅱ四半期にかけてのものと考えられる。赤砂利遺跡では、第2地点の第1号土壌（井戸跡）から羽口片1.45kg、鉄滓10.39g（内碗形滓2.75kg）、刀子や釘といった鉄製品が出土した（松崎編2004）。遺構の年代を特定できる遺物は出土しなかったが、付近で行われた小鍛冶操業による生成物を投棄したものと考えられる。宮山遺跡は、分布調査からは製鉄炉の存在の可能性が指摘されている（鈴木編1983）。しかし、平成24年度の試掘調査で遺跡の大部分を調査したが、製鉄に関する痕跡は一切認められなかった。

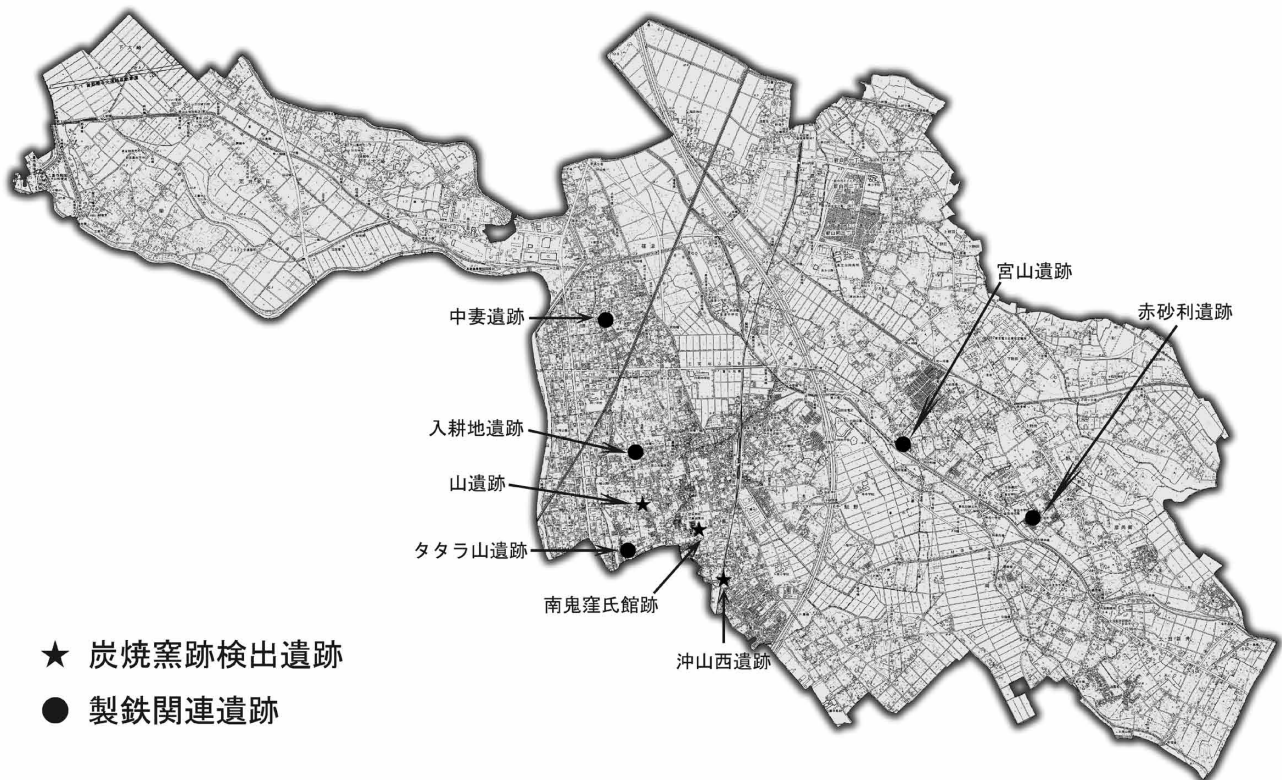
炭焼窯跡検出遺跡を含めると白岡市域では計8遺跡において、製鉄に関係する遺跡が認められている。しかし、上記のように時期比定できるものは白岡支台のみに限定され、中妻遺跡の事例から小鍛冶の痕跡は7世紀後半から9世紀代まで、精錬鍛冶の痕跡は8世紀から認められる。また、炭焼窯の操業は7世紀後半から行われた可能性がある。

沖山西遺跡や南鬼窪氏館跡の炭焼窯跡で製炭された炭の供給先はどこであったのか。現在発見されているものの中で、木炭を必要とするような大規模な製鉄遺構は、白岡市域では中妻遺跡第10地点の精錬工房跡のみである。沖山西遺跡と南鬼窪氏館跡が位置する小久喜地区と、中妻遺跡の位置する篠津地区とは距離的な隔りがあり、製炭された炭が全て中妻遺跡に供給されていたのかには検討の余地を残す。製鉄

遺構そのものは検出されていないものの、タタラ山遺跡で製鉄が営まれていたと仮定した場合、距離的にも炭焼窯と近接する同遺跡は、炭の供給先として有力な候補と考えられよう。

引用文献

谷井 彪ほか編 1979 『大山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 埼玉県教育委員会
 赤石光資編 1987 『谷津下 I 遺跡』 上尾市文化財調査報告第30集 上尾市教育委員会
 赤石光資・小宮山克己編 1994 『八番耕地遺跡』 上尾市遺跡調査会調査報告書第11集 上尾市遺跡調査会
 赤熊浩一編 2012 『大山遺跡 第12次』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第392集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 岡田勇介編 2012 『中妻遺跡（第2・4・8地点）』 白岡町埋蔵文化財調査報告書第21集 白岡町教育委員会
 奥野麦生編 2010 『入耕地遺跡—第1・3地点—』 白岡町遺跡調査会報告書第9集 白岡町遺跡調査会
 栗岡 潤編 2005 『大山遺跡 第10・11次』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第299集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 鈴木敏昭編 1983 『原始・古代 I（遺跡分布調査）』 白岡町史資料2 白岡町
 利根川章彦ほか編 1984 『赤羽・伊奈氏屋敷跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第31集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 松崎慶喜編 2004 『赤砂利遺跡（第2地点）』 白岡町埋蔵文化財調査報告書第13集 白岡町教育委員会
 松崎慶喜編 2011 『山遺跡（第7地点）』 白岡町埋蔵文化財調査報告書第20集 白岡町教育委員会



第77図 白岡市域の炭焼窯跡と製鉄関連遺跡の分布

写真図版



掘削作業状況



実測作業状況



現地説明会の様子 (1)



現地説明会の様子 (2)

図版2 沖山遺跡（第1地点）



遺構確認状況



炉跡検出状況



第1号住居跡出土遺物 (1)



第1号住居跡出土遺物 (2)



第1号住居跡出土遺物 (3)

図版4 沖山西遺跡（第1地点）



調査区全景



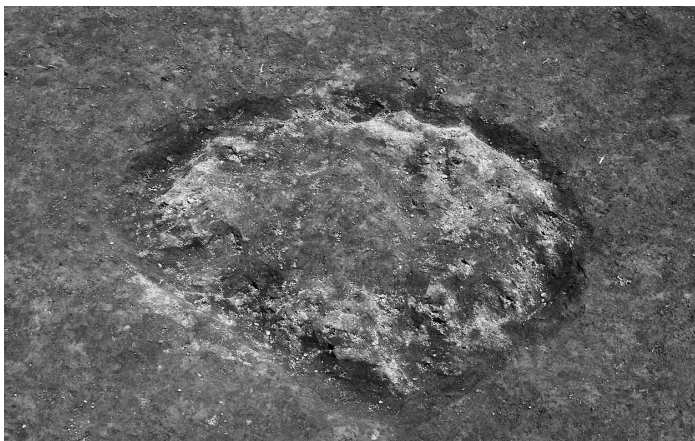
第1号住居跡



第2号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況

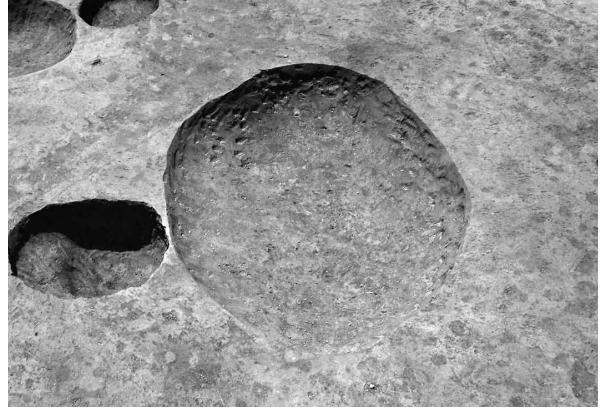


第1号住居跡炉跡

图版6



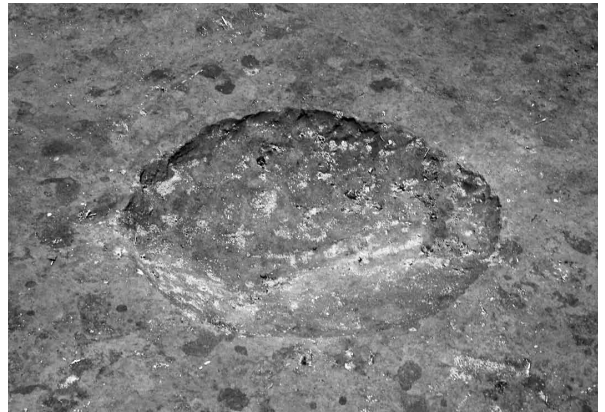
第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



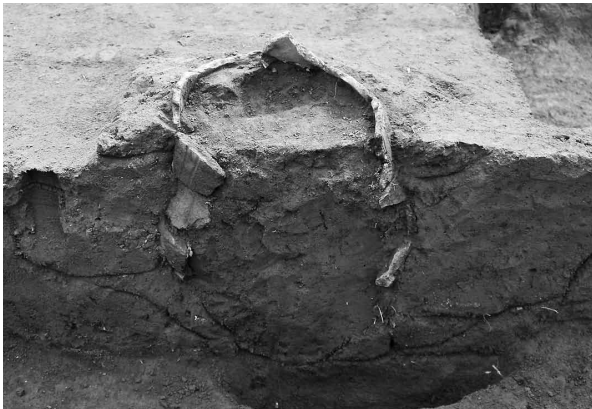
第4号土坑



第5号土坑



第6号土坑遺物出土狀況



第6号土坑断面



第6·7号土坑



第2号住居跡出土遺物



第5・6号土坑・グリッド出土遺物



第1号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物

図版8 沖山西遺跡（第2地点）



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



第3号住居跡



第4号住居跡



第5号住居跡

图版 10



第6·7号住居跡



第8号住居跡



第9号住居跡



第 10 号住居跡



第 11 号住居跡



第 12 号住居跡

图版 12



第3号住居跡炉跡



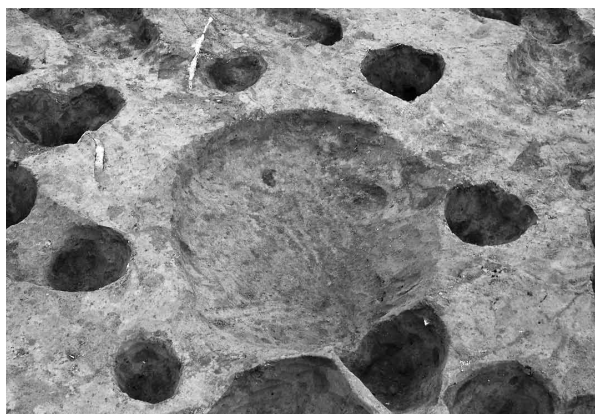
第12号住居跡炉跡



第9号土坑



第11号土坑



第12号土坑



第16号土坑



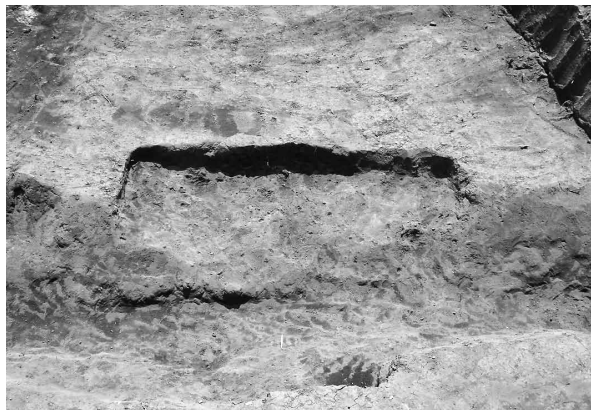
第17号土坑



第20号土坑



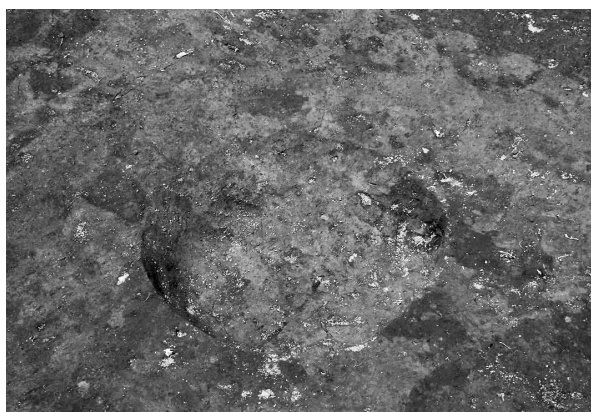
第21号土坑



第22号土坑



第23号土坑



第24号土坑



第25号土坑



第26号土坑



第27号土坑



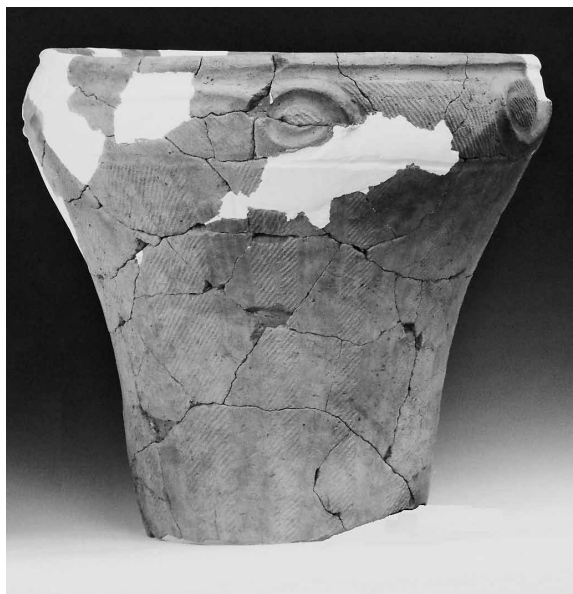
第28号土坑



第1号沟迹



第1~3号屋外炉迹



第3号住居跡出土遺物 (1)



第3号住居跡出土遺物 (3)



第3号住居跡出土遺物 (2)



第4号住居跡出土遺物 (1)



第3号住居跡出土遺物 (4)



第4号住居跡出土遺物 (2)



第8号住居跡出土遺物 (1)



第5号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物 (2)



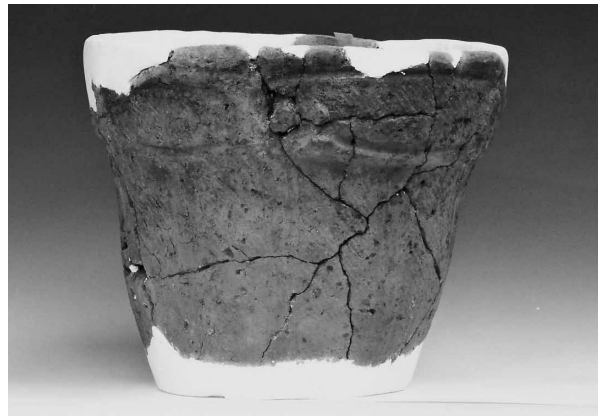
第6号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物 (1)



第7号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物 (2)



第9号住居跡出土遺物 (3)



第11号住居跡出土遺物



第10号住居跡出土遺物



第27号土坑出土遺物



第12号住居跡出土遺物 (1)



第12号住居跡出土遺物 (2)



第12号住居跡出土遺物 (3)



第1号溝跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物 (4)



第10・12・13・21・23・24・
26～28号土坑出土遺物



グリッド出土遺物



調査区全景



第13号住居跡

图版 20



第29号土坑·第1号井戸跡



第30号土坑



第31号土坑



第32·33号土坑



第34·35号土坑



第36号土坑



第1~3号炭烧窑迹



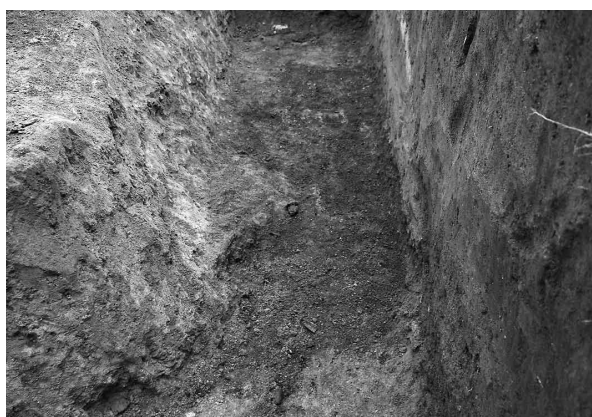
第2号沟迹



第1号炭烧窑迹断面



第1·2号炭烧窑迹底面



第2·3号炭烧窑迹底面



第13号住居跡・第29・31号土坑・グリッド出土遺物



第29号土坑出土遺物 (1)



第29号土坑・グリッド出土遺物



第30号土坑・第1号井戸跡・グリッド出土遺物



第29号土坑出土遺物 (2)



第29号土坑出土遺物 (3)



第1号井戸跡出土遺物 (1)



第29号土坑出土遺物 (4)



第1号井戸跡出土遺物 (2)



第29号土坑出土遺物 (5)



第1号井戸跡出土遺物 (3)



第29号土坑出土遺物 (6)



第29号土坑出土遺物 (7)

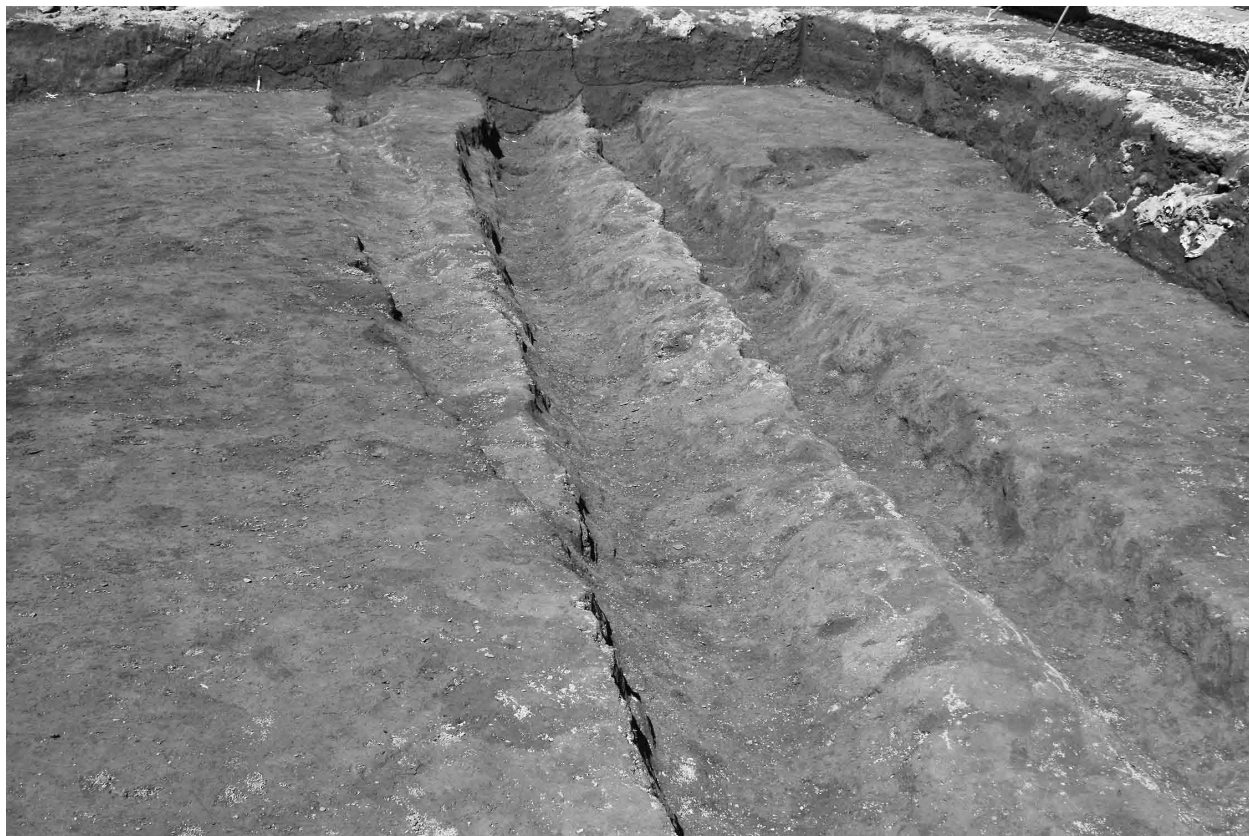


第1号井戸跡出土遺物 (4)

図版24 大町遺跡（第2地点）



調査区全景



第1～3号溝跡



第1号井戸跡



第1号屋外炉跡



第1・2号溝跡・グリッド出土遺物

報告書抄録

オキヤマイセキ(ダイイチチテン)・オキヤマニシイセキ(ダイイチ・ニ・サンチテン)・オオマチイセキ(ダイニチテン)								
書名	沖山遺跡(第1地点)・沖山西遺跡(第1・2・3地点)・大町遺跡(第2地点)							
副書名	市内遺跡群発掘調査報告書XXII							
シリーズ名	白岡市埋蔵文化財調査報告書第24集							
編著者名	杉山 和徳 奥野 麦生							
編集機関	白岡市教育委員会							
所在地	〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL 0480-92-1111							
発行年月日	2015(平成27)年3月31日							
所収遺跡 フリガナ	所在地 フリガナ	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
沖山遺跡 オキヤマイセキ	小久喜258-2、-3、 -4の一部 コグキ	11445	027	36° 00′ 20″	139° 40′ 09″	20080812	27	宅地造成
沖山西遺跡 オキヤマニシイセキ	第1地点 小久喜字沖山183-1 コグキアザオキヤマ	11445	028	36° 00′ 34″	139° 39′ 58″	第1地点 20100413 ～ 20100515	第1地点 340	第1地点 個人住宅
	第2地点 小久喜字沖山 185-17、-18の一部、 186-1、-4、-6、 187-1の一部、-2 の一部					第2地点 20100330 ～ 20100519	第2地点 1,500	第2地点 宅地造成
	第3地点 小久喜字沖山187-1 の一部					第3地点 20101018 ～ 20101114	第3地点 260	第3地点 宅地造成
大町遺跡 オオマチイセキ	高岩字大町2120-3、 -5 タカイワザオオマチ	11445	061	36° 01′ 46″	139° 58′ 47″	20090413 ～ 20090415	100	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沖山遺跡	集落	縄文時代中期	住居跡1軒	縄文土器		住居跡炉を検出した。		
沖山西遺跡	集落	縄文時代中期 奈良・平安時代	住居跡13軒 土坑36基 溝跡2条 井戸跡1基 屋外炉跡3基 炭焼窯跡3基	縄文土器・陶器・磁器・ 土製品・石器・鉄器		7～10世紀代の炭焼窯 跡3基を検出した。		
大町遺跡	集落	縄文時代中期 近世	溝跡3条 井戸跡1基 屋外炉跡1基	縄文土器・陶器		並行する溝跡3条を検 出した。		
<p>遺跡の概要</p> <p>3遺跡とも縄文時代中期を中心とした遺構・遺物が検出された。</p>								

白岡市埋蔵文化財調査報告書第24集

沖山遺跡 (第1地点)
沖山西遺跡 (第1・2・3地点)
大町遺跡 (第2地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXII

平成27年3月27日 印刷

平成27年3月31日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社